

女の子だらけの職場で
俺がヒロインなのは間
違っている

通りすがりの魔術師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハーメルン報われるものがいれば、報われないものもいる。

恋に奥手どころか、女心に気付かない八幡に青葉やひふみ、コウらが八幡を全力で攻略しに行ったらというお話。ハーメルンではなく、それぞれに物語がある。それは同時に誰かが報われないということ。

「女の子だらけの職場で俺が働くのはまちがっている」の派生作品。

本編と繋がっているとところもあれば、そうでないところもある。

??この作品には小なりアダルティーな内容を含むため、苦手な方は読まないことをおすすめします。(プロローグ時点ではありません)

目次

- 女の子だらけの職場で俺がヒロインなのは間違っている。—— 1
- ルート1 涼風青葉
プロローグ（涼風青葉の場合） 7
- 今も比企谷八幡は捻くれている。 12
- まさに飯島ゆんは姉貴質である。 22
- ルート2 滝本ひふみ
プロローグ（滝本ひふみの場合）
- その時、比企谷八幡は絶句する。 40
- ルート3 阿波根うみこ
プロローグ（阿波根うみこの場合） 46
- 阿波根うみこはやはり策士である。 55
- 比企谷八幡はチキンである。—— 60
- 『いきなり浮気ですか』—— 80
- 意外にも阿波根うみこには恥じらいがある。—— 94
- やはりその他大勢が黙ってない。

- 107 唐突に比企谷八幡は願ってしまった。
- 115
- 願ったものはそこにあった。 |
- 124
- エピローグ |
- 144
- ルート4 飯島ゆん
- 156 プロローグ (飯島ゆんの場合)
- 意外にも飯島ゆんは不器用である。
- 162
- ルート5 篠田はじめ
- 178 プロローグ (篠田はじめの場合)
- わりと比企谷八幡は気遣いがある。
- 184
- ルート6 鳴海ツバメ
- 191 プロローグ (鳴海 ツバメの場合)
- 鳴海ツバメは乙女である。 |
- 195
- ルート7 八神コウ
- 209 プロローグ (八神コウの場合)
- 色んな意味で八神コウはめんどくさい。
- 219
- ルート8 望月紅葉
- プロローグ (望月紅葉の場合)

236

望月紅葉は苦勞している。

243

比企谷小町の謀略。

254

形と状況は違えど比企谷八幡はまた来

た道を振り返る。

262

望月紅葉は思い悩む。

272

されど、比企谷八幡は澱んでいる。

281

誰かを選ぶということは誰かを選ばな

いということである。

290

目を背けても先延ばしにしなければならない

ことを比企谷八幡は知っている。

303

何故か望月紅葉は話さないし離れな

い。

317

いつだって比企谷八幡は振られてしま

う。

332

それでも比企谷八幡は泊まらない。

346

けれども、望月紅葉は。

358

ルート9 遠山りん

プロローグ（遠山りんの場合）

377

どうしてか遠山りんには躊躇いがな

い。

382

ルート10 桜ねね

プロローグ (桜ねねの場合)

390

桜ねねは頭のネジがぶつ飛んでいる。

398

女の子だらけの職場で俺がヒロインなのは間違っている。

『女の子だらけの職場で俺がヒロインなのは間違っている』とは

女の子だらけの職場のイーグルジャンプで比企谷八幡が1人のヒロインを攻略する物語である。八幡がヒロインなのにヒロインを攻略するという矛盾。この世界は矛盾まみれなので気にしてはいけない。

1年目は主にフラグの建築と友好度を上げてく。

2年目からフラグの数と友好度で攻略できるヒロインが決まり攻略開始。分岐や選択を間違えなければクリア。

友好度↓0から500まである。挨拶イベで5上がる。一定数いくと相手の態度や口調が変わる他ヒロイン攻略開始となる。

フラグ↓ヒロインとの会話やイベントで発生する選択肢で正しいものを選択すると建築される。友好度が大きく上がるが、間違えるとキャラによっては大きく下がる。

ルート①涼風青葉

発生条件↓『俺は明日、明日の涼風とデートする。』終了時点で青葉の友好度が200以上 or 他のヒロインとの友好度が200未満の時に強制発生

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓メインルート。どのヒロインともフラグを建てなかった場合強制的に発生するが分岐を間違えると一発でゲームオーバーとなる。

青葉が八幡と『何か』を手に入れる物語。

ルート②滝本ひふみ

発生条件↓『夏だ！海か！いや！コミケだ！』その先に何が待つのか比企谷八幡は知らない』の2つをクリア。かつ、友好度が200以上

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓恋という感情を初めて感じた少女のたどたどしい恋。恋をした人物ではない別の人物を架空で作り出し、八幡と練習と称してあんなことやこんなことをして

もらう。

ひふみは素直に気持ちを伝えることが出来るだろうか。

ルート③阿波根うみこ

発生条件↓『青春のマグナム弾』をクリア。かつ、2年目突入時点で友好度250以上。

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓親孝行のために八幡に協力してもらっても、それが嘘でなく本物であればと彼女は願ってしまう。

うみこは自分を武器に虚実を真実に変えられるか

ルート④飯島ゆん

発生条件↓『飯島ゆんは叱られたい』をクリア。かつ、2年目突入時点で友好度20

0以上。

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓ダイエツト。それだけ。今のところ。

ルート⑤篠田はじめ

発生条件↓『社畜になってからはじめてのおつかい』『ヲタクの秘匿は難しい』をクリア。かつ、友好度が200以上。

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓ヒーローシヨーを見るだけ。sonだけ。今のところ。

ルート⑥鳴海ツバメ

発生条件↓『これも鳴海ツバメってやつの仕事なんだ』をクリア後に友好度170以上、

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓これは青春を取り戻す物語。

ルート⑦八神コウの場合

発生条件↓『比企谷八幡は敗北をも肯定する』発生前までに友好度250以上

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓ 8×8 は64。これ1番言われてる。今のところ記載することは無い。

ルート⑧望月紅葉

発生条件↓『望月紅葉は察しが悪い』『鳴海ツバメはしっかりしてる』のどちらかを友好度170以上の状態でクリア

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓現実と理想は違うはずなのに…。

今のところ記載することは無い。

ルート⑨遠山りん

発生条件↓八神コウルートにいていない＋『場所は違えど頑張っていれば』クリア後、遠山りんの友好度が200以上の場合

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓暗黒ルート。イチヤラブ?ねえよ。

ルート⑩桜ねね

発生条件↓『桜ねねは人の休みをかつさらっていく。』をクリア。2年目で友好度が250以上。

クリア条件↓『???』をクリア。

クリア報酬↓『???』のトロフィーを獲得。

ルート解説↓最高に話すのが楽しいと思えるまで八幡が付き合わされる。それがいつなのかは当人以外にはわからない。

どのルートから進めてほしいなどのアンケートは活動報告にて受け付けたいと思います。

とりあえず、うみこさんルートから進めるのは確定です。サーセン。2番目以降はアンケート結果次第です。

03/25~04/02まで受け付けます。それ以降の投票は無効とします。

ルート1 涼風青葉

プロローグ（涼風青葉の場合）

給湯室。仕事で疲れた社員達が小腹を満たしたりリラックスするために訪れる場所である。そこに向かう1人の女性社員がいた。

涼風青葉、高卒でゲーム制作会社『イーグルジャンプ』に入社してきたキャラクターデザイナー担当の女性社員である。

「ノルマ達成まであと少し、残業しないように頑張らなくちゃ！」

歩きながら自分に言い聞かせるように元気よく呟く。別に残業しても構わないのだが、残業してしまうとある人物と帰る時間がズレてしまうのである。それが嫌な彼女はせつせとキャラクターを描いている。が、集中力にも限界があるので給湯室でお茶を飲むもうとやってきたのだが、給湯室の前で足を止める。聞き覚えのない話し声が聞こえてきて誰かいるのかなと耳を傾ける。

「でねー、キャラクター班にいる男の子なんだけど、目はアレだけど顔はなかなかいいじゃない?」

ビクツと背筋を震わせる。イーグルジャンプはゲーム会社にしては奇特で男性社員が少ない。少ないだけにいるのはいるのだが片手で数えられるほどしかないのである。そして、キャラクター班の男性社員とはただ一人しかおらず、それは青葉が好意を寄せている男であった。

「そうかなー。あ、そう言えば、この前食堂でさー」

そう言いながら給湯室にいた二人の女性は青葉のいるところと逆方向に向けて歩いていく。青葉はやつとお茶が飲めることに安堵して、中に入ってまだ仄かに温かい急須から湯呑にお茶を淹れる。

（意外にモテるんだな…）

先ほど聞いた会話を思い出すと無性に腹が立った。目はアレだけど顔はいいって外

見だけで彼を判断して欲しくないという怒りだったのだろう。飲み干した湯呑を強めにシンクに置くと後ろから声をかけられた。

「おい、何やってんだそんなに強く置いたら湯呑割れるだろ」

またビクツと背筋を震わせ後ろを向くといいたのは目はアレだけど顔は整っている男。青葉と同じく高卒で入社してきた同期で彼女にとっての想い人である比企谷八幡であった。

「い、いめん」

「いや、俺に謝られても…まあ、会社のだから気をつけるよ」

「あ、そつか。ごめんね湯呑さん!!」

湯呑に必死に頭を下げる青葉に心底ドン引きする八幡は冷蔵庫からキンキンに冷えたMAXコーヒーを取り出して軽く振る。振るように缶に記載されているのである。し

ないと中の味がバラバラになるのでしつかりと振っておこう。

「湯呑にガチ謝りしてるやつ初めて見たわ。それより休憩終わったんなら早く戻れよ」

「うん。じゃあね」

控えめに手を振って給湯室から出ていく。彼との会話はいつもこんなものだ。それに今回は彼から話しかけてくれたのでいいと言える。しかし、青葉自身はこれで満足というわけにはいかなかった。生まれて初めて心の底から好きだと言える異性に出会えた。その幸福は何にも代え難いもので出来るなら彼と共にもっとたくさんの思い出や共感を作っていきたいと思ってる。だが、相手が控えめで非積極的なのでそうもいわずにこうして『同期』という関係に甘んじてるわけだが。

自分の席に戻りパソコンと向かい合ってまた作業を開始する。

仕事をしていればそんなことも自然と脳裏から消え去り、ただ目の前のことに集中できる。それでもやはり、集中力が消えてしまうとそういうわけにもいかない。

”絶対、手に入れるから。待っててね”

不意に隣の席で欠伸をしながら作業をする彼に言った言葉を思い出した。そういえば、手に入れるからと言って自分はあの日から何かしただろうか。嫌われるのが嫌で、今の現状を維持しようとして踏み込むことはせず何もしてこなかったのではないか。それでは、彼は待ってくれるかもしれないが誰かに取られてしまうかもしれない。

そう考えた時、涼風青葉の中で何かが変わる音がした。

今も比企谷八幡は捻くれている。

生まれてこの方、彼女なんて出来たことないし当たり前前の話だが彼氏もない。1人、男でも付き合っても全然構わない、むしろウエルカムなやつがいたけど今は置いておこう。

とにかく、俺は恋人というものを知らない。

街を見れば、人目を気にせず手を繋いだり、身を寄せ合ったり、楽しげに会話してたり。

カップルによってそれぞれ雰囲気や過ごし方は違うが、見た感じ幸福そうには見える。

しかし、それが長く続くとは限らない。

付き合ってる時は良かったけど、同棲したり結婚したりとなると思ったのと違う。

そう思うカップルは少なくないんじゃないか。

そりゃ今まで違う屋根の下で暮らしていたのだ。生活リズムやら習慣に必ず差異は出てくる。

風呂には毎日必ず入るだとか、ご飯の時間が決まってるだとか。

それくらいならまだ許せる。というか、理解を示せるレベルだろう。

だが、トイレの蓋は開けっ放し、しかも出た後に扉は閉めない。

モラルや清潔感の問題になってくると瓦解し始める。

そういう小さな部分で分かり合えず破局するカップルは多いそう。お互い、注意して気をつけながら直していけばいいところを、途中でやめてしまうのだ。

今までそうしてきたことを急に変わると言われても人間難しいものなので仕方ない気もするが。

個人的な意見とすれば、それも許容出来ないのなら初めから付き合うべきでなかった。と言わざる得ない。

つまるところ、彼ら彼女らは一時の自己満足のために付き合う方が幸せを感じやすいのではないかと思う。

レンタル彼氏とかレンタル彼女とかの方が好みの顔や性格の子を選べるあたり安心だし、お金を払うだけで払った額の期間はその人は自分のモノになるのだ。

しかも、相手は商売のため自分の嫌がることはしてこないわけで、そこもポイントが高い。

もし、永続的かつ不幸にならない幸せを掴むのならレンタル彼氏、レンタル彼女を俺は勧めたい。

ここまで言つといてあれだが、レンタル出来るだけの金を持っていることが必要だし、そんな金払うくらいなら1人で過ごした方が快適なんじゃないかなと俺は思う。

以上……………

「何これ」

同じ職場で俺の隣の席に座るキャラクターデザイナーの涼風青葉は眉間に皺を寄せながら、俺の書いた作文を読み上げた。

会社から最寄りのレストランで良かった。会社で読まれてたら、八神さんあたりにか
らかわれそうだ。

「お前が俺に『自分の恋愛観について』書いてきてって言ったからわざわざ書いてきたや

つだが」

仕事を終えてやっと家に帰れると思った矢先に涼風が渡してきたのは一枚のコピー用紙。文字の大きさ、量は問わないから『自分の恋愛観について』書いてくれと頼まれた。

なんでそんなことをと疑問に思ったが、最近はずデジタルばかりでアナログで書いたりしてはいなかったたので、久しぶりに書いてみようとなりなりで書いたのだが、渡してみればなんだか不機嫌な様子だ。

「……八幡の恋愛観なんてなんか可哀想だね」

「まあ、俺の場合はな」

なんせ全戦全敗の神装機竜だからな。盤面に出ても何も破壊できないし、なんなら強くもないのにナーフされてさらに弱体化されるレベル。

「なんか思ってたのと違う」

「知らねえよ…」

そもそも、なんでそんなことを俺に聞いたのかという話だ。個人の恋愛観なんて人それぞれだが、俺みたいにまともな恋愛したことないやつに聞くのは野暮だしご法度だ。二度と聞くな。

「理由は知らんが、そういうことなら遠山さんとか得意なんじゃねえの？」

現に恋愛真つ最中だしな。相手が鈍感すぎて気付く気配はないが。だけど、同性に恋をしているのだ。きつと素晴らしい恋愛観をお持ちなことは間違いない。

「じ、じゃあ、八幡の好きなタイプについて教えて！」

「俺を養ってくれる人」

「うわあ…」

即答で答えたらドン引きされてしまった。
理不尽の極みだ。

「そういうのじゃなくて、髪が長い。とか、見た目が幼い…とか！」

「あーね」

別に特にないんだよな。強いて言うなら好きになった人が好きなタイプ。あ、でも、その理論だと俺を養ってくれる人全員タイプじゃん。やっぱり金持ちってすごいわ。

まあ、そんな人この世にいないんですけどね。そう考えると真面目に考えないと。結婚する気は無いが好きなタイプくらいはそろそろはつきりさせないと。

「常識があつて、気遣いできて、俺のダメなところを補ってくれる」

「あ、性格の話かあ…。顔とかの好みはないの？」

「人間で生物学上は女ならいい」

「何その条件!？」

待てよ、生物学上女でも外見的に男だったらどうするんだ俺は。めちやくちや声が可愛い見た目世紀末覇者とか来たらどうすんだ俺。

それで俺を養ってくれるとかなったら…うん、やっぱり働こう。働くって青春だわ。

「てか、お前はどなんんだ」

「え?…私!？」

涼風以外に誰がいるんだよ。

「うーん、顔はちよつとかっこいいくらいで普段は無愛想なのに時々優しい……みたいな」

そんなモジモジしながら言わなくても、俺以外に聞いてるやつはいないと思うんだが。

ふむ、やっぱり女は男にかっこよさを求めてしまうらしい。それに無愛想で優しい……というのは俗に言う『クーデレ』というやつだろう。

「そんな人うちの会社にはいねえだろ」

「え、そ、そうかな……」

だって、うちの会社ほとんど女の人だし。この前上のフロアで男の人は見かけたがオカマっぽい人と一緒にいたし。多分、そっちなんだろう。人は見た目によらないな。

「まあ、婚活かアイカツかは知らんが頑張ってくれ」

「ちよ、ちよつと！」

ガタツと席を立つとドリンクバーへと向かいココアのボタンを押す。カップを置い

て注がれるのをじっと見てると、後ろから涼風もやってくる。

「あのさ、八幡は彼女とか作らないの？」

「まあ、今のところは」

「そもそも好きな人とかいないし。作っても2秒くらいで別れちゃいそう。主に俺のせいで。」

「そ、そうなんだ……ふーん」

「なんなんださつきからお前。なんなの、俺のこと好きなの？」

聞くと涼風は顔を一気に赤くして怒鳴る。

「そ、そんなことないじゃん！ただの興味本位だよ！ほら、八幡ってそんな性格と目だし、モテなさそうだけど好きな人いるのかなーって!? お、思っただけだし！」

最後にバカじゃないの!?!とまくし立てられ涼風は席へと戻っていく。あいつ、ジュース入れに来たんじゃないのか…。

注がれ終わったココアを放置するくらい呆然としていたら、涼風が怒鳴ったおかげで店員さんに怒られたのでこれからあいつに飯誘われても断ろう。そうしよう。

まさに飯島ゆんは姉貴質である。

もし1つだけ願いが叶うなら俺は何に使うだろうか。超人的スペック？ 漫画の主人公に転生？ それとも素敵なお嫁さんだろうか。

昔なら最後のを欲しがっていただろう。俺を養ってくれて甘えさせてくれるお嫁さんとか、神龍も聞いたならドン引きだろう。

超人的スペックは悪くは無いが良くもない。力を持った人間というのは、自分が人であることを忘れて、他人を奴隷のように扱ったりする。他にも自分の意のままにしようとしたりとか。そういうのは俺の主義じゃないし、仮に力を持って今のままの性格だとしても、俺を倒そうだとかしてやってくる奴がいるだろう。

マンガの主人公に転生ははつきり言って無理だ。俺が。例えば麦わらの船長になつたとして俺はあの世界で渡り合えるのか。原作知識というアドバンテージがあるにしても、俺という異物が混ざった時点で原作とはかけ離れた世界になるかもしれない。ピ

ンク髪の超能力者が言っていたように、些細な行動一つで未来も過去も今も大きく変わってしまうのだ。

よってハードモードになって即死する未来しか見えない転生はしない。

最後に素敵なお嫁さんであるが、もう就職しちやつたしいらない気がしてきた。いや、家に帰れば温かい飯があつて風呂が湧いてて出迎えてくれる存在がいるというのは嬉しいことなのだろうが、まだ一人暮らしを満喫したいのだ。一日中寝てても誰にも咎められず、自分のペースで生きられる。これが気持ちいい

ということを知ってしまった身としては、もうしばらくこの生活を楽しみたい。

だから、今俺が願うこととすれば隣で俺を睨みつける涼風青葉をどうかして欲しい。という事だろうか。

「……………ふんー」

ちらりと俺が見れば、涼風はそっぽを向いて自分の仕事に戻る。昨日、涼風と飯を

食ってからこんな感じである。朝も顔を合わせずに素通りと完全なる無視。これはポツダム宣言無視されたアメリカとかの気持ちがよくわかる。

まあ俺はこういうこと慣れてるから別にいいんだけど、それを良しとしないのが周りの先輩方である。

「なんかピリピリしてるけど」

「青葉ちゃんと何かあったん？」

「喧嘩……?」

給湯室にマツ缶を取りに行って戻ろうとしたら、退路をはじめさん、ゆんさん、ひふみ先輩に塞がれて何故か質問責めにあつた。ここそんなに広くないし、誰か来たらいけないから早く出ようと足を進めようとするが、そうする度に3人が詰め寄ってきて身動きが取れない。とつたらひふみ先輩とはじめさんの巨峰に触れてしまう。ゆんさんは大丈夫ですね。

「話すまで逃がさんで」

「ええ…」

じゃあ俺が話すまでこの状況なのか。それは後で遠山さんとかが来て怒られたら全部俺のせいになるのでは？ なるほど嫌らしい作戦だ。いや、この考えに行き着く俺もひねくれてるなあ。

「で、どうなの？」

「どうって…特に心当たりがないんですが」

本当はない。作文書いて出して読まれてなんか怒って、という感じだ。俺がなにかした点は特になかったように思う。

「昨日何があったか、聞いていい…？」

「……いいですけど、とりあえずここから離れませんか？」

邪魔になりますしと付け足すと3人は頷いて道を開ける。そして、場所を食堂に移して昨日あったことを端的に話した。

「作文？」

「それを見て青葉ちゃん……怒ったのかな？」

「セクハラでもしたんか？」

してないですよ。全く心外だなと悪態つく。ズボンが昨日のと同じだったのでポケットに折りたたまれた作文が入っていたので3人に渡すと読み始める。美少女3人に恋愛観の作文を読まれる社会人2年生(♂)の構図は傍から見ればシニールだろうし、目の前で読まれるのも非常に妙な気分だ。平塚先生に作文を読み上げられた時のように思考をクルツクルツしていると読み終えた3人は顔を上げた。

「なるほどこれは…」

「うん…」

哀れなものを見るような目ではじめさんはそつと作文を折りたたみ、ひふみ先輩が窓の外を見細める。どうやらかなり呆れられてるらしい。ゆんさんはぽんと肩に手を置いて「頑張れ」と主語のない励ましをしてきた。辛い、先輩方3人の同情が辛い。

「でも、これ読んで青葉ちゃんが怒る要素ある？」

「読ませた後に何か言っただんじやない？八幡だし」

俺ってそんなに余計なこと言っただ人怒らせてるかな。全く身に覚えがないが、あつたのだろうか。

「八幡、青葉ちゃんに、昨日何か言っただ？」

「ああ、なんか好きな人いるのかってしつこく聞かれたから、なんなの俺の事好きなの？
っていいました」

今思い返せば思い上がりも良いところだ。好きな人いるって聞かれたら、聞いたやつ
が自分のこと好きだなんて。そんな話のソースは俺です。はい、俺が聞いた人全員好
きでした。まあそれも中学の時だしもう関係ないよね。

「なるほどな…」

「ん？何？どしたのゆん」

「はわわわ…」

先程の同情の目から、我が子を見守るような目になったゆんさんにはじめさんが首を
傾げる。ひふみ先輩はよくわかんないけど可愛い声出して顔赤くしてる。なんだあの

かわいい生き物。

「なんやしようがないなあ」

「え、何が？」

「うん？ いや、これは二人の問題やからうちらは関係ないってことや」

「はわわわわ……」

ゆんさんに手を引かれて困惑したはじめさんと機能が停止したひふみ先輩が連れつかれる。そして、3人の姿が見えなくなる前にゆんさんは顔だけ覗かせた。

「八幡、明日までに青葉ちゃんと仲直りしときや」

そう言い残して、ギャーギャー言ってるはじめさんを宥めながらゆんさんは出ていく。

仲直りか、喧嘩した覚えはないが上司の命令なら仕方ない。

「てことで、涼風、飯行こうぜ」

「…は？」

一日のノルマを終えて社外へ出る前に俺は涼風にそう声をかけた。至って自然にかつ、シンプルに。まるで放課後に同級生に声をかけるようにだ。まあこんな風に誰かに声をかけたことは無いんだが。大抵、1人になるのを待つてからとか姑息な感じなのだが、今回は普通にある。

なのに涼風から返ってきた反応は「何言ってるんだこいつ」という怒りを通り越した呆れの顔であった。

「なんで？」

そういえば理由を考えていなかった。こういう時リア充とかはなんて言うのだろうか。とりあえず、俺が知ってる中でも一番爽やかイケメンなやつが言いそうなことをトレースしておこう。

「なんとなく、だな」

「……………ふーん」

ここでにこやかにスマイルゴーゴーしても良かったがそうした場合、返ってくる言葉が恐ろしく辛辣なものになるからやめておいた。

「分かった。じゃ行こう」

涼風はそう心なしか少し綻んだ笑顔で言う、片付けの手を早めてカバンにものを仕舞うと立ち上がって背を向けてお辞儀する。

「皆さんおつかれさまでしたー！」

「おつかれ青葉ちゃん」

声もありで反応したのははじめさんだけで、ひふみ先輩とゆんさんは手を振ると俺に向けてぐっと拳を握る。まるでファイトだよつと言ってるようだが、特に頑張るようなことではないと思うが、なんかやれそうな気がする！これがひふみパワーか…。

ゆんさんは癒しというより、お姉ちゃんって感じだな、ほんと。

###

「で、どこに行くの？」

会社から出て開口一番に聞かれてそういえばまた考えてなかったなど顎に手を置く。
「ここは先程と同じように葉山の霊を憑依しよう。」

「あーうん、そうだな…」

「もしかして、またなんとなくぶらつく、なんて言わないよね」

ちつ、なんだよあのイケメン使えねえな。多分こんなこと言ったらあいつに「なんでだよ」って真顔で言われるんだろう。俺も言う。

さてと、どうしたもんかなと頭を捻る。考える比企谷八幡。ここでパーフェクトで完璧な策を講じるんだ…。そう俺が神経を集中している時、ため息を吐かれた。

「まあいいんじゃない。適当で」

「…いいのか」

「うん、どうせ八幡だし。諦めた」

俺だから仕方なく納得するみたいな風潮なんなの。そんなにいい加減というか優柔不断だろうか…。小町にまた今度聞いてみよう。

「よし、じゃ適当に行くか」

「うん！」

とりあえず商店街とか飲食店が立ち並ぶであろう駅近くまで行こうと歩き出した。その間、涼風が話しかけてきて、たわいもない話をする事となった。

「八幡つてさ、昔からそんな感じなの」

「そんなってどんなだよ」

「…自分で分からないの？」

ジト目を向けられて思わずそっぽを向いてしまう。自覚はないが深層意識では自分のいい加減さとかに気付いてるらしい。

「……それより何食べる!? 何する!? 今日は楽しもうぜ! な!」

「う、うん…」

無理やりテンションを引き上げたのに、逆に涼風の目は大変冷ややかだ。涼風を戸塚だと思つて頑張つたのに。

「てか、お前明日休み？」

「え？あ、うん、多分？」

自分の休みくらい把握しとけよと思ったが、たまに曜日感覚狂って「今日は休みだったか、仕事だったか…」ってなってしまう。そこで確認するために起き上がってカレンダー見なきないけないんだよなあ。

「休みだったら……なん、なの？」

「え？ いや、明日休みなら今日疲れてもゆっくり出来るだろうって」

「…まあ、確かにね」

少し腑に落ちないといった顔だが、また仕方ないとうんうんと頷く。

「で、どうする？」

目的の美味しいお店が立ち並ぶという辺りに着いた涼風は足を止めて首を傾げる。

こういう時に相手の好物に合わせて選ぶ男の甲斐性とか良きを出すべきなのだろうか。でも、残念ながら涼風の好きな食べ物は知らない。だから、万人に受けさせて女の子にも食べやすいやつになるか。

「あそこでいいんじゃないか」

適当に見渡して目に入ったハンバーグ専門店を指差すと、涼風はパアアつと笑顔を咲かせた。

「いいね！行こー！」

無邪気に笑う涼風は浮き足でお店に入る。それに続いて俺も入店し、ドアを静かに閉める。店員さんに案内されて窓際の席に着くとメニューを開いて「どれにしようかな」と目を輝かせる涼風に思わず顔が綻ぶ。メニューが一つしかないから2人で共に見る形になり、顔が少し近い。そのせいで肌が綺麗だうちの母ちゃんとは大違いだなんて当たり前前のお事をおもってしまう。

「よし決めた！そっちは？」

「決めてる。店員さん呼ぶか」

「うん！ あ、私が押すね！」

涼風がボタンを押せばピンポンと音がなり、すぐさま店員がやってきて注文を聞きに来る。涼風は100%国産ハンバーグセット、俺はハンバーグ&ステーキセットを頼み、注文聞いて厨房へ行く店員さんを見送る。それで涼風がさっき頼んだハンバーグのソースについて尋ねた。

「というか、大丈夫なのか赤ワインのソースって」

「なんで？」

だってウイスキーボンボンで酔っ払ってたのに赤ワインのソースって大丈夫か？

まあ未成年でも食えるって書いてるからアルコールは気にならない程度だと思うが。

「いや、ならいいけど」

大事には至らないだろうと言葉を切って、水を飲んで外を眺めた。といっても、見えるのは街並みとかじゃなくて建物を囲ってる柵にへばりついてる蔦の葉とかしかないけど。

それでもウキウキと楽しそうな涼風を見るのはなんとなくはばかられた。

ルート2 滝本ひふみ

プロローグ（滝本ひふみの場合）

最初は「目が腐っている」と思った。だけどそれからすぐに「ひねくれた後輩」だと感じた。そしてその次は「……」。

とある商業施設の中の化粧品売り場で物思いに耽る女性がいた。仄かに赤っぽい色素を含んだ髪をポニーテールに纏めたその女性はどこか愛らしさを含んでいる。

「……はあ」

趣味のコスプレの時に使うつけまつげやらアイシャドウやパウダーを買うべく来た滝本ひふみだが、コンディショナーが陳列されている棚の前に立ちすくんでため息を零した。いつからか、自分の頭の中をある人物が埋めつくしていた。今もその人物のことを考える。

短髪で切り整えられた黒い髪に、整った顔のパーツ。これだけならとても好印象な男の人。だけど、それらを台無しにするくらいに死んでいる目。

性格は良くも悪くもひねくれており、自分が腐っているのは世界のせいだと言う。しかし、やることはしつかりやるという真面目さを見せる。とある人物曰く「捻デレ」ということらしいが、なんとなく腑に落ちた。

さり気なく歩幅は合わせてくれるし、ペットの話にも興味を示してくれるし、頼んだら一緒にコスプレもしてくれた。初めは話慣れない男だったので緊張したが、自分が先輩だからと頑張って会話するうちに仲良くなった。普通なら断られるであろうコスプレやコミケに誘うと快くOKしてくれる”とてもいい人”だと思った。

それがいつからだっただらうか。

目が合えば心臓がドクンと高鳴り、体の一部が触れそうになると血が沸騰しそうになる。何かの病気にかかったのだらうかと思つたが、それがその男”比企谷八幡”に対して恋心を抱いていると知つた時はベッドの上で悶絶しまくつた。

自分は恋愛に疎い方だと思っていたし、誰かを、ましてや男を好きになるなんてあるはずがないと思っていた。自分が好きなのはペットと自分だけだと、そう思っていた。だが、恋というものを知ってしまった彼女は釈然としないがそれでもしつかりと受け入れた。

自覚してからはそれがさらに加速して、可愛く見られようと服装も変えてみだし、勇気を振り絞って食事に誘ったが特に進展はなかった。自分のせいなのだろうかと肩を落とす。

「お客様何かお探しでしょうか？」

いつもは話しかけられる前に撤退するひふみだが、想い人のことを考えていたらターゲットにロックオンされてしまった。

「い、いえ、何でもないです!!」

それを全力で振り切って店の外に出る。あまりに突然のことで息を整えるように深

呼吸をする。まさか自分が人の気配に気づかないほどに考えてしまうとは思わず反省する。だが、よく言うのとそれだけ八幡のことを考えていたということになる。

気分転換に本屋に行つて新作の小説が並べられた棚を見る。読書は趣味ではないが、八幡が休みの日には本を読んでいると言つていたので話の種になるようにと読み始めたのだが、これといつて好きなジャンルがない。それ故に、こうして新作コーナーを見てはうーんと頭を悩ませる。

(八幡、ラノベも読むつて言つてたけど……)

原作派でなく、アニメやコミカライズなどで見る派のひふみにとつてはラノベとはあまり近いものではない。よつて、ライトノベルも購入の対象にはならない。

一応、ライトノベルコーナーにも寄つてみたものの相変わらず異世界俺TUEEE系ばかりではつとしないため引き返そうとすると、ある小説が目に入った。

手に取つて表紙を見ると、電車のホームのベンチに女の子と男の子が離れて座つているといふパツと見だが、ライトノベルのような印象を受ける。しかし、ひふみが手に

取った理由は表紙ではなくタイトルである。

ペラっと中身を開けて見てみれば、学園モノらしく、最初の方だけ読んでみたら、成績が中の中くらいの子の主人公が参考書を忘れた女の子に親切に見せてあげようとしたのを断られていた。ここだけ見ると、女の子が「イヤな女」という印象を受ける。

この先も続けて読もうと思ったのだが、こう人の目があるところでは集中できないと思つて本を購入するべくレジに並んだ。

もし、飽きても古本屋で売ればいいからとなんの迷いもなく買った本だが、夜には半分まで読み進めており、ひふみは一旦、本を閉じて置くと、天井を見ながらこう呟いた。

「私も、君に恋するなんて、ありえないと思つただけだな…」

横を見ると愛しのペットの宗次郎がムシャムシャと晩御飯の入った小皿にかじりついていた。それを見て、微笑んだひふみはそのまま宗次郎に尋ねた。

自分は、これからどうすればいいかと。

その時、比企谷八幡は絶句する。

ある日の昼下がりが。いつもどおり、仕事している。他の同級生は今頃テストが終わって夏休みをエンジョイしている事だろう。

大学生のリア充でパリピー共は昼間から家でボードゲームしてたり、ディスティニーアイランドに行ったり楽しく過ごしてるかもしれない。でも、就職した俺は働いてるし、そもそも呼ばれてすらいねえ。

実際、由比ヶ浜や戸部とかのSNS見てたら思いつきで皆様お誘い合わせの上、旅行に行ったりしている。あげられている写真には笑顔の戸塚がいるが、俺はいません。働いてる。

多分、断ると思うけど誘ってほしいです。

でも、よく考えたら。いや、よく考えなくて俺が大学に行ってこいつらと共に写真を撮っていたか。答えはNOである。ネットに載ったら一生残るこの世界でそんな自殺行為はしないし、そもそも撮ってもらえない。下手したら映らないまである。

それに大学でホイホイ女の子と絡めない。だって、同性ですら難しいからね。

その点この職場は女の子には恵まれている。これだけ言うとなんかゲスいな。逆に言うとなんか男がないので増やしてください。血涙を流して訴えたい。

「あ、青葉ちゃん」

「はい、ひふみ先輩？」

「こ、これ、は、八幡に……じ、じゃー！」

それでもって、職場でも嫌われ始めたのでほんとに心の拠り所が欲しい。もう材木座でもいいからきて欲しい。あいつなんで友達が出来てるんだよ、おかしいだろ。そんなの作る暇あったら小説書けよ。

「ねえ、八幡、これひふみ先輩から」

「……え、あ、うん知ってる。あんがとな」

「……ひふみ先輩と喧嘩でもしたの？」

「いや、喧嘩どころか最近では会話すらしていないな」

ほんとなんてか知らんけど。データの確認でデスクに行ってもいないし、目が合ったら逸らされる。

もう死んじやつてもいいかな…俺。

「何かしたんじゃない？知らず知らずのうちに」

まあ、人は生きてるだけで嫌われることの方が多しな。俺なんてただ息を吸って吐いてるだけでいじめられてたからな。

ふとした拍子に思い出したくもないトラウマ思い出しちゃったよ。

「何かあったか聞いてみようか？」

「いや、いい自分で聞くわ」

それで涼風とひふみ先輩に何かあつたら面倒だし。俺一人が嫌われて済むなら別に大丈夫だろう。

また後で、渡された書類の作業やって報告する時にでも聞けばいいだろう。

とか、思ってたら終業時間になっていた。

まさか俺だけキング・クリムゾンされた…？

そんなことはなく、ただ近づけば遠ざかられ、話しかければ急に振り返って逃げられたり。

つまり、何も聞いていない。仕方ない、だってエンテライコウスイクン並に逃げろんだから。あいつらはくろいまなざしすれば逃げないからマシだけど、ひふみ先輩にはしても逃げられた。

ここまで避けられるということは俺は重大な何かをしでかしたのではないだろうか。考えてみるが、ぱっと思いつくことは無い。この前描いたキャラの仕様が悪かったくらいしか思い当たらないし、それくらいで嫌うような性格でもないだろう。

考えながらエレベーターに乗り込むと前から急いで駆け込んできた人がいたので『開』ボタンを押してその人が乗るのを待つ。が、その人は俺を見るなり足を止める。

「あ、えっと、あ……ううう……」

あたふたと赤くなった顔を覆ってうずくまる可愛いこの人は誰だ。こんな可愛い小動物いたかな。あ、ひふみ先輩か。

「あの、乗らないんですか？」

「え、あ、えつと……」

エレベーターも乗りたくないくらいに嫌われてるのか。その事にかなりショックを受けつつ俺はボタンを押しながらエレベーターの外に出る。

「どうぞ、俺階段で降りるんで」

「な、なんで……?」

「俺と乗るのが嫌なんじゃないんですか？」

「そ、そんなこと……!」

と急に立ち上がり、体勢を崩して地面に倒れそうになるひふみ先輩。

「おっと」

それを間一髪で支える俺。

肩を手で支え、目の前にひふみ先輩の顔がある。

倒れなくて良かったと一息ついて大丈夫ですか、と聞く前にもものすごい勢いで身を引くひふみ先輩。

マジでどんだけ嫌われてんだ俺。

「……………あ、あ……………りがと……………」

「あ、いえ。じゃあ」

そう言って階段の方へ向かおうとすると、服の袖を掴まれる。あまりに突然なことに驚くが、さきほどよりも顔を真っ赤にしたひふみ先輩を見てさらに驚く。

「ど、どうしたんですか?」

まさか俺に触れられたからってそんな怒った顔を？責任取ってよねパターン？冤罪なのに裁判でギルティパターン？

「……そ、相談に……乗ってほしいの……」

「はい？」

「す、好きな人が……で、できたの……」

その瞬間、俺の中で稲妻が走る。

「え？好きな人……ですか？」

「う、うん……だから、相談に……乗ってほしいなって……だ、だめ……かな……？」

今までの嫌っていた態度が嘘かのように詰め寄って上目遣いで訴えてくるひふみ先

輩に俺は……俺は……もう限界です。

ルート3 阿波根うみこ

プロローグ（阿波根うみこの場合）

「はい、……本当にごめんなさい。じゃあ、また」

電話を終えると手に持っていたスマホを机に置いてソファに沈み込む。小テーブルの炭酸飲料の入った缶を取って一気に飲み干すと「ふう」と息を漏らす。

「結婚……ですか」

地元の友達が結婚した。会社で知り合った部下らしく、1ヶ月後に結婚式をするらしい。阿波根うみこはそれに呼ばれたのだが仕事上、どんなタイミ_グで厄介事を持ち込まれるか分からないため謝罪して断った。できるものならいつてお祝いしてあげたいが、上司が自由気ままな人なのでそうもいかない。まあ、ちゃんと言えば弁えてくれる

だろうが。それでも不安なのである。

「そういえば、葉月さんは結婚しないのでしょうか」

呟いてから即否定する。理由は猫を飼っているからだ。独身の女性が猫を飼い始めたらもう終わりだと聞いたことがある。迷信かもしれないが、しずくに結婚願望があるようにも見えないのであながち間違いでもなさそうである。

プシュツ、と新しい缶を開けて喉に流し込む。沖繩から送られてきた缶ジュースが思ったより量が多くて処理しているのだが一向に減る気配がない。

「明日会社を持って行って配りましょうか」

お世辞にもこのジュースが万人に受けるとは言えないが、謎の中毒性はあるので誰か一人がハマればあつという間に無くなることであろう。

そう決めるとプログラマー班の人数分の缶を紙袋に入れる。入れてみるとあと一人分ほど入りそうなスペースがあった。

お世話になってるわけではないが上司だし葉月さんにも配ろうか、と思案したがその後すぐに違う人物が上がってきた。

(何度か分けてもらってますし…お礼と言えば…)

MAXコーヒー。関東圏を中心として売られている練乳とミルクの中にコーヒーを少量入れたようなコーヒーである。普段、ブラックを飲んでる人間からすると甘すぎるのだが、それにも独特の中毒性があるのだ。

それを毎日のように飲んでいるのが比企谷八幡という、うみこの直接の部下ではないものの、会社の立場上後輩にあたる人物である。

葉莢に興味を示したため、サブゲーに誘ってみたら思いの外手強い。手強いというのは戦闘能力のことであり、断られたというわけではない。隠密行動に長けており、敵地のフラッグを一人で奪還したり、リボルバーで自分を的確に撃ってくる。もし、生まれの時代が現代でなければ英雄になれていたであろうと感服してしまう。一度、どのような体つきをしているか見てみたいものだと思つていたりする。

会社では後輩だが、外ではたまにサバゲーをする関係とどこか異質である。それでもうみこは貴重なサバゲー仲間を見つけることが出来て万々歳であるのだが。

「今度は結婚相手も見つけないといけないのですか……」

こめかみを抑えてまた大きくため息を吐く。友人との電話の時もそうだが、その前に沖縄の実家から電話があり、その時に母親にこう言われたのである。

『孫の顔はいつ見れるのか』

知るかそんなの、と悪態つきたくなるが確かに死ぬ前に親孝行はしてやりたい。しかし、相手がいないとどうしようもない。友人にも『可愛いのだから彼氏くらいすぐできるでしょ』と言われたが、会社に男もいないし合コンなどにも行かないため、そういう縁には全く恵まれていない。

「せめて、男の顔でも見せれば安心するでしょうか……」

此方、彼氏どころか仲のいい男など幼き頃に可愛がってもらったアメリカの兵隊か自衛隊の人間のみである。それを除けば……

「ダメ元で頼んでみましょうか……」

日課の筋トレをし、シャワーを浴びて歯を磨き布団に入る。受け入れてもらえるかは分からないが、彼なら事情を話せば引き受けて貰えるだろう。

それに、こんなことを頼める相手など他にいないのだから。

阿波根うみこはやはり策士である。

何回言ったら分かるの、と生きていけば一度は耳にしたことがあるだろう。だいたい子供の頃にはよく母親に言われたという人間は多いはずだ。

散らかっている部屋を片付けるように言われたり、試験が近いから勉強しろと繰り返言われたことがあるだろう。

なぜ、繰り返し言われるのかは自分がしていないからと明白なのに、それでも「うっせえババア!」と反抗して関節技をキメられるのはよくあることだろう。え? ない? あ、そう…。

他にも先生に教えてもらったことが理解出来ず、何度も聞き返してしまおうと言われがちだ。

これに関しては、分からない自分が悪いというわけでもなく、相手の教え方が悪いという解釈もある。

実際、学校の先生よりも予備校の先生の方が教えるの上手くて分かりやすかったしな。

「ということ、共に沖縄に行ってください」

「ちよつと待つてください…」

「またですか」

そう、何度説明されても分からないものは分からないのだ。例えば、地元の友人が結婚したし、実家の母親を安心させたいから婚約者のふりをしてくれと、言葉にすれば簡単に理解し難いものは、理解できないのだ。

俺の返答に個室の焼肉店の一室で目頭を抑える阿波根うみこさんは俺の直接の上司ではなく、プログラマー班の人で本来なら直接的な関わりなど皆無。だが、うみこさんの趣味であるサバゲーに駆り出されてからプライベートでの関わりが多くなり、それを機に職場でも話すようになった。

「これで4度目ですよ」

確かに仲良くというか親しくなってきた感じはしていたが、なんでその相手を俺に頼むのかが理解できない。

母親を安心させたい。その気持ちは分からなくもない。10年後くらいまでには俺もそろそろ孫の顔でも見せてやりたいなどか思ってた頃だ。随分、先の話だが。

まあ、うちの親は小町の方が心配で俺がどこでどうしようが知ったもんじゃないだろう。

でも、母ちゃんの方は女はできたのかとかメールで送ってくるし、親父も孫はお前が作れとか意味不明なことをメールを送ってきたし。

やはり、親というのは孫の顔が見たいものなんだろうか。

「あの、質問いいですか」

「構いませんが」

「うみこさん同級生の知り合いとかにこの話は？」

沖縄出身といっても、うみこさんのように東京にでできたという人は決して少なくは無いはずだ。その中に一人くらいはうみこさんと同い歳で仲のいい人というのはいらるだろう。

「いないこともありませんが、こっちに来てから会ってもいませんし、連絡先も知りません」

それっていないって言うのと相違ないんじゃないですかね。

水を飲んでみると、店員さんが入ってきて注文を聞きに来る。それにうみこさんはメニュー表片手に対応していく。何か食べたいお肉はあるかと聞かれたので、カルビと牛タンなどを頼むと、スラスラと店員さんがオーダー表に書いていく。

「でも、意外ですね。うみこさん結構モテそうなのに」

「ええ？……まあ、高校時代はよく告白されたりしましたが、どれもお断りしました」

ほらね、やっぱり。

普段は無愛想だが、人によってはそれがクールに映ることもあるし、顔もクールでどこかお淑やかさがある。身体も引き締まっていて確かな魅力があるはずだ。

この話に興味があるのか少し残念そうな顔で店員さんが扉を閉めて出ていくのを見て、さらに続ける。

「どういう人に告白されたんですか？」

興味本位で尋ねてみた。普段なら「そーなのか」と適当に流すが、うみこさんに告白する猛者に関しては何故か興味が出た。

すると、うみこさんはふと窓の外を見つめてこう零した。

「全員女性でしたが、あまり覚えていません。でも、確か男性の方にも告白されましたが陸上自衛隊の方と比べると貧弱だったのは覚えてます」

比べる対象がハードすぎる。

現役の中、高校生がそんな恐ろしいマッスルボディしてるわけないし、もしそんなの

が同じ学校にいたら身震いして逃げ出すわ。

「てか、陸上自衛隊の人の身体見たことあるんすね」

「ええ、サバゲーに誘ってくれた方と着替える場所が同じだったので」

そんな頃からサバゲーしてたのかと驚くが、昔から葉集めてストックするような人だったらしいし必然なのかもしれないな。

にしても、その誘った人というのも気になるな。一緒に着替えたということは女性なんだろうけど、

「……まさかと思えますけどその人は」

「女性ですが」

陸上自衛隊の女性のマッスルボディ恐ろしいな……。多分、野球部とかラグビー部の人
が束になっても勝てないんじゃないだろうか。それと比べられた勇氣ある少年達に追

悼の意を捧げたい。

「それで話を戻しますが、先程の話引き受けてくれますか？」

「いや、でも…」

俺でいいのだろうか。

こんな目が腐っていて、髪もはねまくりで普段は自堕落な生活を送っている俺でうみ
こさんの母親は安心するのだろうか。

これは簡単に承諾できない話だ。

「私は全然構わないので、あとは比企谷さん次第です」

難しそうな顔をする俺にうみこさんは真剣な目で見据えてくる。

「もし無理なら他を当たります」

「他？他がいるんですか」

「いえ、今はないのでお店を出てから適当に探します」

適当について……それ相手によつてはめちやくちやにされ……ないな。うみこさんだし、返り討ちにしようだ。

しかし、即席で素性も全く知らない彼氏を連れてこられたうみこさんの母親は余計に不安になるだろう。

そう考えれば俺が少し顔を出して話すだけで済むなら、と話を受けようと心を決めると、焼いた肉を皿に盛りながらうみこさんがこんなことを口にする。

「あ、あと、比企谷さんがこの話を断った場合今まで食べた肉は自腹で払ってもらいますのでそのつもりで」

「え」

言われてメニュー表を見ると食べ放題しか行ったことがない俺には信じられない額

が並んでいる。大人の焼肉店って1人前でこんなに取るの…？

なんか1桁多い0に驚愕していると、うみこさんはニコリと微笑む。まるで、この先俺から出る言葉が分かっているように。

「……快く受けさせて貰います」

「わかりました。では、食べましょう」

こうして、この日から俺とうみこさんの「母親を安心させるための仮の」カップルが成立することになった。

比企谷八幡はチキンである。

「で、具体的に俺は何をすればいいんですか？」

高級焼肉店で文字通り焼肉を頬張り食べ終えて一息ついたところで、ある話を引き受けたら勘定を出してくれると言ったうみこさんに目を向ける。カシスオレンジの入ったグラスを傾けて机に置くとうみこさんは口を開く。

「そうですね、結婚を前提に付き合ってるということ私の母に会ってもらいます」

うみこさんからの話というのは俺に彼氏役として阿波根ママに俺を紹介するというものだ。母親を安心させてあげたいという親孝行なのだろう。それに俺は肉を罫に付き合わされることになった。食べ放題とかのお肉と違って専門店とかになるとやはり味は段違いでいつもより食べた気分になる。これを俺が食べた分だけでも払おうと思っても皿洗いだけでは済まされないのだが、今回は数皿食べたところで脅されてし

まっつて払えない状況に追い込まれてしまった。うみこさんめ、策士すぎる。

「でも、そんな都合よく信じてくれますかね」

さつき成立したばかりの愛のないカップルだ。昔に永遠の愛を誓ったわけでもなく、お互いの親がマフィアやヤクザで仕方なく付き合う訳でもない。偽の恋人といつても、他人そう簡単に騙せるほどの雰囲気は全くない。

「会うのはまだ少し先です。それまでにそれっぽくなりましょう」

「それっぽくって例えばばどんな」

あれか手を繋いでみるとか、腕を組んだりしてみるとか？考えてみたが何の興奮もなかった。そもそも、うみこさんがそんなことをするような人には思えない。この人の愛情表現の仕方が分からないというのもあるが、俺の恋愛経験が少ないからカップルっぽいことに関しての知識がない。だから、それっぽくというのがイマイチ掴めない。

「まずは名前で呼び合しましょう」

それなら俺はもううみこさんって呼んでるから問題ないな。てか、恋人になつたら名前で呼び合うルールは謎だ。別に苗字でもいいだろ。入籍しない限りは間違いないやないんだから。それに名前を呼ばれたくないとかそういうデリカシーも考えない。うみこさんの場合は苗字を呼ばれたくないんだっけ。そういう事情がある時だけでいいと思います。

「私は『八幡』と呼びますので、『うみこ』と呼んでください」

「え、もううみこさんって呼んでるんですけど」

「その『さん』を取るだけです。特に変わりはありませんでしょう」

確かにそうだが躊躇いがある。そんな気安く呼んでいいのだろうか。仮に付き合うからと言って歳上だし、さん付けで呼ぶべきだと思うのだが。

「いや、うみこさんは歳上ですし、それに社内でも問題になるんじゃない？」

「仮とはいえ付き合うわけですしそんなの気にしなくていいでしょう。後者は社内だけでさん付けすれば特に何も無いでしょう」

何も無いのだろうか。うみこさんが呼び捨てで呼ぶとか聞いたことないんですけど。察しがいい人には勘づかれるのではないだろうか。特に遠山さんあたりは。

「では、一度呼んでみましょう」

姿勢を正して深呼吸するとうみこさんは小声で俺の名前を呼ぶ。

「は、八幡…。なるほど、これは少し気恥しいですね」

だったらやめませんかと俺が言おうとした時「ですが」とうみこさんは微笑む。

「言っていれば慣れるでしょう。さて、次は八幡の番ですよ」

oh……なんて考え方してんだよこの人。慣れたらいいかとか、絶対サバゲーで培った思考だよ。意外にそういうの気にするのかとときめいたけど、一瞬で元に戻っちゃったよ。

にしても、次は俺か。相手がいいと言ってるからとそれに甘んじて敬意を抜いてもいいものだろうか。基本的に歳上には敬意を払うようにしてるが、うみこさんの場合は気前よし器量よし、仕事もできるし面倒見もいい。加えて顔やスタイルもいいとなれば尊敬しないはずがない。

そんな現実逃避にもならない時間の先延ばしをしているあいだに数分経ち、それまでずっと俺を見ていたうみこさんは店員さんが置いていった紙切れを俺に広げる。

「え、えと……」

早く言えとばかりに向けられる2人で食べた肉の量とそれを値段換算した万を超える伝票に俺は冷や汗を流す。それを向けるうみこさんの目は鋭くなり、とうとう「まだですか」

と少しご立腹の様子だ。

「う、う…うみいきよ……」

恥ずかしいあまりに噛んでしまい俺は額を机にくっつけて沈黙すると、呆れたようにうみこさんがため息を吐く。

「チキンですね。牛と豚に謝ったらどうですか」

「すみません…」

細々とした声で胃袋に入った牛や豚さんに謝罪した。チキンなのに食べてすみません。

「まあ、これは少しずつやっていきましよう」

少しずつやるのか…。嫌だなあ。なんか1日1回練習しましょうとか言ってるし。

地獄だぞこれ。

「てか、その、沖繩にはいつ頃か決めてるんですか」

話題を変えるためにムクつと顔を上げて言うと、うみこさんは手帳を取り出すと開いて机の上に置く。

「今の作業ペースですとだいたいここからここまでの約五日間ほどお休みが取れると思うのでこの辺りを予定してます」

なるほど、今から約1ヶ月ほどか。つまり、残り1ヶ月で本物のカップルに近い偽物の恋人を完璧に演じれるようにならないといけないのか。

「これお母さん騙せますかね」

「難しいでしょうがやるしかありません」

母親って何気に子供の嘘に鋭いから、こんな名前呼び合うだけの会社が同じだから付き合っている嘘すぐにバレると思うんだけど。そう危惧しているとうみこさんは手帳を1ページ捲る。

「手始めにこの日に2人でショッピングに行きます」

「はい？」

「その次の休みに山か海に行きます」

「はい？」

「その次はこの日行かなかった方に行きましょう…それから」

「あの、ちょっと待ってください」

あまりに話が進んでいて口出しすると、うみこさんはポカンとしたあと「ああ」と納得

得したような顔をする。

「交通費ならご心配なく。車は私が出します」

違う、そうじゃない。

って、車持ってるのかよ。

「そうじゃなくて、どうして俺の休みを完璧に把握してるんですか」

「桜さんから八幡の妹さんに聞いてもらいました」

特に迷うことなく口にするうみこさんに俺は頭を抑える。聞かれて聞く桜もどうかしてるし、妹も兄のプライバシーを悪気もなく言いふらすのだろうか。聞かれたからって教える俺もどうかと思うが、俺は悪くない。けど、小町も悪くない。よって毎日休みにしない会社が悪い。OK、証明終了。

「拒否権ってのは」

「あると思います?..」

「ですよね」

分かったから俺の膝に突きつけた黒いモデルガンをしまってください。BB弾もこれだけの近距離で当てられると痛いんだから。

「では、これから一ヶ月半ほど、お願いしますね八幡」

「はい...」

一般で言われる正しい姿勢で俺に頭を下げるうみこさんにため息をつきつつも返事をした。

たった40日だけ恋人のフリをするだけとはいえ、慣れない名前呼びを強要されるうえに休みも潰されるとは。やはりうみこさんは抜け目がない合理的主義者だ。

「あと、シヨツピングってどこに行けばいいんでしょうか。いつも行くようなガンシヨツプはダメですよね……?」

……追記すると、意外と世間知らずというか可愛らしい?ところもあるらしい。

『いきなり浮気ですか』

突然の偽の恋人生活開始から翌日。

昨日は店を出てから次の予定を決めるためにカフェに移動したものの、俺が腹を下してトイレに籠っていたおかげでまともに決められず、結局前日に決めようという流れになり別れ、そのまま帰ってすぐに寝た。

朝起きてシャワーを軽く浴びて朝食を済ませる。歯を磨き顔を洗って着替えていると突然腹痛に襲われる。恐らく、ハムエッグが腸に加わったおかげで未だに残っていた腹の中の肉達が暴れているという感覚だ。胃薬がないか探してみたがそもそも買った記憶はなく、かといって今からコンピニヤ薬局で買ってる時間はなく、仕方なく胃もたれに苦しみながら会社へと辿り着いた。

「おはよー、って八幡顔真っ青だけど大丈夫？」

「え…？あ、ちよつと腹が痛くてな」

来ていきなり隣の席の涼風に心配される。鏡で顔を確認するが、いつも通りな気がする。ただ若干目の下のクマが酷い気がするな。特に気にすることではないので、腹をさすりながらパソコンを立ち上げた。

「おはよ、青葉ちゃん、八幡」

「おはようございませすはじめさん」

「…：…うつつす」

ノースリーブの開放感あふれる服装のはじめさんがやってくる。と各々挨拶を交わす。すると、俺の顔を見たはじめさんが小さく悲鳴をあげる。

「ヒエツ…って八幡か…どしたのすごく顔色悪いけど…」

「…そんなに悪いですか」

「うん」

そんな驚かれるくらいに悪いのか。遅刻してでも薬局に行つて胃薬買つておくべきだったかと後悔したその時、腹が捻じれ狂うような痛みに襲われ慌てて立ち上がる。

「は、八幡!？」

「……お花積んでくる」

「あ、うん、行つてらっしゃい」

涼風とはじめさんに見送られて急いでトイレに駆け込み、ドアを閉める。女性ばかりのイーグルジャンプのこのフロアに男子トイレはなく上に行けばあるのだが、俺は移動の時間をもつたないからと多目的トイレを使わせてもらっている。上の男子トイレ

も行ったことはあるが、狭いし和式しかないので少し不便だったのでこちらを使わせてもらえるのはありがたい。

ふう、と安堵して手を洗ってトイレから出ると目の前に立っていた人物に驚き、俺は一步後ずさずしてしまふ。

「おはようございます。 八幡」

「お、おはようございます……って、なんで会社でもその呼び方なんですか。ここでは苗字って」

「言ってます。社内ではあなたがさん付けするだけでいいと言ったではありませんか」

あれ、そうだっけ。うみこさんが急に苗字にさん付けじゃなくなると不自然だから社内では控えようとか言った気がするんだが。

昨日の会話を思い出そうとしていると「それより」とうみこさんに水の入ったコップを手渡される。

「あとこれ」

手のひらに置かれたのは3粒の錠剤。目線でこれはと問いかける。

「胃薬です」

「あ、なるほど」

が、時すでに遅しである。多分、もう大丈夫だと思うが、圧を加えてくるこの人から逃れるためには飲んだ方がいいかもしれない。

「二応、飲んでおいてください。いいですか」

「…はい」

そう言われたら飲むしかない。薬を口に入れ一気に飲み干す。これでセカンドインパクトが来ることがないと思うと気は楽になったか。

「ありがとうございます。……てか、胃薬持ってきたんですか」

「カバンに入れてあります。いついかなる状況にも対応できるように」

本当に用意周到すぎる。心配性というわけでもなく、常に最悪を想定して動けという命令で動いている軍人みたいだ。

「では、お仕事頑張ってください」

「それはお互い様ですね。じゃ」

そう言って自分のブースに戻ると、俺が来たことに気付いた涼風が「おかえり」とパソコンに目を向けたまま言うてくる。それに俺はただいまと返して作業に入ろうとし

たが、涼風が尋ねてくる。

「さつきうみこさんが来たんだけど何かあったの？」

「うみこさんが？」

「うん、『比企谷さんは？』って」

昨日の今日だからわざわざ心配して来てくれたのだろうか。準備万全、アフターケアサービスまで充実してるとかあの俺じゃなくても大丈夫だったんじゃないだろうか。

「そうか。まあ、さつき会ったけど特に何も言っただけでなかったな。でも、胃薬もらった」

事実、胃薬を渡すために探していたとも言っていないし、嘘はついていない。が、涼風は納得してないような雰囲気だ。

「そっか。じゃいいか」

が、口ではそう言ってペンを走らせる。ただ単に機嫌が悪いだけだろうと解釈して俺も自分の仕事に集中し始めた。

###

「やっと終わった」

その後、腹痛に悩まされることなく無事に退勤時間を迎えた俺は身体を伸ばしてスマホを開く。安定の通知ナシを確認して、立ち上がると涼風に声をかけられる。

「ね、八幡、晩御飯空いてない？」

「晩？今からか？」

聞くと涼風は頷く。別に構わないが、そう答えようとしたとき、携帯が揺れる。

「悪い」

鳴った携帯を持って涼風に一言詫びてから電話に出る。すると、ものすごく低い声音が耳に響いた。

『いきなり浮気ですか』

「ええ…」

浮気って俺ら仮の恋人だから、そういうの関係ないんじゃないや。その辺曖昧なんだよな。

一応、辺りを見渡してみるのが涼風以外に見当たる人物はおらず、涼風に不審な目を向けられすぐに違う方向を向く。

「どこで聞いてるんすか」

『さあ？それより涼風さんと、ご飯、行くんですか？』

それよりつて、うみこさんが隠れてる場所の方が俺は気になるのだが。

「これから予定とかありましたっけ」

『昨日決められなかったことを決めたいのですが』

「ああ」

それは俺が悪いな。うん、主に俺が食べた肉が。いや、でも焼肉屋に誘って俺に肉を食わせたのはうみこさんだから、結論的にうみこさんが悪いのでは。そんなことを考えるなんてただのクズだな。誰だよ一体、あ、俺か。

『それでどうするんですか？』

どうするもこうするも仮にも付き合ってるのはうみこさんなわけで、昨日決められなかった予定を決めるために呼び出されたのなら優先度はうみこさんの方が高くなるな。

「…そつち行くんで外で待つててください」

はいという返事を聞いてスマホをしまうとずっと待つていた涼風に話しかける。

「悪い、先約が入つてたのを忘れてた。また今度でいいか」

「……じゃ、しょうがないね」

納得したようで何より。俺は軽く挨拶をしてカバンを持って会社を出た。自転車の鍵を外していると背後から殺気を感じた。振り返ると少し御機嫌が斜めな様子のおみこさんがいた。

「は、はは…」

こりや、めんどくさいぞと思いつつ俺は自転車を駐輪場から出してうみこさんのところまで動かす。

「では、付き合って早々浮気しようとした理由を聞きましょうか」

「浮気じゃないですし、あとその話ここじゃまずいですよ」

「それもそうですね」

そう言うとうみこさんはカバンを俺の自転車のカゴに入れる。

「うみこさん徒歩なんですネ」

「うみこ」

「……慣れるまでは許してくれるんじゃ」

「そう言ったら永遠に言わなさそうなので」

「……言った方がいいですかね」

「母の前だと結婚を前提に付き合ってるのにさん付けは変だろうと言われるので」

「じゃお母さんの前でだけ下の名前と呼べば……ってそんな器用な真似は俺には無理か。」

「ですけど、やっぱり無理ですよ」

「恥ずかしいですか？」

「え、あ、まあ。うみこさんみたいにすんなり言えなくてすみません」

苦笑いしながらそう謝ると、うみこさんは顔を逸らした。

「別に八幡には八幡のペースがありますから、構いません」

それに、とうみこさんは小さな声で呟いた。

「私もこう見えて恥ずかしいですから」

不意打ちすぎる言葉に口を開けたまま固まってしまふ。うみこさんはそうでもないらしく立ち止まった俺を見て「何をしてるんですか？早く行きますよ」と声をかけられる。

俺はそれに「あ、はい」と急ぎ足で彼女の隣に並んだ。

意外にも阿波根うみこには恥じらいがある。

デートというのは男と女が待ち合わせをして遊びに行くことらしく、別に付き合っていない方がいいまいが関係ないらしい。辞書とかにそういう記載は載っていないから関係ないんだろう。

だったら、付き合ってるカツプルの行くデートとはなんなのだろうか。そんなことを考えながら、待ち合わせの噴水広場につく。集合時間の10分前に着いてしまった。

相手がうみこさんだからもう少し後早い方がいいと思ったが、結局この時間になってしまった。まあ、遅れるよりはマシだろう。

「で、うみこさんはと」

辺りを見回してみたがその姿は確認出来ない。スマホを開いてみるが1時間前に来た『起きてますか?』以降何も連絡は来ていない。待つてれば来るだろうと近くにあった木に持たれていると背後から人の気配を感じた。まさかと思い大袈裟に振り返って

バックステップをとるとそこにはやはり奴がいた。

「…ホントに気付くのが早いですね」

「普通に出てきてくれませんかねうみこさん」

予想通りすぎたのか困ったような顔を浮かべたうみこさんは隠れていた木から出てくる。

「いつからそこに？」

「八幡が来る5分くらい前ですかね」

俺よりステルス能力高いんじゃないだろうか。

「てか、普通に待っててくださいよ」

「それではなにか面白くないので」

「ただの待ち合わせに面白さいりますか？」

「ないよりはいいと思いますが」

いや、でもなあ……まあ、うみこさんがいるって言うてるんだしいるのだろうか。けど、俺がしたら「何してるんですか」とかゴミを見るような目で言うてきそうなんだが。

「そんなことは置いておいて行きましようか。時間は有限ですし」

その時間をくだらない待ち伏せに使ったのは誰なんですかね。そう思いながらうみこさんの横に並ぶようにして歩き始めた。

「先日話した通りまずは服を買いに行きます」

「その次に雑貨屋行って飯でしたっけ」

「はっ」

今まで異性との交遊が少なく、デートというものがどういふものなのか分からなかつたうみこさんと俺はとりあえず服買って適当にぶらついて飯食えばカップルっぽくなるという結論を出して今こうしてショッピングモールの中へと入る。

「服のフロアは…2フロアもありますね」

「とりあえず、2階から見えていきましようか」

「そうですね」

入り口ある案内を見て、エスカレーターに乗る。1階はアクセサリや時計などを取り扱い、2階と3階がファッションのフロアに当たったのでそちらに向かう。2階が女性で3階が男性とキッズ向けの服を置いてるらしい。

「うみこさんって普段ユニセックスな服ばかりですよね」

「ええ、女性向けにデザインされたものはあまり似合わないのよ」

「適当に服屋の前をうろつきながらそんな会話を。うみこさんならスタイルいいし何でも似合うと思うんだが、本人はそうは思っていないらしい。」

「そう言う比企谷さ…八幡も基本的には黒い服しか着ませんよね」

「…そうっすね」

別に言い直さなくても良かったのにな。

それと俺が基本的に黒系なのは、シャツは白か灰色なんだが、上着はどうしても黒になってしまう。持つてるのが黒系統しかないからというのもあるが。

「暗色系の方が着てて落ち着くというか、自分にあってる気がするのよ」

「確かに八幡はその方がいいかもしれないね…でも、緑とかもいいんじゃないですか？」

「緑か。まあ、考えときます」

今はうみこさんの服選びのはずが何故か俺の話になっていたので話題を変えようと「何か気になった服とかないんですか」と聞いてみる。

「そうですね。私はありませんでしたが…」

「が?と含みのある言い方が気になり、うみこさんの方を見るとちようど目が合う。

「八幡は何かありましたか? 私に着てみてほしい服とか」

「……うみこさんってそういうキャラでしたっけ」

「いえ、彼女というものは彼氏に選んでもらった服を着てみたいものだといんターネッ

トで見たもので」

なるほど、にしても一瞬ドキツとしてしまった。うみこさんに着てみてほしい服か。何故だろうかグリーンベレーの服とかサバイバル仕様の服しか出てこないな。でも、他にあるとしたら。ジーパンに落ち着きのある青のロングTシャツ。うみこさんは基本的にこのスタイルでロングTシャツの色が変わるくらいで下の方にはあまり変化がない。

「うみこさんってスカートとか履かないんですか？」

「自分からはあまり。学校の制服が最後ですかね」

「やっぱりか。といっても、うみこさんがスカートを履く姿を想像できない。長い髪で褐色肌に合いそうな服か。」

「あれなんてどうです？」

と、俺が指さした先にあるのはマネキンが被った麦わら帽子と純白のワンピース。それを見たうみこさんは少し考える仕草をとるとショーケースの前まで歩く。

「…八幡はこういうのが好きなんですか？」

「いや、なんとなくうみこさんに似合うと思ったからなんですけど」

白と黒というのは定番だと思っただが。うみこさんはあまり気に入らないらしく、俺と服と自分を見比べていた。

嫌なら無理しなくてもいいですよと口にしようとしたりした時、うみこさんは店内へと入り店員さんに話しかけると店員さんは嬉嬉として更衣室へと連れていく。

特に何も言われてない俺は外で待つしかなく、男一人でこんなショーケースの前にいると変な目で見られると思ったので通路側に移動する。

時計を見ると、まだ昼までには時間があるが日曜日ということを考えてここを出てから席取りをしないとピークに巻き込まれるな。さて、どこの店で食べようかと考えていると携帯が音を立てて震えた。うみこさんと偽恋（偽の恋人同盟の略）してからよく

鳴るようになったし、触るようになったなど思いつつ電話に出る。

「もしもし?」

『…今どこですか』

「店の外ですけど」

『なんで外にいるんですか』

なんでちよつと怒ってんだこの人。

うみこさんが先に行つたからと言おうとしたら先読みされたのか、

『言い訳は聞きません。早く来てください』

と言われてしまったので店の中に入る。どこですかと聞くと、右から2番目と言われたのでそこで待つ。とカーテンが開かれる。

「ど、どうでしょうか…」

赤いテープのようなものがチャームポイントの麦わら帽子に全体的にレースの多い純白のワンピースを纏ったその人は珍しく顔を赤らめ俺にそう尋ねてきた。

「ど、どうって…」

想像の数倍は似合っている。真つ直ぐに降ろされた茶色の長い髪に沖縄県民特有と思われるよく焼けた肌が白との対比になっており美しく見える。さらに健康的な二の腕やふくらはぎやしなやかな指先、そして意外にも膨らんでいる胸元。

「あ、ああ…、その、いいんじゃないですかね」

それらを頭の中では言葉に出来ても口には出るのは曖昧なもので、ホントに俺ってヘタレなんだなと自覚させられる。

「いい?とは具体的にどのようなの…」

「へえっ?!……そうっすね……あの、肌が綺麗というかベストポジションというか……そういう顔もするんだとか」

「……もう結構です」

勢いよく閉められたカーテンの外で俺はひとりぼっち。カーテンがなくてもひとりぼっちとか言わない。途中から俺何言ってるかわかんなかったが伝わただろうかと、少し心配になっているとカーテン越しにうみこさんがなにか呟いた。

「……あ、……ありがとうございます」

声音からはいつもの力強い印象ではなく、とても女の子らしい。ごによごによとそういうところも珍しいし、さつきもほんのりと赤くした頬を見るに恥ずかしかったのだろうか。

昼飯代は俺が出すか。焼肉奢ってもらったし。そう決めると、中から着替え終えたらう

みこさんがさっきのワンピースを畳んで持って出てくる。

「……」

「……」

お互い会話はなく、これからどうしようかなんて言葉も出てこない。どうしてか気まぐずいという感情が先行してくる。

やはり人間不慣れなことをしない方がいいなと思い、頭をかくと左の袖口がキュツと掴まれる。見ればうみこさんが俯きながら俺の袖を握っていた。

「……恋人が服を選ぶという話には続きがあつて、選んでもらつた本人ではなく、選んだ方が買うという習わしがあるそうです」

なるほど、そんな習わしがあるのか。知らなかつたぜ。勉強不足だな俺も。

習わしには逆らわないのが吉だ。クリスマスやらバレンタインデーに関しては異国の文化なので省くが正月や節分などのイベントはしっかりしておくのが日本人として

の務め。それにうみこさんが言うことだ。間違つていようがなかるうが、この人は嘘をつかない。でも、もしこれが嘘だとしても。今の俺は許せてしまった。

「…じゃ、服と帽子、渡してもらえますか」

「……はい」

本当のカップルがどういうデートをして、どんな顔をしてどんな風を楽しむかは知らないし、興味が無い。

ただ、こんなかりそめのカップルでもこんな風に恥ずかしく愛おしく楽しめるのなら本当の愛を持つカップルはもつと楽しいのかもしれない。それが少しだけ羨ましくなつて、俺は服を持ってレジに向かった。

やはりその他大勢が黙ってない。

何事も始まりが大事というように、俺とうみこさんの初デートは成功に終わったと言っている。うみこさんの服を見繕った後、早めの昼食をたべた。シヨツピングモール内にある本格派ハンバーガー屋で、日本のハンバーガーと違い肉が厚くベーコンやトマトも挟まれたまさに本場のハンバーガーそのものだった。……まあ、俺は食べたことないから分からなかったが。店のメニューにそう書いてあったし多分合ってると思う。

食後に俺の服も見繕ってもらい、お互いに手荷物が出来たところでその日は解散となった。ちなみに俺が買ってもらった服は緑のチェック柄の上着だが、これが以外に温度調節にもってこいの服だったりしたので重宝してる。

「ねえ、はっちーその服どこで買ったの？」

重宝しすぎて会社でも着てる。それをたまたま通りかかった、というよりは涼風に用があつて来たのであろう桜が尋ねてきた。

「あ、ほんとだ。いつもの黒いのと違う」

桜の言葉に涼風も反応する。お前らどんだけ人の服見てんだよ。もしかして俺の着てる服って黒服しかなかったイメージ？一応、白とか青も持つてるんだがな。

「この前休みの時に買ったんだよ」

「へえーそうなんだ。珍しいね、八幡が服買うなんて」

そう珍しいことではない。昔のコートが着れなくなったり、千葉関連のご当地Tシャツがあれば買ってるし、この前もあたらしく下着を買い直したところだ。

感嘆の声を上げる涼風に対して桜は眉をひそめて唸ると「あつ」と突然声を出す。

「どうしたのねねっち？」

俺はすつと目線を逸らすとわざとらしく時計を指差す。

「あ、もう5時だ！帰らないと！」

「まだ1時だよ」

帰ろうとしたが回り込まれてしまった！

「ただいまー！つて青葉ちゃんと八幡何してんの？」

「ほんまやそんなところで通せんぼして」

「け、喧嘩…?」

しかも、昼食で外に行っていたメンバーが帰ってきた。ますます逃げられないし、そもそも昼休みが終わるつてのどこに逃げればいいのだろうか。仕方なく、桜に目で助けを求めた。これでなんとかしてくれればアイスでも奢ってやるから。頼む。

「いやーあのこれは…あ！昼休みがおわる！そろそろ戻らなきゃ！」

そう言って助けてくれるのかと思えばすぐさま退散した桜。あいつこの後絶対泣かす。そう決心したが涼風に詰め寄られてしまう。

「ねえ、うみこさんに予定聞かれてどうしたの？」

「……特には」

「なんの騒ぎですかこれは」

また目線を逸らして逃げようとした先には腕を組んだうみこさんが立っていた。緑のTシャツにジーンズといつもスタイルだ。救世主よ！と思ったが下手したら話が余計に拗れるのでは？と心配してしまう。

「うみこさん、なんで小町ちゃんに八幡の予定聞いたんですか？」

青葉ちゃんストレートすぎい！ほら、ひふみ先輩とかはじめさんも「どういうこと？」みたいな顔してるし。聞かれたうみこさんは「あまり言いたくはなかつたのですが」とため息をつくって俺の方を指さした。

「ただ今八幡と付き合わせて貰ってるからです」

この人は包み隠さずに言ったなおい。いや、色々と抜けてる部分あるよ？ほら、お母さんを安心させるために俺と結婚を前提に付き合ってることにしてるっていうワードが抜けてるよ。そんなことが通じることなく、うみこさんは髪をくるくる指で回しながら少し照れくさそうな表情をしていた。

対してそう告げられた涼風は口をポカンとあけながら、また俺の方を向く。

「ほ、ほんと…?」

それに俺は天井を向きながら答えた。

「……一応な」

「そっか…」

そう言うのと涼風は笑顔を浮かべて俺とうみこさんに「おめでとうございます！」と祝辞を述べて席につく。これ以上は何も聞くつもりは無いということだろう。ゆんさんやはじめさんも「おめでとさん」「お、おめでとう」とぎこちない笑顔で祝福する。

ひふみ先輩はあわわとした後、口ごもりながら「お、おめでとうございます！ゆー！」と大きく頭を下げた。

それに「ありがとうございます」と返すうみこさん。そして、俺は彼女たちのぎこちない笑顔と言葉の正体を見破ろうとしていた。

「…補足ですが付き合っていると一言しても一時的なものです」

見破ろうとしていたところでそう言い残して去っていったうみこさんのせいで俺達キャラクターデザイン班は残業をすることになった。主にどういふことかと追及してきた涼風達のおかげで。その後「なんだそういふことか」と安堵の笑みを浮かべた彼女

たちから頑張つてねとエールを貰ったが、どうにも俺は落ち着かなかつたのであった。

釈然としないことに最後まで残業したのは俺だけだった。

唐突に比企谷八幡は願ってしまった。

せせらぎの音に誘われるようにして涼しい風が吹き抜ける。降り注ぐ木漏れ日が気持ちいい。

上を見れば木。周りを見れば木。下を見れば黒々とした蟻たちと土。少し歩いて下方を見やれば澄んだ色をした透明の水が流れる川がある。

そう、ここは森である。さつきからチチツツと様々な鳥が飛んでいる。蝉はまだいならしい。むしろいなくてホツとした。

さて、俺はどうしてこんな森の中にいるのか。迷ったわけではない。ここで待つように言われたからである。誰にとって？そりゃ一緒に来た人だよ。俺がこんな森の中に一人で来るわけがない。

いつまで待てばいいのかと時計を見ていると、脇の小道からぎつと足音が聞こえた。心配のあるほうを見やれば、麦わら帽子を被り薄手の長袖と長ズボンを着たうみこさんがバスケットとレジャーシートを持ってこちらにやってきた。

「それ持つてくるなら持ちましたよ」

声をかけるとうみこさんは首を振った。

「いえ、これくらいは大丈夫です……。あそこの日陰に行きましょう」

言われて川の近くにある木陰にうみこさんはレジャーシートを敷く。その間俺は手渡されたバスケットを持ってたわけだが。

「今日の予定ってピクニックでしたっけ」

森に来て木陰でレジャーシートを敷いてバスケットを持っていれば、恋愛経験及び友達と遊んだことが限りなく少ない俺でも察せられた。てか、ピクニックくらいは家族でしたことある。

「山だと途中からサバイバルに突入する可能性があつたので森にしました」

理由が意味不明すぎる。森も山も樹海なことに変わりないしどちらにせよサバイバルはしないだろ。と、思ったらうみこさんは何か周りを警戒すると俺からバスケットを受け取りレジヤースートの上に置く。

「どうやら、敵はいないようです。今のうちに食べましょう」

こんな所に敵なんていねえよ。そういう顔が出ていたのだろう。うみこさんは人差し指を立てる。

「いついかなる状況に対処できるようにするのは社会人の基本です。それにここに熊が現れる可能性も考慮すれば自然な行動です」

後者はまだ納得できたが前者は社会人というより軍人とかそつちに入るのでは。まあ、確かに災害時とかに備えることは大切ではあるが。

「まあ、そんなことは置いておいて早く食べましょう」

テキパキとバスケットを開けると中から出てきたのはサララップに包まれたおにぎり、プラスチック箱に入ったサンドイッチ、お弁当箱に入った唐揚げ、卵焼き、プチトマト、ポテトサラダ、なんか緑のヤツ。野菜炒めかな？と見てるとうみこさんが答えてくれた。

「ゴーヤチャンプルです」

「へえ、ゴーヤチャンプルってこんななんですね」

でも、ゴーヤどこだこれ。人参とピーマンとミンチしか見当たらないんだけど。

「ああ、ゴーヤはとても小さく細切りにしてあります。こちらの方が食べやすいと思いましたが」

すげえ気配りがきいてる。ゴーヤは苦いっていうし初めて食べる俺にとってはありがたいことだ。

「これ全部うみこさんが作ったんですか？」

「そのセリフは私がこれを開けた時に言うことだと思うのですが……。そうです、私が作りました」

すみません気が利かなくて。しかし、大したものだ。入れ物こそはバラバラだが配置によってカラフルに見せることによつて食欲をそそられるし栄養バランスも考えられているように見える。やっぱりうみこさん俺じゃない人でもいけたんじゃないですかね。

「じゃ、そろそろいただきましょうか」

「ですね」

2人で手を合わせて食事の前の挨拶をすると、割り箸の袋を開けてパキッと割る。音が悲痛だったわりにうまく割れた。ほんと、これコツとかあるらしいけどあんまり関係

ない気がする。

まずはと。どうでもいいけど食事の際は野菜から食べるといいとか聞いたな。脂肪の吸収がどうか、塩分がどうか。まあ、興味ないからほんとにどうでもいい話だけだ。

しかし、沖縄出身の人が作った郷土料理だし先に食べなくては損だろう。

口内に箸で運び、歯でゆっくり咀嚼する。うん、ソースで薄くもなく濃くもなく味付けがされていていい感じだ。食感も悪くは無い。人参とピーマンのシャキシャキ感とミンチのジューシーさがたまらない。ところでゴーヤはどこだ。3口くらい続けて食べてるけどどこにもいない気がする。

「どうでしょうか?」

「今まで食べた中で一番美味しいですね」

ゴーヤチャンプルーは生まれて初めて食べたので比べる対象がないから一番美味しい

と思う。だから何も間違えてはいない。強いて間違えたところを言うなら言葉のチョイスをミスったくらいか。今まで1度も食べたことないものを美味しく食べれたらそれが1番にランクインするに決まってる。トモコレでも適当になんか上げたら好物になるし。

「そ、そうですか。あ、ありがとうございます」

お礼を言われることじゃない。むしろこつちが言わなくてはいけないレベルだ。だが、もしどこかの店で頼んだゴーヤチャンプルより美味かったら怒ってまた作ってもらうかもしれないな。多分、ないだろうが。

「どうしたんですか八幡」

「いや、なんでもないですよ」

手が止まっていた俺にうみこさんが尋ねきたので俺は首を振った。

あと数週間もすれば俺とうみこさんのこの関係は終わりを迎えるのだ。今こうして

いるのもうみこさんの母親を喜ばせる演技をするためなのだ。いうなればこれはお互いの恋愛予行練習というやつだ。

「あ、この卵焼き牛乳入れてるんですね」

「はい、その方がまろやかになると母から教わりましたので」

俺の呟きにうみこさんは嬉嬉として答える。おにぎりを頬張ると中からは鮭が出てくる。他のはおかかと梅干しと定番の具だ。サンドイッチはベーコンとキャベツ、エッグやレタスの入ったもの。そして、トマトが入っているものはなかった。また小町に事前に俺の嫌いなものを聞いておいたのかもしれない。プチトマトはうみこさんが早いうちに全て食べ終えてしまっていた。彩りを加えたかったのか自分用に入れていたのかは定かでないが本当に思慮が行き届いている。

「うみこさんはいいお嫁さんになりますね」

「なんですか、急に」

そう照れくさそうに笑う彼女の顔は昼頃の日差しと合わさってとても眩しく見えた。適当にまた「なんでもないです」と言うのと納得してなさそうだったがすぐに食事を再開した。

もし俺がイーグルジャンプに入っていなかったら。もし俺がうみこさんの薬莖に何の関心も示さなかったら。このような関係性は生まれてなかったのだろう。

いつだってこのような仮定には意味はなく、ただ時は進んで事実は虚偽に埋もれていくのだ。俺達の関係が祝福されず褒められたものでないことは分かっている。

それでも、今くらいは。

少しくらいは幸せを噛み締めてもいいのではないだろうか。

願ったものはそこにあった。

沖縄は冬でも15度を超える亜熱帯だったか。

日本最南端の県ということだから暑い。南は暑いという考え方は間違っておらず、千葉も南の方に行けば暑いのだ。南船橋とかは舞浜の近くだから、人混みで暑くなる時がある。ほんと人口密集地って最悪。

「にしてもほんとに来てしまったな……」

荷物を持って那覇空港に降り立った困惑顔でそう呟いた。飛行機に乗ること数時間、空の旅を楽しむことなく寝てたらしいの間にか着いていた。離陸と着陸の瞬間は起きてたが、ジェットコースターに乗ってる気分だった。耳がキンキンするしもう乗りたくねえな。

「ふう、やっぱりここは暑いですね」

「ですね…」

初の飛行機にげっそりしていると、やはり慣れているのか特に気負いなく、後ろからトランクケースを引っ張って出てきたうみこさんはそう口にする。空港内でも半袖にならねばいけないというのに、外の陽射しを見るにめちやくちや暑そうだ。

「今日の気温は27℃。まあ、比較的マシな部類ですね」

東京と比べると10℃くらい差があるのだが、それでマシとか沖縄頭おかしいんじゃないの？

ひとまず、空港の外に出ると陽気というか灼熱地獄の如く太陽の光が襲ってきたので上着を脱いで半袖になる。沖縄に来て『千葉L♡VE』シャツで千葉愛をアピールする俺。最強である。

そんな俺に対してうみこさんは普段会社で着てるものを着ていた。タクシー乗り場

でタクシーに乗るとうみこさんは運転手に行き先を告げる。車は動き出し、沖繩の街並みが目に映るが、昔地理かなんかの教科書で見たのは少し違っていたが、この辺は都会の部類だからちよつと違うんだらうと勝手に納得した。

「お客さんらは観光かい？」

外の景色をぼうつと眺めていたらドライバーにそう聞かれたので俺はどう答えるか悩んだ。一応、予定としてはうみこさんの実家の近くの飲食店で夕食を食べてその後に行くことになっているが。前もって連絡してないからというのと、母にご飯を作られせると食べきれない量が出てくる可能性があるからということらしい。

「いえ、今日は結婚の報告を両親にしようと思ひまして」

「へえーそうなのかい！そりやめでたいね！」

うみこさんがそう言うのとドライバーは笑顔で祝辞をくれる。まあ、裏の事情を知らなければこの反応は当然なのだろう。むしろ、「ああ、そう」とか言つて舌打ちされるより

は全然いい。他人の幸せを素直に祝福できる人というのはほんと羨ましいと思う。

このあとも2人はどこで知り合ったのか、とか聞かれてるうちにタクシーは目的地へと辿り着く。

「じゃ、頑張つてな！」

「え？あ、はい」

降りる際にそう背中を押されて困惑気味になってしまったが返しておいた。確かに頑張らねばならない。頑張らねバネバギブアップ。

「とりあえず、あそこの食堂なら安価で美味しいものが食べれるのでいきましょう」

指差す方向にあつたのはオレンジ色の瓦屋根の白い建造物。看板には『本格食堂』と書かれている。その扉をあけると店員からの気前のいい挨拶が飛んでくる。店員がこちらを向いて何名か尋ねた時、うみこさんの顔を見ると表情が固まり、「あっ！」と声を出す。

「うみこちゃんじゃないの！久方ぶりだねえ！元気にしてたかい？」

「はー」

駆け寄ってくるおばちゃん。やっぱり実家の近くの店だから顔見知りなのだろう。こういう時の俺は空気に徹するのが一番。そう思っていたのだが。

「ん？あの人は？うみこちゃんのこれかい？」

そう言って小指を立ててるおばちゃん。それは女のやつで男は親指とかじゃねえの？詳しくは知らないけど。

「私の婚約者です」

「まあ！」

そうなの!?!と嬉嬉として聞いてくるおばちゃんに一応頷いておく。まあくとピンク色っぽい声を上げるとおばちゃんは本業を思い出したのか「どうぞ席について」と促してくる。

タコライス、本場のゴーヤチャンプル、ラフテー、海ぶどう、グルクンの唐揚げといった沖縄の名物料理がやって来てどれも美味しくいただいた。ゴーヤチャンプルやゴーヤはデカくて食感は楽しめたがやはり苦かった。

「両親に会う前にお酒は控えようと思ひまして」

その言葉から真面目さが伺えた。俺も小町の彼氏が酒飲んでやってきたら半殺しにしちやうから正解だと思う。というかきた時点で半殺しにする自信あるな。うみこさんの親がモンスターペアレントでないことを祈ろう。

###

沖縄料理で十分に腹を満たして、ついに俺とうみこさんは決戦の場へとやってきた。

玄関にはハイビスカスやアジサイらしいき花たちがたくさん咲いており、木造建築の風通しが良さそうな家に文字通り花を添えていた。

「帰ってくるのっていつぶりくらいなんですか」

「そうですね。今年の夏以来ですかね」

正月は何かと忙しくて帰れなかったらしい。そういう俺も帰ってなかったりするの
でそろそろ帰った方がいいかもしれないな。

そう思っていると、うみこさんが一歩歩き出す。家の戸を3回ノックすると中から
「どちら様？」とうみこさんにやや似た低い声が返ってくる。

「私です」

「ああ、うみこかい」

ガラガラと戸が開けられると、ピンクのカッターシャツと半パンを履いたファンキー

なおばあさんが出てくる。肌は黒くはなく、少し小麦色っぽく焼けているかという程度でうみこさん程ではなかったが、髪の色や目元、声の質からどこことなくうみこさんに似た部分を感じる。

「なんだ帰って来るなら連絡しなさいよ」

「すみません。前もって言うと思っただけで」

何が面倒だと思ったのだろうか。十中八九、食べきれないほど出される料理のことだろう。もしくはおもてなしとかされると嫌なタイプなのだろうか。そんなことを考えるとうみこさんの母親はパチパチの瞬きすると俺のいる方を見る。

「さつきから気のせいかうみこの後ろにゾンビみたいなのが見えるんだけど…私も歳かね」

「いえ、ゾンビでなく人間です」

なんとなくダイアーさんを思い出したな。俺はべこりと一礼すると打ち合わせ通りの挨拶をする。

「うみこさんと結婚を前提に付き合わせていただいている比企谷八幡です。今日はその報告のために参らせていただきました」

緊張していたが嘸まずに言えた。最後少しだけ丁寧すぎるけど。それくらいなら誤差の範囲だろう。うみこさんはうみこママに見えないように親指をぐっと立てる。

「あらあらまあまあ……これはこれは丁寧……」

頭を下げるうみこママに反射的にペコペコする俺。なかなか終わらない挨拶に痺れを切らしたうみこさんが「早く中に入れてください」と言うをやっと挨拶が終わった。

居間に通され、お茶を啜っているとうみこママは前に座るところ切り出した。

「で、子供はできたの？」

「ぷっ!!」

「八幡!?!」

いきなり過ぎんだろおい。それじゃ完全にデキ婚じゃねえか。

「いえ…」

「じゃまだしてないのかい」

「: : はい」と口元を拭きながら首肯すると、うみこママはなんだつまらないのと口に出す。

「指輪は?」

「あ、それはまた東京に帰ってから買おうと。お互い忙しくてようやく暇が取れたので」

質問されるであろう事柄についてはうみこさんと事前に打ち合わせていたので全て対応可能だ。まあ、まさか子供の話を聞かれるとは予想外すぎたが。

「いくつ?」

「今年で20になります」

「あら、年下なの」

「はい」

意外ねくと感嘆の声を漏らすうみこママは唐突に立ち上がると俺の方に寄ってくる。
すると。

「えい」

そう言つて俺の上半身を頭にした。

「フアツ!?!」

「お母さん!!」

「結構いい身体付きしてるじゃないの」

「お母さん!!!!」

婿入り前に女の人に裸（上半身だけ）を見られてしまった。もうお嫁にいけない…。服を着て死んだように黙り込んだ俺と楽しそうに笑っているうみこママを見てうみこさんはため息を漏らした。

「八幡をからかつて遊ぶのはやめてください」

「ごめんごめん。うみこの連れてきた彼氏だからテンション上がっちゃって」

テンションが上がって服脱がしてくるとか痴女かよ。いくつか知らないけど歳を考えろよ。すごく身の危険を感じたわ。

「それで？八幡くんはうみこのどこに惚れたの？」

あんなことしといてまだ質問するのかよ。うみこさんからは怒涛の如く聞かれるから覚悟しておいてくださいと言われてたが服を脱がされるまでは聞いてなかったぞ。

「面倒見が良くて、気前が良くて料理がうまくて、あと可愛いところですかね」

「まあ！聞いたうみこ？八幡くんあなたにぞっこんじゃないの〜！」

興奮気味なうみこママに対して背中をパシパシ叩かれるうみこさんはやめてくださいと恥ずかしそうにしていた。

「と、とりあえず！私と八幡は結婚することになったので母さんはご心配なく！」

「はい。あ、で？式はいつあげるの!?ハワイ？ベネズエラ？メキシコ!」

まあ、そんなことで引き下がるうみこママではなく式のことやらも聞かれた。ハワイは分かるけど、あとのふたつに関しては全くわからない。

「それについては後々決める予定です。今はとりあえず報告だけです」

ピシヤリと言ううみこさんにママは「そっかあ」と仕方ないと口を噤んだ。

「∴ まあいいわ。今日は泊まってくんでしょ？離れの家用意してくるから待つとき」

戸を開けて出ていったうみこママを見てうみこさんはため息を漏らす。

少なからず俺と同じことを感じているのかもしれない。

母親を安心させるためとはいえ、騙しているのだ。どんなに優しい嘘でも、嘘は『嘘』なのだ。現実ではない。それに罪悪感が伴うのは当たり前のことだ。現に赤の他人である俺も少しいうかそこそこ罪悪感を感じている。

しかも、うみこママはそれに気付いている節がある。まだ、さっきの結婚式の話で信に近づいた。というところだろうか。だが、いずれは気付くことになるだろう。

「母親って何かと鋭いですよね」

「…え？」

「本当のことは本当って信じないけど結局は信じてくれるし。嘘は嘘で見抜いてるのに信じる振りして」

いつもの如く、独り言のように何か呟いた。それは止まることなく、うみこさんの疑問符を気にすることなく続く。

「それですつと黙ってるんですよ。嘘が本当になっても『良かったね』とか『そうなんだ』とか言ってるだけ。『昔嘘ついたよね』とかは言わないんですよ」

嘘を本当にするのは結構難しい。テストで100点取ったとかそんな嘘はその場で

バレるし、『今日どこ行ってたの?』で友達と遊んでたって言ってもママ友やら遊んでたと言った子に聞かれれば終わりだ。

100円拾ったとか茶柱が立ったみたいなの、その場に居合わせないと分からないような嘘は本人以外には嘘か本当かわからない。

けど、今回のような嘘は簡単に本当に出来る。ただもし本当にするなら。

そこにどうしても必要なものがある。

「うみこさんはどうして俺を選んだんですか?」

「…あなた以外に男性の知り合いがいなかったからです」

そうだ。うみこさんには俺以外に親交のある男性がいない。そういう話だった。

でも、もしそれが嘘だったなら。

こんな大掛かりな嘘をつくのには俺は都合が良かった。そんなことは分かっている。だけど。そこに他の感情があったのなら。

「俺はあなたに脅されました。『あなたがやらないなら他を当たると』あなたならやりかねないと思っただので俺は仕方なく付き合いました」

そう言った瞬間にうみこさんの目が揺れ動く。

まだだ。まだ耐えてほしい。ここでどこかに行かれたら俺は追いかけれない。追いかける資格がなくなる。

この次さえ言わせてくれれば。あとは好きにしてくれて構わない。

「……でも、正直いって嬉しかったです。こんな俺でもそんな大層な役回りをさせてくれて」

迷惑だったかと問われれば最初はそうだったが、この人と過ごす休日は悪くなかった。元々、共にいて飽きないし嫌な空気になる相手でもなかった。居心地が良かったのだろう。

共に歩くことも。

服を買うことも。

食事をすることも。

全然、苦ではなかったしむしろ楽しいものだった。そりや旨いご飯を魅力的な女性と食べれたからというのもあるのかもしれない。

どういふことが、俺はこの人なしではダメになってしまったらしい。だから、俺は今ここでこう言おうと思う。

「おかげで俺は偽物じゃなくて本物が欲しくなりました」

いつぶりに口に出したその願いは、果たした目の前の人物に届いただろうか。

「嘘を本当にしてみませんか？」

一度、口に出した言葉は引つ込まないのでどうにでもなればいい。

ここでごめんなさいとか言われたらうみこママに全部バラして逃げさればいい。県庁近くに行けばネカフェとかカプセルホテルとかあんだろ。

なんだか、恥ずかしくなつてうみこさんが視界の端にギリギリ見える範囲で天井を見つめる。

5分くらいの無言が続いた。うみこさんの後ろがちようど掛け時計だから5分で合つてる。今日ほど無言を嫌った日があるだろうか。俺なりに精一杯言つたつもりなんだが。それに早くしないとうみこママ帰つてきちやうし、この空気のままだと余計に不審がられる。まあ、あの人なら『キスとかしてた!?ごめんなさいねー』とか言つて出ていつてくれるかもしれないけど。

「あの…」

重く張り詰めたような空気をうみこさんが俯きながら破るように声を出す。それに俺は目を向けると顔を上げて背筋を伸ばしたうみこさんと目が合う。

「すみません」

と、合つたのは数秒。ほんの一瞬でうみこさんの目は顔とともに畳へ一直線。

何故か知らないが俺は土下座されてた。

もうこれはダメってことですかね。やめちやおうかな人生と死にたくなってるとうみこさんは目を逸らしながら顔を上げた。

「その案をそちらから出してもらえとは思ってませんでした…」

灰かに染まった頬に僅かに潤んだ瞳。

普段のキリツとした印象から程遠い柔らかな笑顔で阿波根うみこはこう言った。

「本当にしちやいましょうか」

まるで親をからかうような。

愛の告白とは程遠い声音。

それを言ったのがうみこさんなのがおかしかったのと。

酸っぱい葡萄を手に入れられたことが嬉しかった俺の表情は綻んでいた。

そんな俺に釣られるように笑ううみこさんとお互いに変なテンションになって、うみこママが帰ってくるまでずっと笑っていた。

エピローグ

突然だが私、阿波根うみこは結婚することになった。

それが決まったのは昨日のことだ。

元々、母を安心させるためにと付き合ってもらった嘘を本当にしようという彼の提案に私はありがたく乗らせていただくことにした。

こちらとしても、そうなってくればいいと思っていなかったわけではない。

むしろ、そう願っていた。この嘘がいつか本当になればいいなど。

その為に普段は買わない服を買いに行ったり、手料理を振舞ったりした。これで彼がその気になってくれればと思ったが、途中で思い返せば嘘だと言っているので本気にはしてくれないのではと。

「まあ、まさか本気になるとは思いませんでした」

隣で未だに寝息を立てる彼の髪に触れながらそう呟く。

母に用意してもらった離れ家で一夜を共にすることになったのだが、ああいうことがあつたのでお互いモヤモヤを抱えながら寝ることになった。

気を遣ってくれたのか遣ってないのか。布団はふたつ敷かれていたが、距離は全く空いていなかった。

お互いに背を向けながら悶々としていたところに私があることを提案した。

その結果、昼前の11時に起きることになった。重い瞼を開けると2枚あつた布団のうちの一つに2人とも収まっていた。大きく伸びをすると、八幡は疲れたのかまだ寝ていた。

まあ、初めての沖縄ですし無理もないでしょう。決して夜のあれは関係ないだろう。

そう自分に言い聞かせるとシャワーを浴びた。髪や肩、腰周りなどは念入りに洗って

おいた。

シャワーを浴びて、下着を着る。上着やズボンをカバンに入れっぱなしにしていることを忘れ居間に戻ると寝癖を爆発させて八幡が身体だけ起き上がっていた。

「おはようございます八幡」

「……え?…… ああ、おはようございます……」

まだ頭は覚えてないのか出てくる言葉は途切れ途切れで、度々欠伸をしていた。

「シャワー浴びてきたらどうですか? 汗もかいたでしょうし」

「……うす」

ノロノロと立ち上がった八幡は私の隣を通ると一歩踏み出したところで立ち止まると目をパチパチと瞬きし、私の身体をマジマジと見つめる。

「な、なんですか…」

そんなに見られると好きな相手とは言えど恥ずかしい。というか、好きな相手だからこそ恥ずかしい。ジロジロ見るなどという目を向けると八幡はハツとしたようになり、小さな声で「昨日のと違うな…」と意味のわからないことを口走ってシャワールームに入ってしまった。着替えたから違うに決まってるじゃないですか。というか、結構暗かったのどうして色が把握出来たのでしょうか。八幡の目の良さに軽く畏怖しながらカバンを開く。

「うみこ。起きたの」

「母さん」

着替えを出してズボンを履いて上着を着ていると引戸が開けられ母が出てくる。割烹着にゴムブーツということは農作業を終えたばかりだろうか。

「昼ごはん作るけど食べる？」

「はい。あ、手伝いますよ」

私がそう言って靴を履こうとすると笑顔で母さんは首を振った。

「いいよ。こつちでやつとくから。それにあんたはあれの処理があるでしょ」

『あれ』と呼ばれた物を母さんの目線を頼りに追っていくと、先程まで私と八幡が寝ていた布団があった。

「一応民泊で修学旅行生が使うやつだから綺麗にしといてよ。まあ、別に外に干してもいいけど」

「洗います。ご心配なく」

ニヤニヤしながら言う母に私は熱くなる顔を抑えてピシヤリと言う。

「洗濯機は電源入れたら使えるから。洗剤は棚漁ったらあるから」

じゃ、と手を振って戸を閉めて出ていった母にため息をつく。やはり、母親なんです。ねと少しだけ怖くなった。ああも何もかも分かってしまうものなのかと。

「八幡が出てきてから何とかしましょうか」

洗って取れるものなのか心配なので可能なら風呂で軽く洗って起きたいところだ。そう考えていると八幡が廊下からびよこつと顔だけを出してくる。

「あの、俺の鞆取ってもらえませんか」

どうやら服を持って入るのを忘れていたらしい。鞆の中から服が入ってるであろう袋を見つけて出して放り投げると八幡は頭を下げて身体を隠す。そして、数秒後に髪が濡れたことで消えた寝癖。狼の描かれたTシャツ。薄緑の半パンを履いた八幡が姿を現す。

出てきた八幡は何故か顔が赤く私と目を合わせようとしない。それを不審に思った

私は首を傾げる。

「どうしました？」

「いや、その… いや、なんでもありません」

口ごもつてなにか言おうとした八幡だったが言うのをやめて、話題を変えるためか敷かれていた布団に目を向ける。

「これ、どうするんですか」

「八幡の方は特に汚れてないので大丈夫だと思いますが、最初私が使ってた方は……」

「そこまで言つて言葉を濁した。だが、これだけでも十分に伝わっただろう。八幡は「… すいません」と謝る。」

「いえ… 誘つたのは私ですし…」

「でも、まさかうみこさんが処」

「シャラップ」

モデルガンを顎に突きつけて黙らせると八幡は「はい」と上を向きながら手を上げる。それを見てモデルガンを後ろポケットに入れると八幡はホッとしたように手を下げる。

「母が昼を作ってくれるそうなのでその間に片付けちゃいましょう」

「わかりました」

八幡も私が寝ていた方の掛け布団と敷布団にも汚れがついてないかチェックしてなかつたので畳んで押し入れに入れると、問題の方を浴室に運ぶ。

「布団ってシャワーとか大丈夫なんですか？」

「まあ、洗濯機がOKですし大丈夫でしょう」

「そんなもんですか」

頷くとシャワーの栓を捻って水を出す。汚れに重点的に水を浴びせると、初めての共同作業だなど、変なことを考えてしまった。それで頬が紅潮したのを感じ、ぱつと八幡に見えないように目を逸らしたが。

「なんですか初めての共同作業ですね。とか思っちゃったんですか」

「な、な、なんでわかるんですか」

あわわと聞き返す私に八幡は栓を閉めると頬をかく。

「そりやまあ…俺も同じこと思ったからじゃないですかね…」

八幡も少しばかり赤くなった顔を隠すように口元を抑える。

汚れのある程度落としたがやはり若干残っている敷布団を洗濯機に入れて洗剤を突っ込むとボタンを押す。

音を立てて洗濯を開始した機械を見ながら八幡が口を開く。

「昼飯食べてからどうします?」

「そうですね。父から車を借りて美ら海水族館でもいきましようか」

「… 父親いたんすか」

「ええ。朝が早いので夜は基本寝てますが」

昨日訪れた時間帯だと父は熟睡していたはずだ。漁業をやっていて父くらいの歳になると早めに寝ないとしんどいのだろう。

「挨拶、した方がいいですかね…」

「大丈夫だと思えますよ。そもそも人前に出てくるタイプではないので」

出てきても警戒心剥き出しにするので出てこさせませんが。言うところ、八幡は少し気が楽になったのか壁にもたれる。

髪も乾いてきていつものくせつ毛に戻り、目もどんどんいつものような淀みを帯びてきた。

「もうそろそろできる頃合ですし、いきましようか」

「そうっすね」

もたれかかっていた壁から離れると私の隣に立つ。何センチか高い身長故、見上げる形になるがその手は、握れる距離にある。

こんなところで手を繋ぐほどイチャイチャしたいわけではない。

そんなことはいつでもできる。

今しかできないことをしよう。

八幡となら何だつて楽しいし、嫌なことも乗り越えていけるはずだ。八幡でなければ私は幸せの切符を握ることはできなかった。

だから、その感謝を伝えつつ1歩1歩丁寧に2人の足跡を残していこうと思う。

「八幡」

サンダルを履いて呼ばれて振り向いた彼に私は浅く口付けをする。

「これからはより一層よろしくお願いしますね」

口を離して、私は笑顔で好きになった彼にそう言って歩き出した。

ルート4 飯島ゆん

プロローグ（飯島ゆんの場合）

「……うわ、最悪や」

見つめるは電子版に表示された小数点含む2桁の数字。

その数字を見た飯島ゆんは乗っていたとある板から降りて浴室に入り、身体を軽くお湯で流してから浴槽に浸かる。

「マジかあ……」

顔を両手で覆って大きくため息をつく、浴槽の中で体育座りになる。彼女をここま

で悩ませている存在、その名は『体重計』

人間、生きてれば1度は乗ったことがあるであろう代物。厚さ約7cm程度の板の中には乗った人間の体重や体脂肪率を測る他、製品によつては余計なことまで教えてくれるという。都内のゲーム開発会社、イーグルジャンプに勤める飯島ゆんはキャラクターデザイナーであり、ずっと座りっぱなしの仕事なのであまり動くことがない。通勤は電車と徒歩。

彼女は湯に顔をつけてポポポ！と思ひ当たる節を考える。なぜ、なぜ、数字が増えていたのかを。

- ①ちよくちよく紅茶と共にお茶菓子を食べる
- ②休みの日は家にいる
- ③お酒飲みすぎ

「あかんやん！」

バツと顔を上げてそう叫ぶゆん。しかし、時すでに遅し……というわけでもない。確かに脂肪は若干溜まってきたが、それでも年齢の平均レベル。それを教えてくれない体

重計は母と父が結婚した頃からあるものなのでそんな便利機能はない。体重と体脂肪率を教えてくれるだけである。が、一概に体重計だけのせいでもなく、それを目の前の防水ケースに入れているスマートフォンで調べないゆんも悪いのだ。

「しやーない。明日から痩せるか」

この時、ゆんは思った。このセリフ、何度目だろうと。

「そもそも周りがおかしいねんな。青葉ちゃんとかはじめ細ついし、ひふみ先輩も遠山さんも八神さんも……」

よくよく考えたら、みんな細い。細すぎる。健康診断や社内旅行に行った時に見たが細い。

（ゆんも細い部類です）

「どないしよ……」

瘦せようにも、一人でしても長続きがしないことは今までの経験上予測できている。ならば、誰かに手伝ってもらうのが一番だ。そう思つて湯船に浸かりながら彼女は知人達にメッセージを送る。

はじめ「私はいいかなー毎日自転車乗ってるし」
次。

青葉「(応答無し)」

23時だから、寝てる可能性あるから仕方が無い。次。

ひふみ「宗次郎のお世話とかあるから難しいかな…ごめんね。(>? <)」

と、比較的歳が近くてよく話す3人に送ったわけだが、返事がきた者からの感触はとてもいいとは言えない。青葉に関しては中学生か、というくらい寝るのが早い。

「しゃーない。変な雑学ようけ持つてるし、もしかしたら」

一片の希望をかけてゆんは同性ではなく、用がなければあまり話さないような後輩にメッセージを送った。返信がくるまでに髪の毛と身体を綺麗に洗い、洗顔もしてまたゆつくり湯船に浸かる。そして、返事が来てるかとスマホを見てみると。

生意気な後輩「ええ……それ以上細くなったら骨になりますよ……」

その返事を見てゆんは一瞬だけムツとなるが、よくよく見るとつまり『別に痩せなくてもいい』という意味ではないかと気づく。

「……」

仄かに顔に熱が籠るのを感じつつも、即座に否定する。数字は嘘をつかない。あの数字を見たからには自分は全然細いとは思えないのだ。

『もう先輩命令や！やるで！』

勢いでそのようなメッセージ飛ばしたところで、長風呂を母親に心配され出るように促されたので湯から出る。

この際、痩せれるなら誰でもいいかと送ったメッセージ。これが色々な出来事を招くきっかけになるのだが、この時のゆんには知る由もなかった。

意外にも飯島ゆんは不器用である。

コンプレックスでモジモジする女の子って最高だと思っただが、わかる人はいないだろうか。

本来、そこまで気にすることではないのに、自分だけがそれを気にしている。

黒子の場所が特殊だとか眉毛が常に困り眉になってるだとか。

当の本人からすれば恥ずかしいことなのだろうが、こちらはそこまで気にならない。むしろ、可愛いと思う。

それを気にしてモジモジしている女の子が、俺は嫌いではない。

例えばこういうのはどうだろう。

戸塚が自分の容姿を気にして男らしくしようとしているがそれが空回りして「え、えへへ：失敗しちゃった」とか穢れの知らないスマイルで言ったら。俺は間違いなく死ぬ。そう、確実にだ。

他にも、涼風が自分の胸……いや、これはやめておこう。なぜか今ここで言ったらいつの日か俺は絶対零度の氷河の下から死体で発見される恐れがある。

時に、例外があるとすれば、マザコン、ファザコンのような精神面でのコンプレックスは気にするべきだと思う。やめろ、というわけではなく人前であまりさらけ出さない方がいいんじゃないかと思う。自分のためにも、周りのためにも。シャア・アズナブルって知ってる？

ということだ。

ここまで述べた通り、俺は美少女が自分の肉体的コンプレックスに対して嫌悪感を抱いてモジモジしたり、頑張っているのを見るのが大好きである。ちなみにCOMPLEXのBE MY BABYも好きだ。

まあ、そんな女子はそうそういない。いるとすればそうだな、確かゆん先輩が体重とか気にしてたな。

見た感じそんなこと無さそうなんだが。どちらかというところ、はじめさんやひふみ先輩よりは軽いと思うんだが。どこがとは言わないが。

「八幡、ちよつと」

「ヒイツ!？」

先程まで失礼なことを考えていた相手に突然話しかけられたら変な声が出ると思う。まさか、俺の考えていたことが伝わってしまったのだろうか。もしくは口に出てた説。

「ヒイ?……まあええわ。昼ごはんちよつと付き合ってくれへん?」

俺の不審な態度に首を傾げながらそう言うゆん先輩の様子からは特に何も感じられない。
ない。

というか、お昼のお誘いに俺が驚いてる。

「構いせんけど……?」

「ほな、先降りてるから」

そう言ってエレベーターの方へと歩き出すゆん先輩を見送ってから、パソコンをスリープ状態にしてスマホと財布を持って立ち上がる。

なんだろ唐突に昼飯に誘うなんて。

あれかラーメンが食べたくなっただけど、1人じゃお店に入れないから付き添いで来てくれということだろうか。

いや、それなら何の気兼ねもなく入ってて仲のいいはじめさんを連れていくはずだろう。

チラリと当のはじめさんを見れば、また企画書練っててそれどころでは無さそうだ。つまり、これはゆん先輩なりの気遣いなのだろう。感動的だな。だが無意味だ。

俺がここから動かなかつたらな。まあ、了承したから行くけど。

###

下に降りると、ゆん先輩が待っていてくれたのでその事にまずは安心する。これでい

なかつたら人間不信になっていたところだ。

けど、ゆん先輩はそんな人じゃないからな。とりあえず、ゆん先輩がパスタを食べたということとでサイゼリヤに行こうと言ったんだが却下されて、少しばかりオシヤンティーなイタリア料理店に入る。

「うちはアサリとインゲンのパスタで」

「俺は半熟卵の乗ったカルボナーラで」

「わかりました。では、ご注文をお確認いたします」

店員さんの丁寧な復唱で、頼んだものが読み上げられたことを確認して頷くと「では、少々お待ちください」と厨房の方にオーダーを伝えに行く。

あとはそれが来るまで待つばかりだ。水を飲んで程よく喉の中を湿らせるとゆん先輩が口を開く。

「……今日はいい天気やな」

「え、あ、はあ、そうですね」

と、相槌をうつてから窓の外を見てみると思いつきり曇りだった。太陽なんか影も形も見えやしねえ。なんだこれは。

急いでゆん先輩の方を振り向くと、特に気にすることもなく話を続けていた。

「こ、こんな日はなんか身体を動かしたくなるな！」

「え、ああ。まあ、そうっすね」

関西人特有の変なノリだと解釈した俺は、放たれる言霊に同意することにした。否定したら会話が止まっちゃうし、これが最善策だろう。にしても、なんでほんのりと首筋が赤くなってるんだろ。あれかな、早く冗談に気付いてやとか思われてるのだろうか。

「ど、どうや八幡気分転換に！そ、その、……なあ？」

「え？あ、はあ？」

素で聞き返してしまった。気分転換に何をするんだよ。わかんねえよ。そう思ってた時にタイミングよく料理がやって来る。

「あ、料理来ましたし食べましょう。フォークどうぞ」

「…ありがとう」

いただきますと手を合わせてからお互いフォークで麺を絡めとっていく。

「美味しいやろ。ここウチのおすすめやねん」

へえ、そうなんですかとチュルチュル麺を吸う。これはラーメンとか食べる時はいいらしいがパスタを食べる時は音を立てて食べてはいけないらしい。でも、出るもんは仕方ないと思う。だから、俺は悪くない。

「それでな、八幡。そ、そのなあ？」

さつきから明らかに言葉尻がおかしいゆん先輩。どうしたんですか、と聞いてやりた
いがこのまま見守るのも楽しい気がする。

「この半熟卵上手いですね。カルボナーラとよくあつてる」

そんなことを言って誤魔化しながら黄身と麺を絡める。てか、麺でいいのか。パス
タって言った方がいいのだろうか。まあ、どっちでも伝わるからいいか。

「……あのさ、八幡」

「ん？どうしました？」

「この前ウチが言ったこと覚えとるか？」

「この前？」

「この前?この前っていつだ。もっと具体的にお願ひしたいです!切実に。」

「寝癖がひどい」

「言っただけど、違う」

「目が腐ってる」

「いつも通りやんけ」

「……私服がダサイ」

「それは言っとらんし、なんで若干落ち込んでるねん」

「じゃあ、なんなんですか。思い当たる節はこれくらいしかないぞ俺には。手を止めて考えてみるが中々出てこない。出てきたのをポンポン言ってみたがどれも違うらしい。」

「ごはん食べに行こう」

「言っただけども！違う！」

「下で待つとるから」

「それもやけど！違う！もっと前や！」

もっと前？どれくらい前だ。

俺にとっては1億年と2000年前のことでもゆん先輩にとっては8000年くらい前のことかもしれないじゃないか。

「…もしかして、覚えとらんのか」

「はい、そうです」

ここは素直に認めておくに限る。これ以上余計なことを言つて機嫌を害されるよりは全然いいだろう。

俺がすぐさま頷くと、ムツとした表情になるがため息を吐くとスマホ取り出して画面を向けてくる。

そこには1週間前くらいにゆん先輩が「痩せたいからダイエットに付き合ってくれへん？」

という文面だった。それに対して俺は、思ったことそのまま返した覚えがあり、その後強制的に手伝うように言われたのだが。

「いや、何も言つてこないんで、別にいいのかなつて」

「アホか！」

何故か怒られた理不尽だ。

「てか、痩せたいって。ゆん先輩そんなに太つてないでしょ」

「そんなことあらへん。服着てるからそう見えるだけや」

そうなのか…。女の子って不思議だわ。

「痩せるにしてもどう痩せるかによりますよ。食事制限をするか、運動するかのも2種類です」

「食事制限って…どれくらい？」

「まあ、プロじゃないから分かりませんが、ご飯とサラダだけみたいなの。1日最低限のエネルギー摂取してもらおうみたいなの」

言うのと、うげつと心底嫌な顔をされる。

「じゃ、運動は…」

「そうっすね、大体腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを正しいフォームで1日20×

3セットくらいやればすぐに痩せるんじゃないですかね」

「ひえっ…」

そんな世界の終わりみたいな顔しなくても。

「まあ、どちらにもちゃんと痩せれますけどデメリットはあります」

「……デメリット?」

「まず、食事制限は痩せても痩せる前よりも多い量食べれば確実にリバウンドします。運動する方は脂肪は減りますが体重は逆に増えます」

「な、なんで!?!」

「脂肪が筋肉になるんですよ。それと筋肉の方が表面積が多いからどうとかで体重は増えます」

この辺の知識は曖昧だから、ちゃんと調べてもらう必要があるが。概ね言ったことは正しいはずだ。

「根気よく続けられるなら筋トレとかをおすすめします。肩の筋肉とかほぐれて肩こりも取れますし、何より健康にいいです」

「なんかうみこさんみたいな言い方やな…」

……まあ、肩こり酷いって言ったら腕立て伏せ勧めてきたあの人だから。でも、してみたらしになった気がするから一応続けている。おかげで力こぶができるようになってきた。

「別に手伝ってもいいですけど、条件があります」

「……条件？」

「どちらを実行するにしてもゆん先輩にやる気がないと無理なので、誠意を見せてもらわないと」

「た、例えば?」

例えば?特に考えてなかったな。

そうだな…。

「とりあえず1週間アルコール禁止。ついでに服買うのも禁止にしましょう」

「ええ!?!」

いや、アルコールは飲みすぎると体にも悪いし中性脂肪たまるから。痩せるなら削らないといけないことだから。それにゆん先輩お酒に弱いし。

服に関しては痩せるなら、今着れない服も着れる可能性が出てくるから無駄遣いさせないため。という建前で、ゆん先輩は服を買いすぎとはじめさんに聞いたことがあるからだ。これを実行できればやる気を感じることが出来る。

「……ええ……でもなあ……」

「無理なら無理でいいですよ」

俺は別に困らないし。なんなら、手伝う必要性も減るからな。

「じゃ、俺そろそろ戻らないといけないので」

財布から千円札を出して机の上に置くと、固まったまま動かないゆん先輩を放置して外に出る。

いつの間にか雲は幾分か流れたのか減っていて、陽気な太陽が顔を出していた。

それにしても、ゆん先輩は俺にダイエツトの手伝いを頼むためだけにお昼に誘ったのか。しかも、あんなモジモジしながら。普段強気なゆん先輩が……。

これは結構アリだなと思いつつながら、俺は会社への道を一人で歩いていった。

ルート5 篠田はじめ

プロローグ（篠田はじめの場合）

子供の頃から憧れているものがあつた。

戦隊モノ、魔法少女、仮面ライダー、英雄譚。

正義の力を持つて悪を制する。

弱きを助け、強きをくじく。

昔からそんな人達が大好きだった。

でも、いつからだろうか。それらが実際には存在しないと知ったのは。

だから、彼女は願った。

もし可能ならば、自分だけの。

私だけのヒーローが現れることを。

#

「いくぞ！マグマシャチ！喰らえ！マグネットシユート!!」

「ぐわあああ!!」

磁石戦士MAG・ネット。その名の通り、磁力を使ってこの世に蔓延る敵を倒していくヒーローモノである。

毎週日曜日にヒーローショーが行われている複合商業施設の屋上では子供たちがMAGネットの大勝利に歓喜していた。その中に一人、大きなお友達がいた。

「かつくううい！でも、欲を言えばMAGネットパワーオンして欲しかったなあ」

篠田はじめ。ゲーム開発会社のイーグルジャンプでキャラモーションを付ける仕事

をしている。

ほぼ常に明朗快活な表情でショートヘアに健康的に程よく焼けた肌とショートパンツで顕わになった健康的な太もも。まさに健康女子であるが、本人にそのようなつもりはない。袖無しのノースリーブのシャツを着て、格好まで健康的だが、その胸は暴力的な大きさである。本人は動きにくいから邪魔と言っているが、無いものにとってはそれは「喧嘩売つとんのか？」とハイライトの消えた目で言われても仕方無い発言である。

それはさておき。

彼女は毎週日曜日にヒーローショーを見ては次の日からの仕事への英気を養っている。自分が好きでついた職業とはいえ、疲れるものは疲れる。それにこうして実際に動くヒーロー達を間近で見ることでもーションの参考にするのだ。まさに一石二鳥である。

「ぷはあーうん、ヒーローショーのあとのジュースは美味しい！」

子供たちが遊べるように設けられた屋上には、子供を見守る大人のためにイートインスペースや自販機があり、はじめはそこでオレンジジュースを買い、椅子に座って元氣

よく飲み干していた。

「さて、来週は…マジカルリレイメディアちゃん??:…うーん、これ知らないな。明明後日休みだし、一気見しようかな」

彼女の休みの過ごし方は基本的にアニメの消化とヒーローショーに当てられる。20半ばの年頃の女性ならば、シヨツピングや友達と遊びに行く、恋人がいればオシヤレや自分磨きに当てるが彼女はそんなものに興味はない。

確かに中学高校時代は学生としての本分を果たしながら、友達と遊んだり、シヨツピングをしたりしていた。その時は髪も長かったし、周りが色気づいて化粧もしていたので多少はそういうこともした。しかし、異性には特に関心はなかった。なぜなら、彼女には同級生の男子よりもテレビに出てくるスーパーヒーローたちの方がかつこよく見えただからだ。

「魔法少女モノか……これ見てるかな。いや、見ても来てくれるかなあ。んん……」

スマホの画面を見ながら小さく唸る。別に一人で見るヒーローショーも悪くないのだが、やはりこういうのは（その作品が）好きな人と見る方が面白いし、終わった後に感想も言い合えるから楽しい。

「八幡ヲタクじゃないって言う割には守備範囲広いからなあ…」

彼女が共にヒーローショーを見ようと思っているのは比企谷八幡というチームは違うが席の都合で近くにいる後輩である。目がアレであるがはじめは見た目はあまり気にしないので特に何も思わなかったのだが『敵の幹部にいそうだよな』とか考えてしまった。

その敵の幹部にいそうなくらい目が腐っている後輩だが、特撮や魔法少女にかなりの知識がある。日曜日のスーパーヒーロータイムの感想を月曜日に語り合うのが2人の日課になっている。

なので、同期で親密度の高い飯島ゆんよりもその手の知識が豊富な八幡と見た方が楽しめると考えたはじめだったが。

「どうやって誘えばいいんだ……！」

非常に当惑していた。

わりと比企谷八幡は気遣いがある。

優しさで『世界』は救えない。

この『世界』は欺瞞で満ちている。

『世界』は、宇宙は君を待っている。

大体の名言や格言と呼ばれるものには『世界』というフレーズが入っていることが多い。

話の規模を大きくすることで説得力よりも言葉の力を強くしようとしているのだろう。

そもそも、世界とはなんなのか。世の中すべての国。という意味なら『世国』という言葉を使うべきだが、そんな熟語はない。

というか『世界』という言葉の意味は曖昧なものではないかと思う。例えばオリンピックで『世界中が熱狂している』と、ニュースでキャスターが言っているのを聞いた

ことがある。果たして世界中の人々全てがホントに熱狂していたのだろうか。

これは『みんな』という言葉にも当てはまることで『みんなやつてるよ。みんな持つてるよ』とは具体的に何を指すのか。

2人以上何人未満の人を『みんな』というのか正確に定義してから出直してきてほしい。

最も、定義が曖昧な言葉は多いし、今更意味を正したところでどうでもよかつたりするのだが。

あと、気になるのは魔法少女の定義だ。何歳から何歳までを魔法少女といい、何歳以降から魔女と呼ぶようになるのか。

まだマジだとソウルジェムが完全に黒化した時点で魔女になるが、それ以外の作品では特に明確化されていない。

大体、小中学生までは魔法少女で高校からは魔女……いや、魔法使いに部類されるのだろうか。

どうしてこんなことを考えているかというと、ニチアサの魔法少女もので最初仲間だった魔法少女が途中で故郷に帰ると離脱し、何故か魔女になって出てきたのだが、月

日は2年程度しか流れていないのだ。12歳から14歳になっただけで、魔法少女から魔女になるとするのは如何なものかと思う。

スマホでスレや感想を読んでいると画面が切り替わる。珍しい俺に電話をかけてくる人がいるとは。最近だと全く身に覚えのない番号が福岡からかかってきたからな。流石に驚いて着信拒否しておいた。二度と間違えないでほしい。

「もしもし、比企谷です」

『あ、八幡。今、大丈夫？』

電話の相手は篠田はじめさん。モデリング班の人だが、会社のスペースの都合でキャラデザ班という人だ。健康的な小麦色の肌に快活な服装、男の視線を釘付けにするであろう立派なものをお持ちな先輩である。

さて、こんな休日は何用だろうか。

はじめさんとはよく顔を合わせることはいずれ、あまり親しいというわけでもない。

最初に買い物物の案内をされて財布を落としたと勘違いして持つて行っていないかった件以来、出かけることはなかったし。

仕事場でも「このキャラのモーシヨンこんな感じでいい？」みたいな確認レベルの会話しかしない。

『さっきのニチアサ観た？』

「ええ、見ましたよ。一通りは」

『どうだった？私はさ、シエルちゃんがまさかあんな姿になって帰ってくるなんて思っ
てなくてさ』

話の内容はどうやら俺が思い悩んでいた事らしい。やっぱり、俺が疑問に思うくらい
なのではじめさんも気になったのだろう。

それから、ニチアサの内容について数分討論した後、話すことが尽きて会話が止まる
かと思われたがはじめさんが電話の向こうで大きく息を吸う。

『……あ、あのさ、八幡。来週の日曜日空いてる?』

おそらく、これが本題なのだろう。わざわざ会社でも話せるような内容を電話で話すようなはじめさんでもあるまい。それに某SNSの無料通話でもないから料金が発生するだろうし。

早めに要件を聞いて切つてあげるとしよう。

「一応、空いてますけど」

『じ、じゃあさ。今度ショッピングモールの屋上でマジカルリイメディアちゃんのショーがあるんだけど一緒に見ない?』

まさかのヒーローショー観戦のお誘いだった。そういうのはゆん先輩と弟達と見た方がいいんじゃないかと言おうとしたが矢継ぎ早にはじめさんは続ける。

『ゆん誘ったんだけどさ、見てないからいかないって言うんだよ。だから、お願い!あれを1人で見るのはちよつと……!』

はじめさんが1人で見れないってことは俺がいると余計にまずい気がするんですが。

『それに八幡こういうの詳しいし、一緒に見た方が面白いと思うんだ。だからさ…どうかな…?』

「わかりました。来週の日曜ですね。また会社で時間とか教えてください」

『う…うん！ありがと八幡！じゃ、また明日！』

ツイッターと電話が途絶えた音がし、スマホを見れば30分も電話していたらしい。こんなに話したのは久しぶりだと思いつつ、ベッドに寝転ぶとさつき言われたアニメの公式サイトを見る。

「あーこれ知らねえわ」

どつかで聞いたことがあるから、知ってるだろうと思っただけ1回も見たことないや

つだわ。けど、見に行くと言った手前知らないまま見てもはじめさんに悪いか。

「仕方ない、借りて見るか」

そう決めて立ち上がり、顔を洗って歯を磨き飯を食べに行くついでにレンタルビデオやへ直行した。

ルート6 鳴海ツバメ

プロローグ（鳴海 ツバメの場合）

自分には特に何も無かった。

誰かに誇れる才能も無ければ、人に話せるような夢も無かった。

だから、両親の経営している旅館を継ぐことに反対もしなかったし、反感もなかった。自分は決められたルールの上を歩くだけでいい。

でも、友達は違った。

その子は絵の才能があつて、ゲーム会社に入ってある人のようになりたいという夢があつた。正直、最初は何のしがらみもなく夢を追える彼女に、羨ましいという気持ちよりも応援したいという思いの方が強かつた。

それと同時に、この子の夢を共に叶えられたらどんな気持ちになるのか。そんな好奇心が私の身を動かした。

その時からだ。私の今が決まったのが。

「うん、イーグルジャンプの内定もらえたから、旅館の仕事は継がない。約束でしょ、じゃ」

まだ何か話そうとする母を無視してガチャと受話器を置くと、私は自分を心配そうに見つめる親友と目を合わせる。

地元を離れて、私、鳴海ツバメと親友の望月紅葉は夢を叶えるために東京にやってきた。専門学校の内定もらって、アルバイトで稼いだお金で生活しながら、今日内定を貰える日まで頑張ってきた。

親に認めて貰うために、会社に認めて貰うために色んなことをした。プログラムのことをたくさん勉強して、なるべくお金をかけずに専門学校に入学するために普通の勉強

もして、学費も稼いで、それで大学やインターシップ先でのノルマもこなして。その為に2度と帰ってこない青春を切り捨てて。

「…私たち、すごく頑張ったよね」

「うん」

呟くと、ももは強ばった笑顔で頷く。多分、私と母さんの電話のことを気にしているのだろう。気にしなくてもいいと言っても、気を遣わせてしまっていることに申し訳ない気持ちがないと言えば嘘になる。

これ以上心配をかけないためにも、私は笑顔を見せる。

「何か言われたの？」

「まあ……うん、でも大丈夫。わかってたから」

が、それもすぐに解いてしまう。イーグルジャンプに入ると言った時の親を思い出し

てしまったから。私の気持ちを伝えたら、もう見たこともない剣幕な顔で「考え直せ」と何度も言われたものだ。それでも、私は親友と同じ夢を見たかった。

「何度も説得して内定が取れたら跡は継がなくていいと言質は取った。それにできっこないと思われていたはずだ。実際、入ることが出来たから、母さんを見返すことは出来た。」

「これで、本当に大丈夫だから」

「う、うん」

今、私はちゃんと笑えているだろうか。悲しい顔をしてないだろうか。本当に大丈夫なのだろうか。全てを擲ってきたわけではないけれど、失ったもの、手に入れられるものを手に入れられ無かった代償は大きいのもかもしれない。

「だけど、後悔はしていない。」

「なぜならやっと、私は親友と夢を叶えるための第1歩を踏み出したはずなのだから。」

鳴海ツバメは乙女である。

思い悩める表情をした人を見たらどう対応すべきか。

答えは人それぞれだろう。それは対応するかもしれないかだけでなく、するしないにしてもたくさんの方岐点がある。

まず対応する場合。どうやって話しかけるかだ。顔の話から入るか、雰囲気の話から入るか。もしくはどうでもいい世間話をしに行く。それか気付いてないふりしてさりげなく聞き出す。と、これだけでも多種類ある。

次にしない場合。これも相手の機嫌を損ねないような対応が求められる。大回りして目に映らないようにして避ける。スマホを取り出して電話をしてるふりをしてそれどころではないという風を装って過ぎ去る。それか清々しく目の前を通り過ぎるなどがある。

他にも相手の様子などで色々と変わってくる。相手が伏せていた場合は優しく話し

かける、寝てるのかー？と少し明るめに聞いてみたりしてみる。ちなみに後者はホントに寝てたらキレられるので気をつける。俺が移動教室だからわざわざ起こしてやったのにキレられたことあるから。

俯きがちに暗い表情をしていた時は、上で述べていた対応の中でその人物の性格などを加味して実行していくべし。

「うう…」

さて問題です。今までに無かったケースに遭遇したのですが、俺はどうすればいいでしょうか。答えてくれる人などいるはずもなく、目の前で泣き出しそうな顔で下を俯く鳴海。

朝にコンビニに寄る時間が無く、仕方なく食堂でうどんを食べようと食券を買い、おばちゃんに作ってもらいお盆を持って席につく。割り箸を割る。綺麗に割れなかった。それで手を合わせていただきますと麺に箸を当てた瞬間だった、目の前の席に鳴海がやって来たのは。

特にお弁当やおにぎりなどを持ってきたわけでもなく、それでいて食券を買ってここで食べに来た様子でもなさそうだ。うどんを啜りながら、様子を見ていると動く素振りを見せない。

まあ、何も言つてこないし、ただの気まぐれかと思つて気にせず箸を進めるとぐぎゅううとおおきなお腹の音が響く。

その音の発生源が沈鬱な表情から顔を赤らめて「うう…」と恥ずかしそうな声を出したのが先程のことである。

「鳴海、お前飯は？」

「……朝ちよつと急いでて、財布忘れて」

「望月は？あいつに金借りるなりすればいいだろ」

「ももは無駄遣いしないようにって財布持ち歩いてないんです…」

うわあ、真面目。そうだよな、お金つてあつたら使っちゃうよな。俺もお金があつた

らコンビニとかでチキンとか買っちゃうからわかる。

「なるほどな。で、頼る相手がないと」

「は、はい……」

「はあ……」

財布から500円玉を取り出して鳴海の前に出すと「ほへ？」と鳴海は素っ頓狂な声を出す。可愛いなそれ。

「それでなんか買ってこい」

「いいんですか!?!」

「え、そういう魂胆じゃないの?」

お金借りても問題なくて、なんなら一番ちよろそうな俺にご飯奢ってもらうために来たんじゃないの？

「いや、え、はは…」

反応を見るに凶星らしい。こいつ。別に俺じゃなくても、桜とかうみこさんなら貸してくれると思うが。桜は喜んで貸しそうだし、うみこさんもなんだかんだ言いながらも「それで仕事に支障が出るといけませんから」とか言い訳して貸してくれそう。

嬉嬉として笹蕎麦定食を頼んだ鳴海はまた俺の前に座ると笑顔で手を合わせる。

「いただきます〜」

「へいへい」

どうやら、俺は随分とこの後輩になめられてるらしい。ここでガツンと先輩の威厳を見せてやるか。

「おい、鳴海。これが当たり前だと思うなよ？」

「わかってますよ。にしても、先輩は優しいですよ。高校とか大学ではめちやくちやもてたんですよね？」

穢れない笑顔でそんなことを聞いてくる鳴海だが、そんな何気ない一言が比企谷八幡を傷つけた。

「ええっ!?なんでそんな顔するんですか!？」

「お、おま…俺がモテるわけねえだろ…!」

「悲しみながら怒ってる…」

もうやだこの後輩。確実に俺の急所をついてくる。真面目かと思ったら、一色を超えてくる小悪魔系だった。しかし、あいつみたいに計算された発言じゃなくて、本気で

言ってるあたり本当に怖い。

「よし、話変えよう。そうだな、えっと、えっと……」

あれ？　こういう時、何について話せばいいんだ？　わかんねえな。そもそも、俺この会社で仕事以外の会話したことあつたけ？

「ぶっ！　あはははははは！」

必死に話す話題について考えていると鳴海が吹き出した。

「なんで笑うんだよ」

「だって、先輩あんなに女の子に囲まれてるのに後輩と話できないって……おかしくて……はははは！」

お腹を抑えて勢いよく笑う鳴海に視線が集まるが、本人はそれに気づくと口を抑えて

自重する。ようやく、静かになったかと俺は食べ終わった皿を返しに行き立ち上がるうとすると、鳴海に止められる。

「あ、待つてください先輩。ちよつとお話が」

時計を見て時間を確認して「10分だけだぞ」と前置きをする。それに鳴海は頷くと箸を置く。

「私、ここに就職するためにあらゆる物を犠牲にしてきました」

「たとえば？」

「親が厳しい人だったので、成績上位を取りつつ上京するためのお金をアルバイトしながら稼いで。おかげで中学時代は勉強の毎日。高校になってからはそれにアルバイトも加わりました」

「…それで？」

「多分、だいたいの高校生が体験してる青春つてのを私は経験してないんです。友達とカラオケとか、買い物行ってプリクラ撮るとか。ご飯食べに行くとか」

「でも、それは望月がいれば今からでも遅くないだろ」

俺の言葉に鳴海は大きく頷く。

「はい。だけど、ももがいてもどうしてもできない青春があるんです」

まるで俺から次の質問が欲しいかのような目で訴えかけてくる鳴海にため息をついて「それはなんだ？」と聞くと、鳴海はふふつと笑う。

「ズバリ、男女交際です」

「……はあ？」

え？お前ってそういうキャラなの？てつきり、窓のガラス叩き割るとか、盗んだバイクで走り出すとかかと思っただわ。いや、それはないか。うん、冗談だ。

「私、中学高校と共学だったんですけど、さっきの理由で彼氏作れなかったんですよ」

「…おう。え？彼氏欲しかったの？」

「いや、別に」

じゃ、いいじゃん経験しなくて。てか、そんな経験不要だから。必要性皆無だから。そもそも、すべての学生が恋愛を経験して成就させるとか世界平和と同じくらい難しいことだから。

「だったら…」

「でも、この前ここに就職が決まって欲しくなったんです」

胸の前で手をギュツと握ると鳴海はそう呟く。望月からこいつの境遇は聞いている。実家の旅館を継ぐように親に言われていたがそれを断つてこうしてイーグルジャンプに来たと。そのため、親からの仕送りはなく自分でアルバイトして稼いだお金でやりくりしていることも。

きつとさっきの話はすべて事実なのだろう。勉強とアルバイトに青春を捧げた彼女は、楽になった今。自分が経験できなかった青春というのを経験してみたくなったのだろう。

「で、俺に用つてのはあれか？彼氏の候補を紹介しろってことか？悪いが、俺は友達が少ないな……」

「はい？何言ってるんですか先輩」

いや、俺の男の知り合いって弁護士見習いの爽やかイケメンと小説家志望のヲタクと超絶可愛い戸塚、あと小町に張り付くカMEMシみたいなのくらいだぞ。あと、戸部とか葉山の取り巻きとろくろ回しするやつ……あ、玉縄だ。それくらいか？それくらいだな多分。

この中でろくなの戸塚くらいしかいないけど、戸塚を紹介するわけにもいかねえし。大志も小町から引きはがすために押し付けるのもなあ。

「別に先輩に人脈がないのは分かってますから」

「え?……あ、そう」

「だからなんでちよつと傷ついてるんですか」

自分で言う分にはいいんだけど、人から言われるとちよつと嫌じゃない? 分からない? この俺のめんどくさいメンタル。鳴海はジト目を向けるとすぐに咳払いして、目を逸らしながらこう言った。

「だからですね、その…先輩に青春を味合わせる役をしてもらってもいいかなーって」

「はー。」

モジモジと体を揺らしながら爆弾発言をした鳴海に俺は驚きのあまり口をポカんと開ける。

「ほ、ほら！私が見つてる男の人で安心できるの先輩だけですし！それに先輩ってなんだかんだ優しいじゃないですか！」

手をブンブン振りながら激しく俺のプラスポイントを上げようとするが、聞いてる本人としては何言ってるんだこいつ状態である。

「冗談もその辺にしとけ。だいたい俺なんかと」

「冗談じゃないです」

窘めるように俺が言うと、鳴海はきつとした目付きで俺を真正面から見据える。

「こんなこと、冗談じゃ頼めなです」

鳴海は席から立ち上がり「お願いします」と俺に頭を下げる。周りからは奇異な目が集まり、俺はやむを得ず口を開く。

「わかった、分かったから座ってくれ」

「ほんと、ですか？」

上目遣いでそう聞かれたら「ああ、おう…」
と変な声が出てしまった。

「やったー！じゃ、まずは電話番号交換しましょう。次にメールアドレスとLINE
やってます？」

水を得た魚のように畳み掛けてくる鳴海の認識を俺は改めなければならぬらしい。
鳴海ツバメは小悪魔ではない。乙女であると。

ルート7 八神コウ

プロローグ（八神コウの場合）

ピピピピと寝ている者を起こすために鳴り響くアラーム。自分で設定したんだろ
うけど、いつもよりなんだか音が大きくて耳障りだから、止めようと思ってくるまっ
てる毛布からゆらりと手を伸ばす。

「ん、んん……うるさい……」

普段ならそこにあるはずの目覚まし時計のボタンを押そうとするが、空振りしてしま
う。

「むにゃ……っ？」

あるはずのものが無い。それに違和感を感じて、瞼を開ける。ない。ゴシゴシと目をこすって再度確認するも、ない。

「あれ……いつ……！」

むくりと身体だけ起こすと猛烈な頭痛に襲われる。二日酔いだ。

「そういえば、昨日八幡に焼肉奢ってもらってビール飲みまくったんだっけ……」

PECOのメインビジュアルの件で後輩に勝負挑まれて、それに負けるわけには行かないからと禁酒してまで描いたんだっけか。で、勝ったから八幡に焼肉を奢ってもらって……それで……。

「……………どこだ」

見渡せば全く知らない部屋に知らない天井。綺麗に片付けられた部屋だが、ホテル、という感じはしない。クローゼットに大きな鏡、小さなガラスのテーブル。その隣には

小さな冷蔵庫らしきものと、本棚がある。

こんなのホテルに置いてあるかよと頭をかく。ここがどこか思い出そうにも、酒のせいで後半の記憶があまりない。

もしかしたら、と自分の身体をまさぐってみる。

「……うん、ないな」

いつもと変わらない凹凸のないボディ。これは私、八神コウのボディだ。どこかの誰かと入れ替わつてるという可能性もあるかもと思ったけど、そんな二次元的なことがあるわけが無い。

「てか、上着どこいった」

自分の部屋や職場の机の下でもないのに、下着で寝てしまっていた。りんの家ならありえるし、ホテルとかでもこのスタイルなんだけど。流星に知りもしない誰かの部屋でこんな寝方するわけない。

「まさか……」

自分と昨日共に焼肉を食べた後輩が？だとしても、あいつにそんな気があると思えな
いし、いやあつたら嬉しい……わけでもないけど、まあ、うん。

さて、ベッドはシングルだけど、私が下着姿つてことは、まさか。脱がされた？……
いや、でも。

「あの、起きましたか。八神さ……」

頬に手を当てて、あんなことやこんなことをされたのではないかと考えていると後ろ
から声が聞こえ、振り返ってみると。

「……つて、なんで下着なんだよ」

そう言って嫌そうな顔をするボサボサの黒髪に栄養が通っていないような目をした
後輩、比企谷八幡がいた。…不気味に似合ってるな、エプロン姿。

八幡がいるってことは、やっぱり八幡の家か。……ふーん。高卒の年収で二階建てなんて買えるわけないし、ここはロフトかな。にしても、結構いいところ住んでる……ん？あれ？なんで、八幡そんな頬染めて目を覆ってんの？

指の間からチラチラとこちらを窺うようにして何か悪態つくように呟くと思うとまた目を逸らす。どこを見てんだ？と八幡が見ていた場所に目を落とす。

……………。

「あああああああ!!!」

「ぶへらっつ?」

冷静になり、自分が下着姿であることを認識するとその場にあつた枕を八幡に投げつける。咄嗟に投げたそれは顔に直撃し、八幡は大きく顔を逸らす。

「な、何見てんだよ！」

りんや青葉に見られるのは慣れてるけど、流石に八幡に見られるのは恥ずかしいわ！

「す、すみません、服持ってきたんで置いときますね！」

ダダダダと駆け足で階段を降りていく八幡。途中で転ぶ音がした。どんだけテンパってんだよ。

「……まあ、それは私もか」

ベッドの毛布を身から剥がして出ると、置いていかれた服を取りに行く。見たところ昨日着ていた服ではない。奥から洗濯機の音が聞こえるあたり、洗濯してくれてるっばいな。

「……小町ちゃんのかな」

クリスマスの時に初めて会ったのだが、兄とは違いノリノリでキャピキャピという感じの子だった印象だ。しかし、身長は私より低かったような気がする。

下は家でも履くような黒のスウェット。裾がかなり余ってしまった。小町ちゃんってこんなブカブカの着てるの？ 上も同じで袖は余るしダボダボだった。

「キツイよりはいつか。……………」

服を着てから、ベッドの横に置いてあったクロゼットの横の鏡を見る。髪は思ったよりボサついていないけど、目の下のクマがすごいなあ。あんまり化粧とかしないけど隠したいなあ…………。

頭を抑えながら階段を降りると、それは見事な孤独な男の城があった。大きめの薄型テレビにスピーカー、人をダメにしそうなソファの前に置かれた長机。その上には水と焼かれた食パンが置かれていた。

「これ、食べていいのかな」

朝だし、昨日あんなに飲んだり食ったりしたとはいえお腹が減る。

「食べる前に手は洗いたいな」

キヨロキヨロと家の主を探すがこの部屋にはいないらしい。玄関に続くであろうドアがあるけど、別に手を洗うだけなら台所でもいいからと、台所に入る。

そして、手を洗ってソファアに座りパンにバターを塗って食べ始める。少し時間が経ってるからかな。生暖かいけどすぐくパリパリしてる。これどこのパンだろ。金の食パンってやつかな？食べたことないけど。

「ごちそうさまでした」

と、手を合わせて言うのと真ん中のドアから色々と物を持って八幡が現れる。

「あ、それ私のカバン」

「そうだよ。あんたのだよ」

若干、敬語が抜けてるどころか完全に抜けてる。未だに目を合わせようとしない八幡に私も目を逸らす。

「ねえ、昨日私たちなんかあったの…?」

紅潮するのを感じつつも、返答を待つ。

「……やっぱり、覚えてないのかよ」

げっそりした声音でこぼす八幡。一体何があったのかとソワソワしていると、八幡は嫌そうに口を開いた。

「あんたが自分の家に帰るの面倒だからって俺の家に行くってうるさいから、仕方なく連れてきたらいきなり玄関でゲロったんだよ」

「…………え!？」

なんか思ってたのと違う!？」

色んな意味で八神コウはめんどくさい。

昨日の夜のことだ。イーグルジャンプの新作ゲーム『PECO』のキービジュアルをキャラクター原案者の涼風青葉が描くか、イーグルジャンプで長期に渡ってイラストを描いてきた八神コウが描くかで勝負が起こった。

上層部の意見としては、フェアリーストーリーを手掛けた葉月しずくと八神コウの期待の新作ゲームとして売り出したかったようだが、八神さんが発案者の涼風が描くべきだと言い出したのが発端である。多分。

それに涼風は了承して勝負になり、結果として涼風のは選ばれなかったものの、版權イラストして何らかの形で使うということでのこの一件は幕を閉じたのだが。

「よおし、はちまんかえるどー！」

「この人、めちやくちや酔っ払ってやがる」

この物語にはまだ続きがあったのだ。八神コウが勝ったら比企谷八幡が何故か焼肉を奢らされるという謎ENDが。

「はちまんおぶってー」

呂律も回ってない。自分で歩けなくなる。それほどになるまでドリンク飲み放題を利用してビールを飲みまくった八神さんは俺が手を引つ張つる形で店の前に立っていた。キービジュアルを描いてる際に本気を出すために完全に禁酒したらしく、その反動がきているのだろう。にしては、飲みすぎだ。

店から出すのにも一苦労し、これから家に送ることを考えると非常に頭が痛くなる。いつそのこと遠山さんに迎えに来てもらおうか。

とりあえず八神さんのあやふやなナビに従って歩き出すと、しばらくしないうちに八神さんが何か思いついたように声をあげる。

「そっかー！べつに自分の家に帰らなくてもはちまんのところに泊まればいいじゃん！

わたひてんさーい」

「どっがだよ」

確かにここから俺の家は近いけども。会社の先輩、それも女の人を泊める器量なんて俺には持ち合わせていない。まあ、その辺でタクシー拾って連れて行ってもらう。そうするでしょう。と、財布を開くと。

「ちっ、全然入ってねえじゃねえか」

いつもより多めに持つてくるべきだったか。これじゃ、八神さんの家まで送れても金が足りなくて今度は警察署行きだな。銀行も開いてないし、金は引き落とせない。

「八神さん、今いくら持つてます？」

「はひまんに奢ってもらうからいちえんももつてきてましえん！」

はあ、使えねえ。仕事以外でのこの人実は無能なんじゃないの？なら、どうしたものが。

「八神さんの家ってこっから歩いて何分くらいですか？」

「うーんとね！電車で15分くらい！」

「じゃあなんで駅前と逆方向にナビしてるんですかね」

しかも、徒歩で聞いたのに電車の時間返してきた。だいたい単純計算で40分くらいか？いや、この酔っぱらい様だとそれ以上かかるか。本当にどうしたものか。俺の家に寝させようにも、俺仕事だからな。この人に夕方まで寝られたらやすまにやらんくなるし。

「ねえいこうよーねえねえー」

「あー分かったよ分かりましたよ！行きますよ！」

そうなるのと休みの日が仕事になるので折れることにした。しつこいし、俺も明日は仕事があるので仕方なく自分の家まで歩き出す。家に着く頃には日は跨いでしまい、エレベーターで家の前までできて一旦八神さんを背中から降ろす。

「わあー、はちまんのいえだーどんなへやなのかなー」

「うぜえ」

酒臭いし、でも髪からはいい匂いするし、おぶってる時地味に柔らかいの当たってたし。そんなに大きくなかったけど。本人は気づいてなさそうだし、言わないほうが身のためだろう。

「ほら、八神さん寝るならベッドで寝ましょう。貸してあげますから」

「ええ？ いっしょにねないの？」

「寝てたまるか」

寝てる時に吐かれたり、一夜の間違いがあったら困るでしょ。俺が。下手したら遠山さんに殺されるかもしれんし。俺の中での遠山さんって一体。

玄関の鍵を開けて、八神さんを引きずるように家にいれるとチエーンをかける。これでやっと一息つけると思ったら、突然八神さんから気色の悪いうめき声上がる。

そして—————

「すみませんでしたア！」

朝になり、遅めの朝食をとった八神さんは俺から今までの経緯を聞いて土下座していた。過去にも未来にも歳上から土下座されることなんて想像もしてなかったわ。

「まさか無理矢理来た上にゲロってすみませんでしたアッ！」

あ、いや、うん……。まあ、女性がゲロるのは小町いたから見たことあるし、別に……。良くはないな。ゴミを見るような目で八神さんを見つめること数秒、未だに頭を上げないあたり本当に反省してるらしい。

「まあ、もうこの辺にしときましよう。夜あつたことはお互い忘れましよう。ね？」

「はひ……」

諭すように俺が言うと八神さんはくしゅんと鼻を鳴らしながら、顔を上げる。

「泣いてるんですか？」

「あ、いや、何回も頭下げてたらちよつと気持ち悪くなって……」

「台無しじゃねえか！吐くなら便所で吐け」

さっきの謝罪はなんだったんだよ。八神さんの使った食器を片付けると、俺はエプロンを外して椅子にかけると会社へ行く準備を始める。

「あれ？八幡今日仕事？」

「ええそうですよ」

あんたのおかげで昼番にしてもらったけどな。ひふみ先輩には腹痛ということで連絡を入れておいたが、ほぼ確実に信じているので罪悪感でいっぱいである。

「八神さんの方は？」

「んー私？」

そう言って首を傾げるとガサゴソとカバンを漁って中からケータイを取り出すと「うわぁ」と声をあげる。

「凜からめちやくちやメール来てる…あれ？でも今日昼から仕事じゃん…」

それは多分八神さんのことが心配だからという建前で、実はかまって欲しいだけ説。まあ、キービジュアル描き終えて酒飲んで気が抜けたからって寝かせてあげてほしい。遠山さんの家で。

「まあ、寝てたって返信しとけば問題ないでしょ」

「そうか!」

伝家の宝刀『ごめん寝てた』は女子が使うと恐ろしい効果を発揮する。それが夜の9時に送ったものでも帰ってくるのは翌朝でそれ以降の会話は発生しない。ソースは俺。軽くトラウマを思い出しかけていると、急に八神さんの遠山さんに返信を打とうとしたようだが、ピタリと手が止まる。

「どうしよ…なんて言っても怒られる未来しか見えない…」

そう言いながら画面を見せられ、見てみればメールの送信画面の上でピコンピコンとお手を立てながら『あら、まだ寝てるのかしら?』『もうねぼすけさん』『今日昼から会議だけど分かっている?』『ねえ?』(一部抜粋)と、同じ相手から無数のメッセージが飛んできていた。

「うわあ…」

思わずそんな声が出てしまった。メールからLINEに切り替えてるのほんと怖い。安否確認の仕方が怖い。これ俺どっかで見たことあるよ。あと、遠山さん仕事してください。

「まあ、のほほんとメールしとけば大丈夫でしょ」

「そんでもって八神さんの返しが軽い。軽すぎる。ミツフィーの体重より軽い。リンゴ何個分くらいだろ。」

「こういうところからすれ違いが始まるのかと思うと虚しくなるな。遠山さんには強く生きてほしい。」

「まあ、これで一安心だね」

「そうっすね。じゃあ帰ってください」

「ええ〜!?!」

ええ〜!?じゃねえよ。こっちのセリフだわ。まだいる気かよ。

「八神さんも昼からなら、一回帰ってシャワー浴びないと。そのまま行ったらめっちゃくちゃ酒臭いですよ」

「ああ…それもそっか…」

と、納得したように見えたが。急に手を上げると俺の貸した服を脱ぎ始める。

「おいおいちよつと待て!」

「ん?どうしたの八幡?」

「あんたがどうした!?!」

びつくりしすぎて普段出さないような声を出してしまった。おまけに敬語も抜けた。いや、それは朝からずつとか。

「なんで俺がいるのに恥ずかしげもなく脱いでるんですか？」

「いや、もう見られたしいいかなって」

「よくねえよ！」

もっと恥じらいをもつて！なんで会社ではいつもパンツで寝てるらしいのに俺が来たらずボン履いてるじゃねえか。その恥じらいどこいった。さっきも枕投げつけてきたじゃねえか。その時の赤みを帯びた顔はどこへいった。

その事を言うと、八神さんは笑ってみせる。

「ははは、それはまあ、八幡の運が悪いということだ」

「納得できるか」

運の悪さを呪ったことはあるけど、相手が急に脱ぎ出すのに運関係ねえわ。てか、

もう見えてるよ。白い太もとか腰にピチツと張り付く純白の布とか正面の乳房を隠してる水色の布とか。

わざわざぶかぶかだけど下着で歩き回られるのも困るし、あっちも恥ずかしいだろうから服貸してやったのに、なんで脱ぐんだよ。

「じゃ、お風呂借りるね」

「だから、なんでだよ」

「え…お酒臭いんでしょ?」

「自宅に帰ればよろしいのでは……?」

それがわかってどうして後輩の家で浴びようとするのか理解出来なさすぎて丁寧に聞き返しちゃったよ。

「んー、でも八幡の家からの方が会社近いし、それに服とか洗濯してくれたんでしょ?」

ゲロかかって臭かったからそりやするでしょ。そのまま寝られても臭いし。

「だったら、髪と体洗ってリフレッシュしてここから早めに仕事行った方がいいじゃん？」

「だから、その考えはどっから来るんだよ」

何がいいんだよ。こちとら全然よくねえわ。

そうこう言い争いしてる間にも時間は流れており、俺はそろそろ家を出なければまずい時間だ。昼番と言っても11時からと13時からで別れており、今は10時なので今から家を出て外で早めの昼食をとってそこから会社へと向かえばわりと余裕で間に合う計算だ。八神さんがいなければ。その事を遠回しに伝えると八神さんはぽんと手を叩く。

「あ、それなら鍵かけとくよ。会社で渡したらいい？」

それだと八神さんがうちに来たことバレルでしょ。そんなのが社内にて知れ渡ってても。絶対めんどくさいことになる。

「いえ、ポストに入れといてください。部屋番は表札に書いてあるんで」

念を押して「絶対ですよ」と繰り返すと「わかったわかった」と鍵を振ってチャラチャラ鳴らす。不安だ：てか、早く風呂入れよ風邪引くし、目に毒だ。いつまでそんな滑らかボデイ見せつけてくんだよ。

一応、体と頭を拭く用のタオルを出しておき、洗濯機の中の八神さんの服は乾燥機にかけて、シャンプー、リンス、ボデイソープを教える。八神さんは意外そうな顔で聞いていたが、特に何も口を挟んでくることは無かった。

「じゃ、よろしくお願いしますね」

「あいよー、行ってらっしゃいー」

久しぶりに聞いたその挨拶に俺は一瞬立ち止まりそうになるも、家の戸を閉める。

そういや、実家出てからただいまも行ってきますも言わなくなつたなと思い、俺は何年かぶりにその言葉を口にした。

……行ってきます

ルート8 望月紅葉

プロローグ（望月紅葉の場合）

二次元を愛する者なら、誰でも一人は「嫁」と呼ぶキャラがいるはずだ。それが男だろうが、女だろうが、彼、彼女たちは皆「嫁」と呼ぶ。

私、望月紅葉には大好きなキャラクターがいる。それは自分にとって嫁キャラと呼んで差し支えない存在だ。クールで無愛想だけど、仲間と認めた相手は必ず助ける。そんなフェアリーズストーリーに出るレラジェというキャラクターが私は惚れてしまったのだ。

学校のクラスの男の子や、バイト先の先輩とかに告白されたことはあるが、自分には恋愛感情というのがないのかと思うくらい全く興味がなかった。そもそも、胸ばかり見てくるし下心丸見えですごく気持ち悪かった。

母には年頃の女の子が恋愛をしてないなんておかしいと、心配されていたけど特に気にすることなく学校生活を過ごし、アルバイトもしていった。そのお金で新作のゲームを買い、初恋をしたのはいいが、相手がゲームのキャラクターです！と、そんなことに言えるはずもなく、親友のなる（鳴海ツバメ）にしか話していない。

それでそのキャラを作った人がいる会社、イーグルジャンプにインターシップでやってきたのだが。そこに入ったのは、私の憧れの人八神コウさんがいるからであり、きつとその人が私の大好きな彼を描いてくれたのだと思っていたが。

『畏仕掛けたぞ』

「わかりました」

獲物を狩るための鋭い眼光に切り整えられた緑色の髪。少しばかり猫背な気がする。のはやはり現実世界での先輩の影響だろうか。

強力な電気を発生させる畏の上に大型モンスターが乗り、体の自由を奪う。その動け

なくなった際に私は大剣を振りかざし、もう1人は弓で弱点である頭部を集中攻撃する。

程なくして、クエストクリアの文字が浮かび上がり、それぞれ倒したモンスターから素材を剥ぎ取っていく。

テレビ画面に広がるのは、虚構の世界。よその会社のゲームだが、モンスターを狩ることを仕事とする人間が武器を手に取り巨大な力に立ち向かうというものだ。

『で、こいつの次はなんだ？……確か亜種だったか』

「あ、はいそうです」

スマホの通話アプリを使って、声の主に戻事を返す。

給料が入ったので、発売予告がされてから楽しみにしていた新しくゲームを買ったはいいが、1人ではクリアできずこうして会社の先輩に手伝ってもらっている。

「すみません。今日も仕事だったんですよ…」

『…ん？そうだけど、別に気にしなくていいぞ。俺もこいつの素材欲しかったし』

仕事終わりにゲームを進めるのを手伝って貰うなんて申し訳ないと思っていたが、本当に先輩は優しい。

こうして比企谷さんに手伝ってもらうのは初めてじゃない。わからないことがあつて聞いたら一瞬間が固まるけどちゃんと教えてくれるし、お肉もくれるし、他の男の人みたいないやらしい視線を浴びせてこない。……けど、私を見た後に青葉さんに向かって可哀想な目を向けることはある。

私の先輩にあたる比企谷さんは変わった人で、まず目がとてもかっこいい。どうかっこいいかと言うと仕事で人を殺すような目をしている。趣味で人を殺すようなサイコパスじゃなくて、生活のためならそれが誰かのためなら殺すという目だ。私にはわかる。レラジエもそうだったから。

次にボサボサの髪。青葉さんに見せてもらった写真だと私となるが入ってくる前は

少し短かったけど、最近伸びてきたらしい。それがレラジエとほぼ同じ長さ。

それでレラジエとそっくりと言うと、比企谷さんは首を振って否定する。

あとは甘いコーヒーを飲むのと八神さんや遠山さん、うみこさんによく言い訳をするのと同じように夜に私の趣味に付き合ってくれる。

イーグルジャンプに入って私は八神コウさんに出会うことが出来た。憧れである八神さんの描くキャラクターはどれも素敵で心惹き付けられるものだった。が、レラジエを描いたのはあの人じゃなかった。

『あ、レラジエ作ったのってハッチーなんだよね？』

ハッチー。そう呼ばれたのはこのフロアでも数少ない男性社員の比企谷八幡さん。

本当にそっくりだと思った。見れば見るほど、知れば知るほどレラジエに似てると思った。

でも、本当は違うんだってわかってる。
分かってるはずなのに…。

『おい、望月、早く受注してくれ。もうこっちは準備出来たから』

「は、はい！」

『学校の出席確認じゃないんだからそんな大きな声で返事しなくてもいいんだが…』

呆れ混じりにそう言われて少し恥ずかしくなる。すみませんと謝りそうになるが、もしかしたら「謝ってばかりだな」とか言われてしまうかもしれない。実際、ソフィアちゃんもレラジエに助けてもらった時にお礼の言葉と今まで勘違いしててごめんというのを何回も言ったらそう言われてたし。

『あ、毒対策忘れんなよ』

そうだ、この人は比企谷八幡だ。決してレラジエじゃない。

だって、本物のレラジエは画面の中にしかないのだから。

望月紅葉は苦勞している。

休日の過ごし方は人それぞれであり、どんな風に過ごそうがそれに他人が文句を言うのはどうかと思う。休みなのだから一日中寝ててもいいと思うし、普段はいけないところに行くのもよし。友達と遊びに行くのも全然普通だろう。

しかし、それは本当に正しい休みの過ごし方なのかと問われれば答えに戸惑ってしまう。休みだから休めばいいのに、どうして外に行くのか。どうして遊びに行つてわざわざ疲れてくるのか。そんな評論文を読んだ俺は確かにそうだと頷いた。

休みとは社会の与えてくれた限りある悠久の休暇であり、それを邪魔することは誰にも許されないし許してはいけない。だからといって誰かを出かけに誘うのは間違つてないと思うし、それで心が安らぐなら尚更だ。

でも、俺が言いたいのは本当に休めるのかという話だ。どういうことかと言うと、1人で家でダラダラしていれば肉体的には休めるだろう。が、精神的にはどうか分からない。アニメを見たり、ゲームをしたりして過ごす休日は悪くない。それで明日から頑張ろうかと思えるかは別なのではないかと思う。

同じ生活のサイクルでは人は飽き飽きしてしまい、刺激を求めるため外に飛び出すのではないかと俺は考える。現に家でゲームをしてるより、本屋を巡って面白そうな文庫本を試し読みしてみるのはかなり面白い。

「やりました、比企谷さんフルコンボです」

恐ろしいスピードで画面の中で動く映像に合わせながら、手をスライドさせたり叩いたり弾いたりしてコンボを重ねていた望月紅葉は表示されたスコアに笑顔を浮かべる。

さて、三日ぶりの休日だがこうして後輩とゲームセンターにいるのはどうなのか。初体験なのでよく分からないが現状不安はあっても不満はないのでよしとしよう。

「おめでとさん。音ゲーとか好きなのか」

「はい。音ゲーというかゲーム全般が好きで…」

普段クールに真面目な顔をして仕事をしている望月とは思えない顔に少し驚く。プレイベートではこういう顔もするのだろう。別にこいつが音ゲーが得意なのは会社で難易度が高そうな鳴海の自作ゲームを平然とプレイするのを見て知っていたから驚かないが。望月のプレイベートに俺がいるというのは些か不思議なものだ。

望月と俺が遭遇した成り行きを説明すると。

やつとの休日。家にもすることがなく久しぶりに本屋に来た。

見て回るとこれといって気になるものはなく、そのまま帰るのも気が引けたので同じフロアのゲームセンターに寄り道してプライズフィギュアを眺めることにした。すると、回ってる途中で音ゲーコーナーに人だかりが出来ていた。おかげでUFOキャッチャーの周りには人がいなかったのでスムーズに見れたが1周ぐるりと回っても人だかりは消えていなかった。

流石に少し気になって見てみると、足を使うタイプの音ゲーをしている女性のたわわ

に揺れる胸に下賤な男達は目を奪われているらしい。

男の方も見てしまう気持ちは分からなくはないが、これは見られる方はたまったもんじゃないだろうな。と、他人事のように思い踵を返して帰ろうとした時だった。

『あーレラ……比企谷さん！』

と、あの人混みの中から俺をピンポイントで見つけ出して今に至るといわけである。どういうことだよ。説明になつてないぞ俺。

あと、地味に俺のことレラジエつて言おうとしたことは気付いてるけど触れないでいよう。

「比企谷さんがいて助かりました…その、ああいうのは慣れても嫌なもの嫌なので」

持つものは持つ故の苦勞があるのだろう。俺もこの目のせいで相当苦勞を……してないな。特にしてないわ。強いて言うなら、罵詈雑言のネタに使われたくらい。あんな下衆のような視線に晒されたことは無いしな。

望月の場合は黒いタンクトップの上にパーカーといふかなり目立つ格好をしてるせいというのもあるのだろう。自分では動きやすい格好をしているつもりでも、他人から見ればそうとは映らない時もある。だから、注意しろよと言ってやろう。

「大変だな…でも」

「……男の人ってやっぱりこういうのが好きなんでしょうか」

お前にも原因があるんだぞと言おうと思つたら、自分の胸元に視線を落とす望月。当然そこには男の視線を釘付けにするものがあるわけで。自分のをしばらく見た後、チラッとこちらを窺うように見てきた望月に俺は思わず目を逸らす。

「あ、いや、まあ……」

「好きなんですか……」

少し幻滅したかのように言う望月に俺は苦笑いを返した。だって、男の子だからね仕方ない。だが、望月も無自覚でもそういうのはやめた方がいいと思う。人によつてはそれで犯罪に走つたりしちゃうから。

「ほら、赤ちゃんの頃の名残りとか、それに大人になるにつれて男は甘える相手がいなくなるからそういうのに惹かれちゃうんだよ多分」

心做しか早口になって言い訳のようになってるが、大体事実だから。それに大きければいいってもんじゃない。小さい方が好きって人もいれば、中くらいがいいって人もいるんだ。そこまで気にすることじゃない。

「そういうものですか…」

「そういうもんだ」

望月に持つもの故の苦勞があるように、男には男の苦勞があるのだ。ホント、人間生まれ持った性には逆らえない。

「でも、比企谷さんからはそんな目線感じませんよ?」

「え? ああ、別に興味ないからな」

当たったりしない限りは。ほら、見る分には別に気にならないっていうか。服の上からだとそんなに大したことないように思うし、高校時代にデカいのと1年くらい過ごしたら慣れてたし、女子を、ましてや後輩にそんな目を向けるわけない。向けた瞬間牢屋行きになる可能性があるからな…。

「え……比企谷さんもしかして…ホ」

「決して違うから安心しろ」

養ってくれるなら靡くかもしれない。が、男で養ってくれる人なんて絶対ホモだから嫌だ。

「そうなんですか…」

「え、何？望月ってそういう趣味なの？」

「ち、違いますよ…その比企谷さんがそういうのだとちよつと困るっていうか…」

ああ確かに会社の先輩が同性愛者って複雑な気持ちだよな。…遠山さんは可愛いからまだ大丈夫かもしれないが、俺はビジュアルがあれだからな。もし仮に俺が同性愛者でもうちの会社男いないし問題ないと思うんだが。

「あ、ほら、比企谷さんレラジエに似てるから…そのレラジエが同性愛者だと…」

なるほど納得。普通、好きな相手が同性愛者って嫌なものか。最近、ゆるゆりな空間にいたせいかそのへん感覚が麻痺してたわ…。

「安心しろ。レラジエも俺も同性愛者ではない。それにレラジエは友愛を大事にするんじゃないか？」

自分の作ったキャラだから妙に愛着がわいて、まるでレラジェが自分のことであるかのような口振りで言ってしまった。望月は猛烈なレラジェファンだったと思い出し、わかったような口きいて悪いと謝ろうとしたが。

「……………そ、そうですよね」

一瞬驚いた顔を見せたが顔をプルプルすると顔を俯ける。急にどうしたかと思っただけ、特に怒ってるとかそういうことではなさそうなのでそっとしておくことにした。

「比企谷さんって、好きな人とかいるんですか？」

「……………いや、”今”はいないな」

これから現れてくれることを込めてある部分だけ強調しておいた。というか、そういう質問も基本NGだぞ。昔の俺なら『も、もしかして…俺のことが……………！』って勘違いしちゃうからな。

「…そうですね」

望月がそう呟くと、シヨッピングモールに19時を知らせるアナウンスが鳴り響き、望月は『あ』と何か思い出したかのように声を上げる。

「すみません、なると約束してるのでこれで失礼します…今日は付き合ってもらってありがとうございます！」

そう早口で言うのと駆け足でエスカレーターを駆け下りていく望月。転んで色々と大惨事にならないことを祈りつつ、俺も自転車を置いた場所まで歩き出した。

休日の過ごし方は人それぞれ。

家でダラダラするのもよし、誰かと遊ぶのもよし。シヨッピングを楽しむも、ゲームセンターで音ゲーをするのも。

そして、たまたま出会った後輩と話してみるのも悪くないのかもしれない。相手の持つの故に目線には気をつけなくてはならないが、それでも楽しいことは楽しいし、有

意義な時間というのは返ってこないからこそ全力で楽しむべきなのだろう。

つまり、休日とは寝て過ごすなら全力で寝て、遊ぶなら全力で遊ぶべし。俺はそう結論づけて自転車のペダルを漕ぎ出した。

比企谷小町の謀略。

千葉の八幡は博学才穎ではなく、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ねることもなく、ついで江南尉に補せらることはなかったし、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚くもなかった。

このあと発狂して虎になって友人に見つかることもなかった。そもそも友人がいなかった。なんとも悲しいことか。

虎になるならリングという名のジャングルでフェアプレイで戦う戦士になりたいものだ。最後行方不明になっちゃうから嫌だけど。痛いのも嫌だな。何より小町に会えなくなるのが嫌だからやめておこう。やっぱ人間平和が1番だ。

「ねえ、お兄ちゃんいつになったら彼女できるの？」

そんな平和を脅かすような発言をするのは俺の妹である比企谷小町。今年で大学受

験であろうに俺の家に来ては最近買ったばかりのピンク色の悪魔のゲームで遊んでいた。俺も特に止めはせず、共にカチカチとコントローラーを動かす。

「まあ、そのうちな」

「そのうちっていつ」

「別にいつでもいいだろ」

早く出来ていいものでもあるまいし。別にいなくてもいい。恋人なんて出来たところでどう接したらわからないし、そもそも、できないし知らない。生活に必要かと言われたらわからないしな。わざわざ知らないものを手に入れるほど俺も暇じゃない。いや、妹の相手するくらいには暇なんだが。

「というか、大学はどこ行くのか決めたのか」

「あー、うん。一応ね」

曖昧な返事に首を傾げる。どこの大学かと尋ねたら「お兄ちゃんには関係ないよ」と一蹴されてしまった。お兄ちゃんだから関係あると思うんだが。

「お兄ちゃん、電話鳴ってるよ」

言われた通り、小町の後ろにあるテーブルの上でスマートフォンが揺れていた。どうや電話らしい。手に取って見てみると登録されてない番号。俺が登録してなくて俺にかけてくるやつ……材木座か？でも、以前見た番号と違う。もしかするとあいつが変えたからその連絡だろうか。どちらにせよ登録はしないが、一応出ておこう。

「もしもし比企谷です」

『あ、比企谷さんですか？望月です』

少し意外な相手からの電話でスマホを耳から離す。聞き間違いかなと思い「え？」と言うと再び聞きなれた声が耳に届く。

『望月です』

「ああ、望月ね。で、どしたの？てか、俺の番号なんで知ってるの」

前者は電話をかけてきたということは用件があるのだろうと思つての質問。後者は俺の個人情報をもつた人物を聞くためだ。

『あ、いえその。今日お暇かと思つて。電話番号は青葉先輩に聞きました』

あのアマ、人の許可無く電話番号教えてんじやねえよ。おかげで電話帳の名前が増えるじやねえか。べ、別に嬉しくないんだからねっ！

「あ、そう。．．．悪いな今、家に妹が来ててな。その相手をしなくちやいけないんだ」

もし小町がいなければ暇だったのかと聞かれたら、おそらく映画鑑賞していたので暇じゃなかったかもしれない。そう言うと、小町がクイクイと袖を引く。

「誰から？会社の人？」

無言で頷くと「ふーん」と答えたあと暫し考える所作をとる。それに気を取られているとスマホから声が届く。

『そうなんですか…。すみませんせつかくの休日に』

「いや、気にするな」

そう答えた瞬間、小町がシユバピーンと俺からスマホをかつさらうと望月と話し始める。

「もしもし比企谷八幡の妹の小町です。いつも兄がお世話になっております」

お前は俺の母ちゃんか。というか、スマホ返せよと手を伸ばすと空いた手でチョップされ阻まれる。いてえ。

「はいはい！あーそうなんですか！だったら、全然OKですよ！むしろ持つててくださいい！……それは無理？あーそうですか。いや、紅葉さんは悪くないですよ！悪いのは全部うちの兄なんです！はい！……！」

望月が何を言ってるか分からないから会話の全容を把握出来ないが、小町のペースに押されてるのは見なくてもわかる。そして、何故か俺がデイスられていることもわかった。小町の中では俺は絶対悪い。

二言、三言話した後電話を切ると小町は自分のスマホを取り出しカタカタと何か打ち込むと俺に俺のスマホを返してくる。

「はい、お兄ちゃん」

「お、おう……なあ、お前望月と何話したの？」

「ん？別に」

嘘つけ絶対なんか喋ってたぞ。訝しげな目を向けると小町は無視して荷物をチャャツとまとめると手を頭にやって敬礼する。

「じゃ、小町帰るから！また今度ね！」

「あ、おい」

バイバイと手を振って急ぎ足で出ていった妹の後ろ姿はドアの扉によって遮られガチャンと音を立てて閉まる。一人取り残された俺はため息をつきつつあいつが置きっぱなしにしていたゲームをセーブして電源切る。

「あいつジュースも飲んでないじゃねえか」

これ小町が好きだって言うから出してやったのに。ルートビアなんて何処で飲んできたんだよ。ただのサロンプスの匂いがあるドクペじやねえのかこれ。開けただけで飲まれてない缶をどうしようか迷っていると玄関のインターホンが鳴った。

小町が何か忘れ物したのだろうと「空いてるぞ」と声をかけると扉がゆっくりと開く。

すると、中に入ってきたのはアホ毛をびよこんとさせたラブリーチャーミーな我が妹ではなかった。

淡い桃色のショートボブに黒いリボンのついたカチューシャをつけ、細いようでないやかな印象を二の腕とその巨峰を強調するかのようなノースリーブの白いカッターシャツ。下には膝したまで伸びた黒いスカートを履いた望月紅葉は頭を下げる。

「お、お邪魔します」

「え？あ、どうぞ」

どうでもいいことを思い出したが、喋る時に「お、」とか「え？」とかつくとコミュ障らしい。つまり、ここに2人のコミュ障が小さな小悪魔の策略に嵌まったことになる。

まるで意味がわからない。どういうことか説明を求めたいが聞いてくれる相手も答えてくれる相手もいなかった。

形と状況は違えど比企谷八幡はまた来た道を振り返る。

2人の男が岩場しかない荒野で殴打と蹴りのラッシュを繰り返す。それはまるでマンガの一コマであるかのような臨場感と緊迫感、同時に乱れる息遣いや動作の際に発する言葉から目の前で起きてるような錯覚に見せられる。

『オレは！昔の自分に戻りたかったんだあ！』

妹の軽率かつ無駄のない謀略により招かれた望月紅葉は先程まで小町が座っていたクッションの上に正座してコントローラーを握る。

来た当初は棚の上に置いてあるフィギュアやプラモを見れば目を輝かせ、その下にある本棚の漫画や雑誌（模型誌、ファンブックなど）を見ると少し前のめりになり、テレビの横のゲーム機本体やソフトが置かれたBOXを見ると笑顔を見せていた望月。

その中から1つのゲームソフトをとり2人で原作再現という名のバトルを楽しんで

いるところだった。

『本当にそうか…？』

戦闘中に流れる名言のオンパレードに望月のコントローラーを握る手が強くなる。

「最高に熱いですね…！」

「…そうだな」

確かにこれは名シーンだ。出てきてから度々仲間に戻っていたが再び悪に身を落とされた彼に、再放送でその姿を見た俺は驚愕させられたものだ。

ここからは名シーンのオンパレードといえる。プライドを捨てて悪に魂を売ったというのに、妻や息子の未来を守るために彼は散っていった。

しばらくして主人公がピンチに直面すると1日だけその敵を倒すために蘇り、永遠のライバルである主人公と合体して最強のお父さんになったり、お前がナンバーワンだと言ったりするのだが、そこまでいくのには少し時間が足りないかもしれない。

それにしても、この子何しに来たんだろ。かれこれ望月の好きな名シーンを再現しながらバトルしてるわけだが、こいつがここに来た事情に関しては一切触れられていない状態だ。

とりあえず、ヤムチャするシーンから始まり主人公の父親の叛逆、クリリンのことがー!!を終わって一番好きだという最終章を全部再現している。これが終われば俺はピククの魔人になって消し飛ばされねばならない。

「なあ望月」

「なんででしょうか比企谷さん」

画面から目を離さずお互いにカチカチと指を動かす。俺が話しかけても望月は攻撃の手を緩めずラツシュ攻撃を繰り返して来る。

それを俺は最低限受け止めながら、話を続ける。

「お前何か俺に用があつたんじゃないのか」

尋ねた瞬間、ラツシユの手が緩む。その隙に俺はコンボでガード不能状態まで追い込み瞬間移動後にトドメの一撃を食らわせた。劇中ではピンクの魔人の復活で引き分けというか後回しになったが、不意打ちとはいえ気絶させた王子に軍配が上がるのだろうか。細かいことは気にしてはいけない。

「えっと…」

負けたことはさほど気にしてないのか望月は顔を落とす。いや、手が震えてるあたり気にしてるのかもかもしれない。涼風に対抗心を燃やしてるところから察するに負けず嫌いのタイプだ。

その手の人間の手合いは高校時代の経験のおかげで慣れてはいるが度合いによる。あそこまではないと願いつつ言葉を待つと、望月はコントローラーから手を離し人差し指を合わせる。

「そ、その、… 先日比企谷さんには助けてもらったのでお礼をしようかと」

そんなことかと何故か安心して肩の力を抜く。顔と仕草だけ見れば何か愛の告白かな、なんて考えてしまったがよく良く考えればこいつの好きな相手はレラジェだった。まあ、考えなくてもそんな発想には至らなかつた。

にしても律儀なものだ。わざわざお礼のために連絡先を聞いて電話してくるとは。

「別に気にしなくていいぞ。俺はお前を助けたつもりは無いし」

昔、誰かに同じようなことを言ったなど思いつつ今度は言葉を選んで返した。これなら「そういうのじゃなくて」とか言われなくて済むだろう。しかし、俺の予期していたものとは違う反応がくる。

「いえ、でも…比企谷さんがそうでも…私はそう感じてるので」

強い明確な意思を持った目に気圧されそうになり、目を逸らす。あれだな、負けず嫌いで芯も通ってる上に自分の決めたことは一切曲げないタイプだ。ほんとにその手のタイプには心当たりがあるから出来ればその人にはないものを是非とも分けてあげてほしい。

「でもなあ・・・」

と言いかけたところでまた電話が鳴った。珍しくよく鳴るなど思い手に取ると今度は知ってる名前と知ってる番号が表記されていた。

出ようか迷ったが望月に「出ないんですか？」と首を傾げられる。それで仕方なく電話に出ると先程聞いた無邪気な声が聞こえる。

『やつほー小町だよー』

知ってる。名前は出るし番号はもしもの時のために覚えてるし着信音は専用のものにしてるからかかってきた時から分かってはいた。だから、出たくなかったのだ。

「なんだ」

『いやー紅葉さんと上手くやってるかなーって気になって』

「程々にな。で？」

言葉にはせずにどういふつもりかと尋ねると意味を汲み取った小町は電話の向こうで笑みを浮かべた。

『ほら紅葉さんから話聞いたら、お兄ちゃんにお礼したいって言うし。でも、お兄ちゃんはそのうちのいらないうって吐き捨ててそれだと紅葉さん可哀想だから』

流石長年俺の妹をやってるだけあって俺の気持ちがあわかってるし、俺のして欲しくないことも分かってらっしゃる。嫌そうにため息をつく、逆に小町はテンションを上げる。

『いいじゃん。人助けしたんだし貰えるものは病気以外貰つときだよ』

「でも、救急車はお金取らないだろ」

『お兄ちゃんは救急隊員じゃないでしょ？』

屁理屈を事実で返され言葉に詰まる。まさか妹にそう返されるとは思っていなかった。そのため次の言い訳をいう前に小町にまくし立てられる。

『ともかく、お兄ちゃんは紅葉さんのお礼をちゃんと受け取る。それにお礼も言う。それでそんなことないですって言われたらこっちからお返しだよってキス……』

そこまで言ったところで電話を置く。意味のわからないことを言い出すんだこいつは。成長したかと思ったら根は全然変わってなくてちよつと残念なようで安心してしまつた。

肩を竦めてスマホを置くと、ずっと待っていた望月に目を向ける。

「……わかつた。お前の気が済むなら礼くらい受け取るよ」

言うのと、望月はぱつと顔を上げると俺の顔を見る。視線があつたことを確認して、俺は努めて柔和な笑みを返す。

「あ、ありがとうございますー！」

大きく頭を下げた望月にふうと俺は安堵の息を漏らす。ここにはいない妹にこれでもいいんだろこれでと電話を切る。声は聞こえなかったが、文句があれば望月が帰った後にも連絡を寄越してくるだろう。

「まあ、今日はいいいから。それより続きやろうぜ」

バトルが終わってキャラクター選択画面のまま固まったテレビを指差すと望月は笑顔で頷く。

次はあのシーンやりましょうと楽しげな望月を横目にあることを考える。

もしこれがあの時の再選択なら。俺は今度は間違えずに出来るかと。前回と状況も俺が成したことの違いは大きい。だが、現実には助かったという人物がいることは一致していた。合っているのはそれだけで、他はまるで違う。

それでも今回は自分も、相手も傷つけずにことを終えることが出来るだろうか。考えてもそんなことは分からず、それは未来の俺と隣で楽しそうにしている望月次第だろう。

だったら、今は考えずに。ただ純粹に今を楽しむとしよう。

望月紅葉は思い悩む。

いつも通りカタカタとキーボードをうち、タブレットにペンを走らせる。慣れれば楽な作業だが、慣れるが故に見落としや細かなミスが多くなる。そのため俺はいかなる時にも言い訳できるように最善を尽くしている。本当に最善を尽くすやつはミスをしないように見直しをするものだが、どうせ納期前に全員で精査するのだから別段そうする必要は無い。

最初に楽しめた分は後に苦として返ってくるというが、楽しようが頑張ろうが最終的には苦になっているのだからどうでもいいだろう。

時計を見あげて、そろそろ切り上げようとキリのいいところで作業を終える。タイミ
ングよく短針が12の針を指したのでデスクから手を離す。

ほぼ同時に周りのメンバーも肩の力を抜いたり、軽くストレッチしたりしてから立ち上がる。

「じゃ、お昼行こっか」

「今日の定食なにかなー」

ゆんさんがはじめさんと共に出ていくと入れ替わるようにしてランチセットを持って桜がやってくる。

「あおっちーご飯いこー!」

「うん!」

相変わらず元気よさげに涼風に駆け寄ると、涼風も大きく頷いて立ち上がる。昼休憩が終わったら午後もあるという俺のローテーションに比べると2人のテンションは幾分高い。

そりやまあ、午前中の仕事を終えてやっとに休憩だ。わからん事もない。

「八幡とももちゃんはここで食べるの?」

「ああ」

不意に聞かれて鞆を漁りながら適当に答えた。行く前に買った弁当があるが、わざわざ食堂に行くのも面倒なのでここで食す。男のグルメというのはいつだって孤独なものだ。

別に食堂に行っても俺の居場所がないからとかそういうわけではない。

「私はこれがあるので」

給料はとつくに入ってるだろうに望月もいつもと変わらず大きなおにぎりをラップに包んで持ってきた。それに涼風は「そっか」と苦笑すると桜と食堂へと向かった。

そして、静寂が流れる。これもいつもの事だ。

どうやら鳴海も桜と食べるのは希らしく、あまりこちらに来ることは無い。1人で食べているのか、うみこさんやプログラマー班の人と食べてるのかもしれないがそこは分からない。だが、たまに見る様子では円滑にやれているようなのでそういうことなんだろう。

「あの」

箸を置いてマツ缶に手を伸ばすと遠慮がちな声で望月に声をかけられる。「どうした」と返すと望月は一つ食べ終わったおにぎりのラップを丸める。

「お礼ってどういうのが喜ばれるんですか」

真剣そうに聞いてくるが、それを今度お礼をするといった俺に聞くのはどうかと思うぞ。そう思いながらも一応それとなく答えておくかと口を開く。

「贈り物が妥当なんじゃないか？」

ハンカチとかお菓子とか。贈るものそれぞれに意味はあるらしいが俺は特に気にしないし。なるべく消費できるものがいいな。跡が残らないものとか。そういう意味だと食べ物類はオススメだが相手の好みに反するものだと好印象は受けない。逆にモノ類だといえる、いらないうで分かれる。最悪、売られる捨てるのどちらかになるので身

近な人に贈るのには適していないだろう。

「他には？」

「他？… まあ、食事とか映画鑑賞とかか？」

お礼の中に何か奢るといふ手段もあることを思い出す。ラーメンとか軽めのものなら受け取ってくれるだろう。映画も大人だと1800円とかするとこもあるが誰かの奢りだで行ってもいいという気にはなるだろうし、共に楽しめる可能性を考慮すればありかもしれない。

「なるほど…」

感嘆したようにスマホに何か打ち込んでいる姿を見るにメモっているのだろうか。今時はスマホにメモをとる人もいるというが、やはり俺は自分で書く方が好きだな。手書きのメモもペンも持ってないけど。大抵の事はメモしなくても覚えられるから構わないのだが、流石に細かな時間や日時、場所に関しては一応は書くようにしてる。して

も見返さないけどね。

「……比企谷さんが今欲しいものってなんですか？」

「休み」

「……モノでお願いします」

即答したことに少し引いたのか間が空いた気がする。モノか。特にないな。欲しくなったら買うし。金がない時や高価なモノに関しては必要か不要かを吟味して買ってるし。

最近だとゲームや映画の臨場感を味わいたいからとスピーカーを欲しいと思ったが、いいものはめちやくちや高いので中古でなるべく良質なものを買っても1ヶ月分の給料が吹き飛んでしまった。おかげで至福の時間を過ごさせてはいるが痛い出費であったことは間違いない。

「悪いがないな」

「そうですか……じゃあ行きたいところとか」

「自宅」

「……」

何故だろう。素直に答えているのに白い目で見られてる。
行きたいところか、真面目に考えるが思い当たるところはないな。

「見たい映画とか」

「チェックしてないからないな」

「食べたいもの」

「小町の作った味噌汁」

質問を重ねる毎に望月の顔がすごいことになってる。俺を見る目がどんどん怖く
なってるというか、俺のことをとても残念に思ってるようだ。

「望月、別に俺の好みとかに合わせなくてもいいぞ」

「え？でも」

「お礼するのは気持ちさえこもってればいいんだよ」

そう、お礼するのは気持ちだ。本当にその人に感謝しているなら悪意のこもったモノ
をあげることは無いし、することも無い。

結局はお礼というのは自分が自己満足するためにあげたりすることで、される相手は
自分のした善行を再確認することが出来る。

それさえ、出来れば別になんでもいいだろう。俺は気持ちさえこもってれば木炭みた
いなクッキーだって食べるし、嫌いなトマトでも無理して食べよう。それで相手が満足
してくれるならそれに越したお礼はない。

俺が思う最高のお礼は重すぎず軽すぎないものか、なくても構わない。

礼をされるために助けたわけじゃないからな。しかし、相手がそれを望むなら甘んじて受け入れよう。

「：：　そうですか」

俺の言葉に納得したのか、望月は食事を再開する。

とりあえず、どんな礼をされるのかは分からないがひとまず期待せず、慢心せずに気長に待つとしよう。

されど、比企谷八幡は澱んでいる。

春晴れの空を見上げると散り始めた桜の花びらが風に乗って落ちていく。視線でそれを追っていくこと数分、駆け足でこちらに近づいてくる足音が聞こえる。振り向くと息を弾ませて望月がやってきた。

「す、すみません、お待たせしてしまって」

「いや、俺もさつき来たばかりだから気にしなくていい」

着いたのは5分前だが、さつきと言っても差はないだろう。それにもし早く着いたら小町にそう言うように言われたから言ったまでなのだが。

ふうと息を整える望月を横目で見ると茶色のブーツ。細身の膝から上を隠すショートパンツ、この季節には体温調節しやすいようにノースリーブのシャツにカジュアルな紅い上着を羽織っていた。珍らしく体のラインが出にくい服を着てると思ったがそう

でもなさそうだ。上着脱いじやうとノースリーブだから二の腕は頭になるし、胸元も強調されるだろう。

その事を一応気に止めながら、望月に話しかける。

「で、どこ行く」

「あ、はい。まずは映画でもどうかと」

まずは。ということはその先もあるということだろうか。その先に誰がいるんだろ。団長はいい加減止まってもいいと思うんだが。

まあ、俺は歩き始めないと行けないので望月の隣を歩く。

歩きながら道行く人とすれ違う度に望月を見る男の目が気になる。確かに見た目は可愛いし、女の子の特権を微かに主張しているのだ。俺も戸塚に対してこんな目を向けるのだろうか。これからは気をつけようと決心すると望月が口を開いた。

「比企谷さんって好きな俳優さんとかいるんですか？」

「え？あ、そうだな…」

俳優っていうとあれだろ？ドラマ出てる人か。最近ではお笑い芸人もドラマ出るし、俳優も番宣のためにバラエティに出ることも多い。もうテレビ出てる人みんな俳優なんじゃねえかな。

「堺雅人とか」

「あ、私もすごく好きです！いいですよね鍵泥棒のメソッドとか！」

俺が言うのと望月は笑顔で手を合わせる。なんでそんなマイナーな作品を知ってるんだ。いや、『半沢直樹』とか『リーガルハイ』みたいな有名どころが出ると思ってたんだ。「確かにな。他にもクヒオ大佐とかゴールドデンスランバーも全然キャラクターが違うの
にいい演技だった」

「クヒオ大佐は知ってますけど、ゴールデンランバーってどういう作品なんですか？」

映画館のある複合施設までの道のりで随分前に見た作品について語る。上手く言葉にできたかは分からないが少なからず興味を持ってもらえたらいい。

「そういう望月は好きな俳優いるのか？」

「はい、たくさんいますけど一番って言われたら唐沢寿明さんが好きです」

へえ意外だな。てつきり、ジャニーズ系とか仮面ライダー上がりのイケメン俳優が来ると思ったが。いや、唐沢さんもスーツアクターでライダーマンやったことあるし仮面ライダー俳優…になるのか？

「結構渋いんだな」

「あんまりイケメンとかカッコイイ顔の人にときめくことが少なくて」

そういうもんなのか、と一人納得する。

「好きな女優さんは？」

「いない。でも、強いて言うならアホっぽい長澤まさみ」

ガツキーも堀北真希とか可愛いとは思うけど実際に会ったことないから、特に何にも思わないんだよなあ。

長澤まさみも可愛いかもしれないけど、あの人はヒロインらしいヒロインやるより、ヒロインなのにヒロインらしくない時の演技が一番好き。

「そうなんですか…。」

意外に思ったのか望月は目を見開くと自分の髪を触り始める。よく分からんけどとりあえず今日見る映画について聞いておこう。

「で、今日は何見るんだ？」

「… あ、えつと… これです」

はつと我に返った望月はスマホを取り出すと画面を見せる。そこには最近公開されたアニメーション映画が写っていた。

「あ、これか」

「… もしかしてもう見ました？」

恐る恐る聞いてくる望月に俺は横に首を振る。その反応に望月はほつと胸をなでおろす。タイトルや設定は気になったが脚本家を押し返してくる広告になんとなく嫌悪感を抱いて見に行く気になれなかったんだよな。どうせクソだろと思っただけ、見てもいいのに批判するわけにもいかなかったのでレンタルが出たら見る予定ではあったが、映画館に足を運ぶ気はなかった。

劇場につきあらかじめネットで予約してたのか望月はチケットを2枚買ってくる

1枚俺に渡してくる。券を見るに真ん中の少し左寄りだろうか。出来れば端っこがよかったがお金を出してもらってるが故にそう文句も言えない。

「映画まで少し時間ありますけどどうしましょうか？」

「そうだな…」

周りを見渡すと館内のフリースペースの席は埋まつてるし、映画限定グッズコーナーも結構な人が集まっている。あまり興味はないが一人でいたなら時間つぶしに見に行っていただろう。だが、2人だ。あまり誰かと見ようという場所ではない。それに見るなら鑑賞後になるだろう。そう考えると。

「下で飲み物でも買うか」

「ですね」

互いに意見が一致し下の階にあるショッピングセンターでそれぞれジュースを買う。

本来は映画館に持ち込みは禁止なのだが、始まる前に飲んでしまいか、最悪バレないよ
うに持ち込めばいい。バレなきや犯罪じゃないんですよとはまさにその通りである。

それに始まる前に飲み干したら途中でトイレに行きたくなるからあんまりしたくな
いしな。

開始10分前になったので再び映画館前に戻り、言われたスクリーンへと足を進め
る。中に入ると既に映画泥棒が捕まっているところで予告集などが見れなかったがさ
して興味がないので問題は無い。席につき、だらんと映画が始まるのを待っていると望
月が周りを気にしてか耳元に口を近づけて囁く。

「楽しみですね」

その声音はほんとにこの映画を心から楽しみにしてるようで、もしかしたらこれオレ
へのお礼じゃなくて自分へのご褒美のために来たんじゃないかと思えてしまう。

しかし、望月の顔を見てしまうと何故か怒りとか呆れは湧いてこない。純粹な目の輝
きや穢れのない笑顔がその気持ちをわかせるのか、あるいは俺も心の隅ではこの映画
を見たかったのかも知れない。

「あ、始まりますよ！」

そうやってはしやく望月を横目に俺は目の前の大きく広がるスクリーンに目を向ける。

大人びてるやつだと思っていたが根は思ったより子供っぽいな。鳴海もこういう部分を見て望月と共に夢を追いかけたいと思っただろうか。そんなことを考えながら、俺は映し出される映像に集中し始めた。

誰かを選ぶということは誰かを選ばないということである。

休日が終わると仕事なのがもはや当たり前になってきて1年経つが俺のスタンスは一切合切変わらない。人間置かれる状況が変わればその人も変わると言うが、それはその場に慣れていないだけであって慣れ親しめば元の本性というのが明らかになる。

俺でいうなら真面目にこなしつつも手を抜くところはちゃんと抜く姿勢になっていた。ほら、楽できる時に楽しみたいからね。

ググツと伸びをして周囲を見渡す。今日は思いのほか人が少なく俺の周りには0人。奥に行けばひふみ先輩がいるだろうがこちらに来ることはあまり無い。プログラマー班の方は全員来てるらしいが名前を知ってるのは3人だけで他の人は顔こそ覚えてるものの名は知らない。もしかしたら誰かと入れ替わったら名を知る機会があるかもしれないが、そんなことは永遠になさそうなので知らないままだろう。

しかし、まあ、周囲にだれもいないとなんだか落ち着かないものだ。寂しいというよりは、隣で仕事してる奴がいると「あー、俺もやんなきゃ」と少なからず使命感を感じて真面目に取り組むが、それが誰一人いないとなるとそういう気も湧いてこない。多分、午後になれば2人くらいは来そうだが、それまでの2時間はずっと1人か。

基本いつも1人だけどね！と、空元氣してみたがそこまでやる気は出ない。とりあえず、敵キャラを量産して色塗って上位個体は一部分変えて……ってやってたらトントんと肩を叩かれる。

集中していたためビクツと肩を震わせて振り向くと、驚いた顔をした鳴海がいた。

「なんだ鳴海か」

「なんか反応酷くないですかね…」

いや、ひふみ先輩か遠山さんあたりに追加の仕事持ってこられたと思ってたからね。仕方ないね。

「で、何？どしたの」

「あ、お昼一緒にどうかと思って」

鳴海の指さした時計を見るともうお昼休みだ。おかしいな俺が最後に時計を見た時は11時だったのに。もう1時間経ったのか。

だったら、俺も昼飯にしよう。昼ごはんはなーにかな！とカバンから出すと焼きそばパンとコロツケサンド、マツ缶といつものメニューだ。

取り出してそれを持ち立ち上がると鳴海に向き直る。

「で、どこで食うんだ？」

できれば食堂は避けたい。その旨を伝えると理由を聞いてくることなく、鳴海はじゃあと天井を指さす。その意図を汲み取って俺は歩き出す。

イーグルジャンプのビルの屋上はエレベーターでは直接行くことが出来ず、階段を利用しなければいけない。扉を開けると開放感溢れるスペースと青空が広がっている。

鳴海は小走りでベンチに座るとお弁当を広げる。

「比企谷先輩も早く」

ペしペしと隣を叩く鳴海にしようがないなあと横に座る。その間にマッ缶を置いて間隔を開ける。あんまりくつつきすぎると誰かに見られた時に困るからね。まあ、こんなところ来る人なんてめったにいないんだが。

「にしても、珍しいな」

「あーまあ。今日はちよつと気分転換に」

「いつもは誰と食べてるんだ？」

「プログラマー班の先輩とかねねつちともたまに食べますかね」

「望月とは食べないのか？」

その質問をした途端、会話が途切れた。正確には少し間が空いた。その間が気になっ

て鳴海に目を向けるとどこか遠くを見ると俺の視線に気づくと作り笑いを浮かべた。

「ももとはいっても夜食食べてますから」

「∴ それもそうか」

望月何かあつたのか。そう尋ねようと思ったがぐつと飲み込んだ。まだ最近知り合つたばかりでそんなことを聞くのは野暮だろうし、それに同居人だ。いくら仲が良くてもすれ違ひとかさそういうのはよくあることだろう。昔もこれからも。

「∴ 気分転換になるのか？俺で」

素朴な疑問だ。会話させても誰にでも出来ることしか言わないし聞かない。むしろ、会話させたら余計なことや自虐的な方面に向かうし。そんな俺と話したら気分転換になるのだろうか。

「そうですね」

考え込むような所作をとると鳴海は指を立てる。

「そもそも私、男の人とあんまり話したことないんです。だから興味があつて」

えへつと恥ずかしそうに笑う鳴海。かわいいなお前。小町と戸塚には遠く及ばないが、及第点はあげてやりたい。

まあ、その理由だと俺じゃなくても、他に男がいたら興味を持ったということになる。いかんいかん。変な方向に考えるのは俺の悪い癖だ。鳴海にそんなつもりはないだろうし、逆に俺しかいないことを可哀想に思う。

「専門学校だろ？男もいるんじゃないのか？」

「いますけど、単位とかバイトとかで話したり遊んでる暇なかったので」

「なるほど」

イーグルジャンプに入れたから今はその余裕があるわけだ。あれ？じゃあ、大学でも出来るんじゃない？でも、大学にいるよりはここで働いて給料貰うほうがいいか。

「それに」

昼飯を食べ終わってコーヒーを一気に飲み干そうとすると、鳴海が距離を詰めてぎゅつと拳を握る。

「私、比企谷先輩のこと結構好きなんですよ？」

まるで甘く蕩けるような。そんな声音で紡がれた後輩の言葉に俺は絶句した。それが嘘であろうと、本当であろうと。俺には人に好かれる資格はない。いつも勘違いして、迷って逃げてきた俺にそんなことはありえない。だから、排斥して取り除いた。後回しにしようとした。

その後始末がやってきたとしても、誰かに押し付けて逃げてきた。

「先輩はどうですか？私のこと」

だが、今回はそうはいかない。そうはさせないと握む手の力が強くなる。熱く、手汗の滲んだ手は答えを出すまで離さないと。鳴海ツバメの目がそう語っていた。

「……どうしたんだ急に」

冗談にしてはタチが悪い。そんな意味を込めて目を逸らしながら言うと、鳴海はか細い消え入りそうな声で呟いた。

「ももと映画行つたつて聞きました」

「この前たまたま会つてな。その時に、俺はそんなつもり無かったが助けたみたいだな。それでお礼がしたいつて言うから」

頭をガシガシかきながらあつたことをそのまま伝える。

「知ってます。ももから聞きました」

「∴何か関係あるのか。その、今のあれに」

「あります」

先程と打って変わって顔を上げた鳴海は真正面を向いて俺の目を見据える。

「やっと一緒に入りたい会社に入れて、ももは憧れの八神さんと仕事ができるようになって」

そこで一旦区切ると視線を外す。

「でも、私には憧れとかそういう人いなくて。うみこさんとか優しくして仕事ができとかっこいいけど、ももみたいな憧れとは違うくて」

そして、また俺に視線を戻す。

「そう思ってた時にミスしちゃってプログラマー班に迷惑かけちゃって。そしたら比企谷先輩が手伝ってくれて」

その時のことを思い出しながら鳴海は仄かに頬を染める。

「全然私のこと責めないで、嫌そうだったけど…その励ましてくれたりしてくれて…」

その言葉は真剣そのもので、俺に付け入る隙を与えない。

「私もその時のお礼しなきゃって思ってたっていつ誘おうかって思ったら…」

先を越された。

怒りを込めた声で放たれた言葉から俺は何かを察した。

「お前、それで望月と」

「はい、喧嘩しました。あつちは何のことかよく分かってなかったですけど」

苦笑いを浮かべているがその実苦しみの方が滲み出ている。親友と喧嘩したのだ。その後この会話は堪えるものがあるだろう。

だからといって、俺は優しくすることは出来ない。

「そうか」

ただそれだけ呟くとベンチから立ち上がって鳴海の手を振りほどく。鳴海は心寂しそうに太ももの上で手を置く。

「先輩はどっちを選ばんですか？」

「…何の話だ」

分かってるくせにそんなことを聞き返した。

はぐらかすことは許さないと鳴海の目は語っていた。

「私ともも。どっちを選ぶんですか？」

「選ぶも何も、理由がないだろ」

早くしないと昼休みがと終わるぞ、そう言つて歩みを進めると背中に言葉を受ける。

「じゃ付き合つてくださいって言つたら付き合つてくれるんですか？」

それに一瞬足を止めかけるも、ドアノブに手をかけて勢いよく開くと出ていく前に振り向かずに俺はハツと僅かに自虐的な微笑みを浮かべた。

「俺にその資格はねえよ」

ドアを閉めて急いで階段を降りた。最悪な気分だ。自分は何も変わってないんだと自覚させられた。鳴海が俺の何を見ていいと思つたのかは分からない。俺が助けたのは仕事だからだ。義務だ。働くものとして上司の命令に従つた。それが結果的に鳴海のみスを帳消しにすることになった。ただそれだけだ。

望月に関しても、俺は偶然そこにいただけで何かしたわけじゃない。

どちら俺に求めるものが間違ってるのだ。

俺は悪くない。だが、2人も悪くないのだ。ここで責められるべき人物は誰一人いない。

だが、確かにここに1人。気持ちを素直にぶつけられて何も返さなかった。そんな自分にも久しぶりに心底腹を立てた。

目を背けても先延ばしにしかならないことを比企谷八幡は知っている。

個人的な理由で投げ出すわけにもいかなかったので、最悪な気分のまま午後の仕事に取り掛かった。周囲には一人で頑張ってるから話しかけないでオーラを出して振舞っていたが、どこまで誤魔化させていたかよく分からない。だが、何も声をかけてこないところを見ると気を使ってくれてるのかもしれない。

本来、気遣いはしないされたくない俺だが今回に至ってはともありがたい。

苦味を噛み締めるようなブラックコーヒーを喉に流し込む。あー学生時代ならこういう時は保健室に駆け込むか仮病を偽って休むんだが、社会人になるとそうはいかない。それに今は猫の手も借りたくないくらい忙しい時期だ。俺一人が欠けるだけでほかの人にしわ寄せがいくのは無視出来ない。そもそも俺が許せない。ほら、俺より仕事されると俺の存在意義が本格的になくなっちゃうからね。

タターンとキーボードを叩いて描いたキャラをコピーしてまとめると立ち上がり、ひふみ先輩の席に向かう。

「どうですか」

「あ…：うん…：いいと思う」

聞けばいつもの反応よりなんとなく曖昧に感じる。俺の声音が暗いのが影響してるのか、もしくは目が平常より濁っているのかもしれない。それくらい今の自分の気分は最悪なのだ。

昼休みに珍しく後輩にご飯に誘われ、その時に好意を向けられた。冗談ならよかったのだがそうではなさそうだった。

おかげで午後の仕事は上の空とまではいれないが、余計なことを考えてばかりだった。

「八幡、今日はもう帰っていいよ」

そして今も考えていてひふみ先輩の言葉に反応が遅れた。

「え、あ、はい」

確かに朝からいた俺はもう帰宅していい頃合だ。気分も優れないのでお言葉に甘えさせてもらおうとぺこりと頭を下げてその場を離ようと歩き出した。同時にひふみ先輩は口を開いた。

「…あの、何があったのか…分からないんだけど…」

止まって顔だけ振り向きその続きを待つ。するとひふみ先輩は柔らかな笑顔を浮かべた。

「私に出来ることがあったら…なんでも言っただけ…？」

「はい、じゃ」

善意100%のひふみ先輩になんとか笑みを作って感謝の意を表して自分のデスクに戻る。もし昔の俺なら言われた瞬間「ひふみしえんぱくい!!」とドラえもんに甘えるのび太くんの勢いで抱きついていた頃だろう。よかった、現実でしなくて。脳内では何回かやりかけてるからそろそろやめなきや。そうやってなるべく気を紛らわせていると、隣で涼風がこちらを向いた。

「あ、八幡帰るんだ。お疲れ」

「…おう。お前も頑張ってくれ」

びつくりした…お前全然仕事してないくせに早く帰るとかいい度胸だなとか言われんのかと思った。まあ、午前中頑張ったし多少はね？

自然に振舞ったつもりだが涼風は違和感を覚えたらしく呟くような声で尋ねてくる。

「ねえ、今日何かあったの？」

その言葉にほんの僅かに動きが止まる。俺になにかあったと気づいていながら聞いてこなかったひふみ先輩とは対照的に涼風はそう聞いてきた。別に悪いことじゃない。他人を気遣うというのは会社という人の集まる場では大事なことなんだろう。だが、その優しさは俺に向けられていいものじゃない。

「いや、特に」

「嘘だ」

俺がそう言うと涼風はぐいっと顔を近づけてくる。

「何もなかったら八幡そんな辛そうな顔してないよ」

憂いを帯びたその目がとても優しく見えて、今この気持ちをつき出せば楽になれるのか。そんな幻想が見えたがすぐに瓦解した。

「まあ、人生辛いことばかりだからな。そりゃやつと仕事が終わったのに明日も仕事だ

と思うと気が滅入るだろ？ほらそういうのだから気にすんな」

ほんと生きてるだけで周りは冷たいし、温かさなんてない。シャアが隕石落としをやりにたくなるのも頷ける。それに同じ作業の繰り返しというのは慣れれば易しだが、逆に飽き飽きしてくる。俺の場合は失敗するリスクは少なく、修正も容易だから助かっていいのだが。ははつと乾いた笑いを出すと、涼風の瞳は俺を捉えた。

「そうじゃないでしょ」

真摯な目で放たれた言葉に俺は思わず勘弁してくれよ、と頭を抱えそうになる。ふと顔を上げると周囲の目がこちらに向けられていた。ゆんさん、はじめさん、望月。全員が俺を気遣うような、さらに心配そうな目で見つめていた。

「：： なんでもないって言うてるだろ」

それを俺はそれをふいにした。必要ないと、杞憂だと切り捨てた。人の優しさっていうのは毒だし、何よりこれは俺が一人でやるべき事だ。涼風達は関係ない。

昔から変わらない。なんて愚かで矮小な人間なんだ。嫌になる。

そんな気持ちが出たのか、自然と出た言葉は語気が強くなつていて突き放すようになっていた。怒りを誘ったのではないかと目を合わせれば、涼風は目を逸らした。

「……分かったよ。気をつけて帰ってね」

それだけ言うと涼風は仕事に戻る。これ以上は聞かないと目の前のパソコンと向かい始めた。他の面々もそんな涼風を見て椅子をくるりと回すとペンを握ったりキーボードをうったりと自分のやるべき事を再開した。

彼女らも優先すべきことは分かっているだろう。俺の心配よりも自分のことだろうし。

無言でブースを出るとすぐさまエレベーターのあるエリアに向かい、来るであろう人物を待つ。朝からいたという事は俺と同じくこの時間に仕事上がりになるだろう。本人の状態は知らないが集中力に欠けている状態ならうみこさんが残業はさせないだろう。

「あ……」

そして思った通り、その人物はやってきた。肩に掛けたトートバッグをぎゅつと握りしめると俺を一瞥し、エレベーターのボタンを押す。

「なあ、この後時間いいか？」

思ったよりスムーズに出てきた言葉に驚くがそれより驚愕の顔を見せたのは鳴海だった。え、と目を見開くと小さくであるが頷いた。

下に降りて俺が駐輪場から自転車を取つてくると歩き出す。鳴海はこれから夕食の支度があるのでそこまで長居できず、帰り道は途中まで同じなので帰りながら話すのがいいだろうということになった。

今にも雨が降りそうという黒い雲の下で俺は自転車を押しながら歩く。

「昼間のことだが……その悪い」

「なにがですか？」

そう口火を切った。ほんとに俺の何が悪いかよく把握出来ていないのに謝ってるあたり弱者のオーラ半端ない。首を傾げた鳴海に俺は喉から声を絞り出す。

「その、お前の好意に、ちゃんとした返事ができてないことだ」

歯切れが悪く紡がれた言葉に鳴海はポカンと口を開けた。え、なにその顔と困惑している鳴海は慌てて顔を逸らした。

「いや、あの、ちゃんと、好きってのは伝わってたんだな… って」

「まあ、あんな顔で手握られたらな」

少し苦笑しながら言う鳴海は耳を赤くする。

「それで返事は貰えるんですか？私、あの後仕事に集中できなかつたんですよ」

そりやお互いさまだ。なんなら、こっちの方が周りに気を遣わせてる。いや、鳴海の方もそうかもしれない。どうだったのかはさておき、話すことはそれじゃない。

「悪い。今は誰とも付き合う気は無いんだ」

いつかどこかの誰かが。お互いに面と向かって嫌いだと言いつつた人間の言葉を借りた。しかし、本心だ。今の俺に誰かと付き合える余裕はない。それに。

「お前、俺のこと本気で好きかって言われたら違うだろ」

確証はない。だが、好きになった理由を考えればおそらく間違いない。

「そんなこと…！」

「俺はあると思ってる」

ああ、今から言うのはとても残酷なことなんだろう。嘘ついて優しく励まして付き

合つてやればいいんだろうが、そうはいかない。そんなの本物じゃない。ただの偽善だ。

俺はヒーローじゃない。そんなことは誰もがわかつてる事だ。でも、こいつの中では俺はそういう立ち位置なんだろう。ならば、そこから自分を引きずり下ろすしかない。

「人つてのは自分がミスしたり辛い状況に置かれてる時に誰かに優しくされるとその人を好意的に見ちまうんだよ」

自分を助けてくれた。その思い違いがどんな悲劇を生むか。ちよつと優しくされただけで自分のことが好きなんじゃないかと勘違いして。勝手に自分の理想を押し付けて、勝手に失望する。その道のりを俺は既に乗り越えたのだ。だが、鳴海ツバメはこれが初めてだ。まだ引き返せる。

「1度、帰つて見つめ直してくれ。その気持ちが本物なのか」

それでもし、気持ちが変わらないのなら。その時はちゃんとした言葉を返そう。俺自らの、俺なりの答えを。

「……
わかりました」

渋々と、納得してない様子だったが首肯した鳴海に安堵する。これでいいのだと自分に言い聞かせるように俺は「ああ」と微笑みを返した。

これがいいのかは別として、鳴海は自分の感情と向き合い答えを出すだろう。どちらにせよ、俺の答えは変わらないがどちらも傷つかなくて済むならそれが最も望ましい。望月ともわだかまりのようなものが解ければいいと切に思うが、夕食を作るといふことは望月の分も作るというのだろうか。そう考えると彼女らはそう簡単に引きちぎれる関係ではないはずだ。

鳴海と別れて自分の家へと戻り真つ先にベッドにダイブした。あー疲れた。後でひふみ先輩と涼風になんか言つとくか…… まあ、別に明日でもいいか。多分明日からは普段通りやれるだろう。まあ、それも鳴海の出す結論次第ではあるが。

はああ、と大きくため息を吐いてそのまま沈み込むように眠りに入った。夕食は食べてないが起きてから軽くカロリーメイトでも齧ってればお腹は満足するだろうと、そう考えながら。

一睡してなかなか鳴り止まぬインターホンの音を聞いて目を覚ました。時計を見れば21時だ。こんな時間に宅配を頼んだ覚えはないし、日本放送からの集金にしてはしつこすぎる。もしかしたら小町かと思ったが、電話の1本くらい鳴らすはずだろう。スマホを見たが着信履歴はなく、時間と初期設定の海原だけが写っていた。であれば予期せぬ来客だろう。仕方なく立ち上がって、チェーンをつけたままドアを開けるとそこには意外な人物がいた。

びしょびしょに濡れた髪と服に虚ろで像を写していないような目。それを見て思わず俺は声をかけた。

「望月何してんだ」

「…」

聞いても答えは返ってこず、外でしきりに降り注ぐ雨の音だけがこの静寂を包んでいた。

何故か望月紅葉は話さないし離れない。

この状況にはどこか見覚えがあつた。が、そのほとんどが違つているのが実情だつた。

以前来た時にあつた初々しいオーラはなく、ただ俯いたまま動かない。

何をしているのか。そう問うても望月に反応はなく、まるで凍てついた人形のような表情を浮かべたまま立ちすくんでいた。

事情を聞こうにも外は雨。外の街頭や家の廊下が灯す光から望月の髪先や服が濡れてることが容易に把握できて俺は一度ドアを閉めてチェーンを外す。

「とりあえず入れよ。風邪引くだろ」

言つても望月は微動だにしない。瞬き以外の挙動を忘れたかのように、全くもつて動こうとはしない。俺はその姿にため息を吐く。

「：：！」

動かないなら動かしてしまえばいいと腕を掴んで家に引きずり込む。なんだか見られるととてもまずい気がするが、嫌なら流石に抵抗するだろう。

その時、やつと顔が変わったのを確認できた。どうやら生きてるらしい。引きずり込んだのはいいがこのまま上がられると玄関がびしょびしょになるので、念の為此から動くなどジェスチャーで伝える。洗面所に行き新しいタオルを出して、玄関に戻ってそれを差し出す。

「ほれ」

が、またも望月はピクリとも動かない。ただ目線はタオルに一瞬だけ動いたので眼球は動くらしい。まあ、見えてるかは別だが。

「：：たく」

わしゃわしゃと粗めに雨雫の乗った髪をタオルで拭き取る。雑にやっているようでその実ちゃんと言をとつていく。流石に身体と服は無理だが、足くらいはいいだろう。ふくらはぎとかは垂れてくるし…。けど、する前に一応聞いといた方がいいか。

「お前がやんないなら俺がやるが…。」

そこで望月の表情があらさまに変わる。暗く顔色の悪いものだったが顔を一気に紅潮させると俺からタオルを奪い取り服や足やらを拭う。その間に浴室までタオルを引く。濡れた靴に詰める用の丸めた新聞紙を用意して戻ってくるとある程度湿り気が取れた望月の姿があつた。

「靴脱げ。それでそのタオルの上通つてあそこ行つてシャワー浴びてこい」

あと靴下もなと付け加える。従うように望月は靴を揃えて脱ぎ、靴下を脱ぐと俺が敷いたタオルの上をぺたぺたと歩いていく。丸めた新聞紙を望月の脱いだ靴の中に入れる。こうすることで新聞紙が靴の中の水分を吸収するのだ。多分。

望月が浴室前で立ち止まったところで俺に視線を向ける。

「∴服はどうすれば」

「え？あぁ」

そうか、こいつ着替えなしで着たのか。いやそもそも何しに来たんですかね。それが疑問でしかないんですけど。それはさておき、風邪でも引かれると困るので指示を出す。

「洗濯機に入れてくれ。洗つとく。タオルは出しとく」

着替えは俺のシャツを渡すとして、下着は小町のがあるだろう。あるかわかんないけど。この前泊まりに来た時に置いたままにしてればあるはず。なければ買いに行くしかないだろう。

タオルを出して洗面所から出ると、水を吸って重くなった布の擦れる音がする。いつ出てくるかわからないが早めに用意してやろう。

さーて、小町ちゃんの下着はどこにあるのかなー？ここかなー？それともここかなー？と探していたが、そもそも小町ちゃんのブラで望月のたわわを抑えきれるのかという疑念が出てしまった。：。無理だな。確信した。誰がどう見てもはつきりわかる。付かれてもホックが逝くのが目に見えてる。最悪パンティーの方だけでもありやいいんだが……。とまるで変態のようにダンスや棚を漁っているとどこかの扉が開く音がした。

お巡りさんかなと少しビビったがよくよく考えたらここ俺の家じゃん。

概ね、望月が出てきたのだろう。ん？出てきた？服は上しか準備してないはずだがと身乗り出して洗面所の方を見る。すると、俺の置いておいたカッターシャツを湯気の上がる身体の上に直接着て、下は何故か用意した記憶のないトランクスを履いている月が映る。

「おい、それ」

「あ、えっと、ダメでしたか……？」

ダメじゃないけどダメかなやつぱりうん。女の子がトランクス履くってなんだろうな、可愛いなうん。いや、そんな場合じゃねえな。

「置かれてたから履いていいのかと…」

どこにあつたやつだそれと聞こうしたら言われた。多分それ俺が明日履くように置いておいたやつですね。まさかそれを履くとはとおどろいていると、あちらも若干目を逸らしてモジモジする。

「何か履かないと恥ずかしいので…」

そつか。うん！女の子だもんね！仕方ないね！

「お、おう。そうか…」

平常心 俺の心に 平常心。

よし、1句読めた。思いつきり字余りしてるけどそこは気にしない。ちなみに季語は

「俺」

俺自身がいついかなる時期でも暗い冬にすり替えることが出来る。採点されると確定で0点くらいうけどな。

台所に行きコップを出すと棚を開ける。甘いのが苦手らしいので普段はあまり飲まないブラックコーヒーにしようかそれとも紅茶か。案外、ホットミルクとかいいかもしれない。ミルクは甘くないし。人生は苦いけどね！

「ほら」

「あ、ありがとうございます…」

シャワーを浴びて落ち着いたのか口数が増えたか。それに表情もいつもより少し暗い気もするがさつきよりはマシかな。俺もいらんことばかり考えたおかげで望月との距離感は少ない。てか、望月のシャワー上がりの姿を見るのは2回目なのである耐性はある。でもね！やっぱりその胸は慣れないね！

ごくごく温めたミルクを飲むとほっと一息吐く。

「で、どうしたこんな時間に」

そろそろ話を聞こうとふりかける。

「…」

しかし、望月は答えない。曇った表情のまま唇を噛む。

言いたくないなら当ててやるか。

さて、判断材料は少ないが心当たりはある。それも今日とれたてホヤホヤのだ。こちらとしてもあんまり言いたくないけど。

「鳴海と何かあったか？」

「…！」

ピクンと凶星だったのか肩が震える。やはりなと嘆息すると望月はたどたどしくは

あるが話し始めた。

「…なるに比企谷さんのこと…好きなの？…つて聞かれて。それでわからないって言ったら…」

そこで止まった。

なんでだよ。言ったらどうなったんだよ。

待っていると望月は目に涙を浮かべると顔を手で覆う。

「なんかよくわかんないうちに…喧嘩に…」

「…そうか」

本人にもよくわかってないのなら聞きようがないな。困ったもんだ。ここで小町なら1から話を聞くんだろうが、俺は小町じゃない。よって俺に出来るのは黙って側にいてやることくらいだ。それが俺の唯一できることだ。

傷ついた心を癒すのは取り繕われた言葉でもマニュアルのような頭撫でもない。

時間である。それは俺がよく知ってる。

たった一人で傷つき、たった一人で傷を癒すその姿は虚しく悲しく写っただろう。だが、俺にとってはそれが当たり前なのだ。大体は寝たら次の日には忘れてるがふとした時に思い出してしまふので治ってないのが現実である。

自分の過去の忌まわしき記憶を取り除けたらと思うがそうはできない。隕石落としてくれるだけで記憶が飛ぶならみんな隕石落としやってる。

「…ん」

「おっと」

泣き疲れたのか望月はふらっとその場に頭から倒れそうになるがそれを既のところ
で肩で受け止める。こっちも痛いのが嫌だから肩も腕で受け止めたが。

力無くすうすうと静かな寝息を立てる望月に仕方ねえなと息を吐いた。

幸い今日は気温がちょうどいいくらいだ。エアコンも付けてるしワイシャツ一枚でも布団を掛ければ風邪は引かないだろう。起こさないようにそつとベッドまで運ぶと、ロフトから降りて洗濯機のスイッチを押す。

ゴーオンゴーオンと音を立てて動き出す洗濯機にうるせえなど悪態つきつつ、カロリーメイトを食べて歯を磨く。洗い物が出ないからカロリーメイト超楽。考えた人マジで天才だと思う。

望月の服とタオルだけだったので自分の寝床を用意していたらすでに終わっていた。

「よっつこ」

蓋を開けて籠に洗濯物を移す。その際にピンクのブラウスや妹や母のものと比べる。とでかい気がするブラが目に入って来たが気にしない。下着なんてただの布だ。気にしない。

浴室にバスマットをかける棒があるのでそこに下着やらブラウスをかけたハンガーに吊るしておく。あとは暖房をつければ朝には乾いていることだろう。

さて寝るかソファの上に寝転び布団をかぶる。帰ってきた時に寝てしまったからそう簡単には寝付けないだろうと思いつつも目を閉じる。

ベッドに比べるとソファは窮屈だし、布団も薄めなので少しばかり肌寒いが暖房がつ

いてるうちに寝るしかない。あと15分もすれば消えてしまうのでそれまでに寝ようと羊を数える。1匹2匹3匹4匹5匹……そう言えば羊の数え方は匹でいいのだろうか。頭とかじゃないのかなと雑念が入る。そのとき、階段が軋む音がした。目を開けて振り返るとそこには枕を持って目をこする望月がいた。

「あの、トイレ……」

「ああ、廊下のすぐ左だ」

コクリと頷くと望月は廊下へと歩いていくと思いきやこちらに来ると俺の袖をちよいちよいと引つ張る。

「分からないので付いてきてください……」

カクンカクンと頭を揺らしながらそう言われたら、歩いてる途中やトイレで寝落ちされかねないと思い付いていくことにした。

景気よくトイレの前で歌でも歌ってやろうと思ったが望月がそういうテンションで

はなさそうなのでやめておいた。

「∴ お待たせしました」

「ん」

短く答えるとりピングに戻り望月をベッドへと誘導する。ロフトへ上がる階段もふらつきつつもちゃんと登ることができた。まるで介護してる気分だ。望月が布団に入ったことを確認して降りようとすると、また袖を握られる。ドキリとまた振り返れば暗くて顔色はあまり窺えないがか細い声で望月が口を開く。

「∴ 一緒に寝てくれませんか？」

僅かに震えた声音から何か寂しさに怯えているような、そんな感じが読み取れた。

いつもは鳴海と寝てるからなのかは知らないし、人肌恋しくなったのかもしれない。だが、俺のベッドはシングルでとても2人が満足に寝れるようなスペースはない。

「ダメですか…?」

拒もうにもそんな声を出されたら身体が思うように動かなくなる。握られた手は熱く、自分の手から汗が滲むのがわかる。

「… わかった」

望月が寝たら抜け出せばいいと決めてゆっくりと布団の中に入る。さきほどから望月が入っていたからか布団の中は暖かく、心地よい感じがする。

望月に背を向けて相手が寝静まるのを待つ。

寝ないように目を開けてじっくりと耐えていると寝返りをうったのか望月の手足がこちらに向けられる。首筋には温かな息がかかりゾワゾワと変な気持ちになる。もう寝たかなと布団から出ようとした時、腰と足に望月の左腕と左足が乗せられる。

「…!?!」

さらには背中には柔らかな感触が走る。まさかこれほど確かめる必要性もなくそれ

が何かと判断できた。無意識なのか身体は動かないようにガツチリと抱きしめられ、離れようとすれば最悪望月を起こしてしまうことになる。

俺はそんな状況にもういいやと諦めると深い湖の底に沈むように眠りに入った。

いつだって比企谷八幡は振られてしまう。

朝、目が覚めて真っ先に思い出す昨日のこと。

唐突に後輩に好きかもしれないと繼げられ、あわよくば付き合っただけでほしいとまで言われた。その後、深く考えてくれと言い渡して別れた矢先に訪ねてきたもう一人の後輩。

「いつつ…！」

ベッドの上で寝たはずが気づけば床にうつ伏せで倒れていた。一人で寝ていればこんなことにはならないはずだが、と痛む節々を抑えつつ身体を起こす。

肩とか膝とか超えてえなと擦ると隣から寝返りと共に微かな寝息が聞こえる。

何があったかはよく知らない。ただ鳴海と喧嘩した。ということしか知らない。まあ、本人にもよくわかってないので無理もない。

起き上がりロフトから降りて洗面所に向かう。鏡で相変わらず澱んだ目を見て顔を洗う。拭いて次に台所に向かう。トーストにトマトソース、細切りにしたタマネギとカリツと焼いたベーコンを小さくして乗せて、さらにその上にチーズをふりかける。

あとはオーブンで焼けば簡単お手軽ピザトーストの完成である。

てか、あいつピザトースト食えんのかな。甘くないし大丈夫だと思うが。

けど、おそらく食べられるだろう。トマトが嫌いな俺でも食べられるくらいだし。少し手間をかけるだけで栄養も取れるし腹も膨れる。

タマネギとベーコンがなくなりそうだからそろそろ買わないとな。

お湯を沸かしてカップにコーンスープの粉を容れてテーブルに置く。こうすれば、湯を注いで混ぜるだけ。わざわざ熱いのに気をつけながら持つていく必要がなくなる。誰でも思いつきそうなことだ。

「…おはようございます」

ぼさつとボサボサの髪に俺の貸したワイシャツをしわくちやにしてだらしのない格好で起きてきた望月は挨拶すると椅子に座る。

それとほぼ同時くらいにオーブンが鳴ったので開けるとこんがりといい具合にチーズドロップとしてたしパンも焼けていた。ピーマンも入れた方がよかったかと思いつつも、それを皿に乗せて望月の前に出す。

「食つとけ」

「あ、はい」

短く答えると手を合わせてから一口パンを齧る。熱かったのかはふはふ言ってるのがなんとなく可愛らしいと思った。慌ててパンを皿に戻すと「美味しい！」と呟いた。そいつはなによりと浴室に向かう。触ってみると干していた布はちゃんと乾いていた。洗濯バサミを外して手に持つとソファアの上に畳んでおいておき、俺も食事をとる。

もぐもぐと少しばかり冷めたトーストを口に入れる。我ながら上手くできた。絶賛したい。もつと褒めてくれ……！まあ、腹は膨れても栄養価的には問題がありそうだが、朝は美味しいもん食べてテンション上げるに限る。

ズズズとコーンスープを飲んでいると望月が口を開いた。

「あの」

「ん？どした」

「すみません急に押しかけて、朝ごはんまでいただいて」

それは昨日のうちに言うべきだったな。別に気にしてないし、構わないが。

「他に行く宛はなかったのか」

一応洗濯する前にポケット中身を確認したが何も無かった。財布もスマホも。それではホテルはもちろんネカフェやカラオケで1泊過ごすことはできない。にしても、専門学校の友達の家とかあるだろうのにどうして俺の家だったのか。

「……その、私なる以外に友達がいなくて」

あ…これは地雷踏み抜いちゃったかな。思わず謝りたくなるからその顔はやめて欲しいな。うん。「そうか」としか答えられない。会話が続かない。だが、望月は話そうとしている。

「寝たら落ち着いたので1回帰ろうと思います」

「それはいいが、お前鍵とか持ってなかったけど鳴海は今日家にいるのか？」

聞くと望月ははっと顔を青くする。どうやらいないらしい。これは困りましたね。

「てか、お前今日仕事？」

「え、あ、はい…だから家に戻りたいんですけど」

さいですか。

今思ったんだけど、女子っていつもカバンの中に何を入れてるんですかね。財布とス

マホと化粧品と女性の嗜みくらいでしょ？カバンに入れなくてもポケットに収まりそうなモノだが。

「… 鳴海が家出るのって何時くらいだ」

「もうそろそろですかね」

ならば。

「今から急いで出れば間に合うだろ。ソファの上に着替え置いてるから着といてくれ。その間に俺も用意するから」

残っていたトーストを一気に口に入れて噛み砕いてスープで飲み下す。行儀が悪いが仕方ない。

ササツと片付けをすると、洗面所で歯を磨く。入れ替わるように望月に新しい歯ブラシを渡してやり、ズボンのポケットにスマホと財布、ポケットティッシュとハンカチを入れる。

「じゃ、行くか」

洗面所から出てきた望月にそう言うと頷きを返す。

家を出て鍵を閉めると駐輪場からチャリを引っ張ってくる。

「乗れ」

後部をとんとんと叩くと望月にここに座るように促す。少し困惑気味な顔で乗ると俺はサドルに跨りペダルを漕ぎ始めた。それからしばらくして望月が小声で聞いてきた。

「どうしてここまでしてくれるんですか？」

「…え？何が？」

「なると会えるように急いでくれてるんですよね？」

「まあな」

鳴海と望月がシェアルームしてるマンションはここから直線距離約6分ほど。出勤時間までは結構時間がある。もしかしたら鳴海は会社に行く途中の道にいろだろうし、あるいはまだマンションを出ていない可能性もある。

「どうしてここまでしてくれるんですか？」

また同じ質問を投げかけられる。

なぜ助けるのか。どうしてするのか。

そんなのに理由はいらないのだろう。だが、俺はいつも理由付けをしてから行動してる。悪いが俺はヒーローじゃない。誰かの笑顔のためだとか、仲間の幸せのためにとかそんな正義の味方やレラジェのような崇高な考えはない。

俺にあるのは、ただ俺の目の前で知っている人間が、俺の存在を認識している人間が傷つく姿を見たくない。ただそれだけだ。

「別に、俺がそうしたいからそうするだけだ」

口に出るのはここまでだ。

理由なんて言ったところで嘘くさいだけだし、信用してくれるかわからない。それなら端的に伝わりやすい言葉を選ぶ。

「そうですか…」

おかげで伝わったらしい。心做しか俺の腰回された手の力が強くなった気がするが自転車を漕ぐことに夢中でそんなことは途端に頭から消え失せた。

平坦な道ばかりで登り坂がなくて助かった。下手すると望月にみつももないところを見せることになっていった。さてさてここで問題です。日本には登り坂と下り坂、どちらが多いでしょうか。正解は…と言う前に目指していたマンションから青みがかつた髪の少女が出てくるのが見えた。

「あつ」

その望月の声が風に乗って前方まで届いたのか、俺から10メートル先にいる鳴海はこちらを振り向く。

「…ももー！」

「なるー！」

俺が自転車を止めると望月は飛び降りて走ってくる鳴海の方へと向かっていく。そして、抱き合ってハッピーエンド。それはあくまで理想だったが、概ねそれ通りになっていた。

「もう心配したんだから！バカ！」

「ごめん、ごめん…。」

しばらくお互いの目を見合ってから色々と込み上げてくるものがあつたのだろう。

ほぼ同時に涙を流した2人は抱き合って泣きじやくっていた。出勤までまだまだ時間はある。ここは2人だけにしておこうと俺は通り過ぎるようにそのペダルを漕ぎ出した。

「ストップです」

漕ぎ出せれば良かったのだがブレーキを掴まれキキーツと耳障りな音を立てて自転車が止められる。ビクビクしながら無機質な微笑みを浮かべる鳴海の方を振り返ると頭を下げられる。

「すみません、やっぱり私、先輩のこと好きじゃないみたいです」

「…へ？」

それは俺が出したのか、あるいはその場に居合わせた望月の声だったのか。

どうして俺が振られたみたいになつてゐるのかと傷ついていると鳴海は舌を出しててへつと笑う。

「もも、鍵渡すから用意してきなよ。ここで待つてるから」

「…あ、うん」

鳴海の一言で鍵を受け取った望月は時間のこともあつてか急いでマンションの中へと入っていく。その姿が見えなくなると鳴海はふうと息を吐くとこちらを見ずに呟くように話し始めた。

「先輩に言われて、ももと喧嘩してゆっくり考えてみたら…その…」

途中で切ると鳴海はさつき流した涙を拭う。

「私、恋愛はまだいいかなって」

それにと鳴海は言葉を続ける。

「比企谷先輩めんどくさそうだし」

ははは、そりゃ確かにな。よく言われる。

「だけど、一番の理由は…」

「お待たせー！」

そう鳴海が言いかけたところで着替えてカバンを持った望月が出てくる。それに鳴海は駆け寄ると髪を直したり、裏返った襟などを正したりする。その際に望月から「さっきの話ってなんのこと？」とキョトンとした顔で聞かれてるあたり、望月は鳴海の言う通りよくわかってないらしい。あの二人がどういうことで喧嘩をしたのか知らないが、あれを見る限りただのすれ違いで鳴海が折れて望月が気付いていないだけのようなのだ。

「あ、そろそろ会社行かないと」

「うん」

歩き出した2人の後ろから自転車を押しながらいいていく。時折、笑ったり俺に話しかけたりして会社を目指して進んでいく。2人が会話を弾ませてる間に鳴海の言おうとしたことを考える。

一番の理由か。

わからないままでもいいし、わかっ飛ばしまえばどうでもいいことなのかもしれない。誰かにとっての一番は自分にとっては必要ないものだってことはよくあることだ。

だから、俺は知らなくていい。別に知らない物語があつたところで得するか損するかはその時にならなきゃ分からないし、だったら知らぬままでいい。

知った時に未来の俺がなんとかすると信じて。

それでも比企谷八幡は泊まらない。

後輩達のトラブルを無事に収めて、いつも通り仕事に向かう。気にすることも考えることもなくなった俺は通常の三倍のスピードで仕事をこなしていく。

PCのスペックの差などここにはないのでどれだけ上手く手際よく処理できるかが評価の基準になるためこの会社は素晴らしいと思う。が、俺が多少本気を出しても給料は増えないし、なんなら仕事は増えるのでやっぱり社会っておかしいと思います！

「にしても、マジで終わんねえな…」

チロリと机に積まれた仕様書の修正画稿を見ながら呟く。これ全部俺が手を抜いた皺寄せなんだと思うと、あああの時ちゃんとしてればなあと後悔してしまった。

しかし、後悔先に立たず。

いくら過去を悔やんでも、またどう嘆いて反省しようとも過去は変えられないのだ。とどのつまり、俺はこの状況を打開しつつ未来の俺に伝えねばならない。減らせる作

業は減らしておこうね!と。

まあ、結局修正作業はあるから別に最初から手抜かずにやっても結果は変わらないと思うのだが。量は多少は減るだろう。けど、モチベーションの問題がなあ。

「はい、これ追加ね」

項垂れつつも手を動かしていると数十センチ積まれていた紙束にさらに紙束が足される。目線だけ動かすと本気モードなのか髪を束ねてポニーテールにしてる八神さんがニヤリと笑う。

「昨日何があったか知らないけど、今日はちゃんとやってよね」

言うとう手をヒラヒラ振って奥の自分の席に戻っていく八神さんを尻目にペラペラと紙をめくる。わーなんか俺のじゃないやつまで増えてるよこれ。

俺は今回はキャラクターの別バリエーションとか色塗り修正がメインだが、おかしいな。仕様通りやったのに赤ペンが入ってる。見れば影を濃くとか色の変更とかかなり細かいものもあれば、ブラシ変えてみてみたいなざっくりした指示が書かれている。字

的に葉月さんだろうか。

うん、これ昨日の俺のせいじゃねえな。気分屋の上層部が悪いわ。変更するなら自分でして欲しいものだ全く。短いため息を吐くと後ろからひよいと顔を覗き込まれる。

「あの、比企谷さん大丈夫ですか？」

じつと何を考えてるのかよく分からない目をして望月はそう問いかけてくる。
何が？と目線だけで返すと望月は俺の目を指さす。

「いや、目がすごいことに・・・」

「それデフォルトだと思うよ」

そう言った望月に涼風が横から手を止めずに笑いながら言い放つ。いつもならここで反論して論破してやるとこだが生憎正論なのでぐうの音も出ない。なんで俺が論じる前に論破されちゃってんだよ。それは違うよとねつとり言っただけがそれも言

えず乾いた笑みをこぼす。

「まあな、だけどほら、死んだ魚みたいな目って言われるんだが、魚ってDHAが豊富だろ？だからそれって俺の目が賢いことと相違ないと思うんだよ」

つまり、俺は賢いぼつちのハチーチカということである。違うか？違うな。

一人で孤独に否定まで持つてくとふと、視線が集まっているのを感じる。振り向くと全員が俺を心配そうな目で見つめていた。

「な、なんだかごめんなさい」

謝んなよ…悲しくなるだろうが。

短く咳払いすると俺は椅子を引いて楽な姿勢を取る。

「まあ涼風の言う通りこの目はデフォルトだ。だからあんまり気にするな」

「そうですか…。あ、それとその紙何枚か貰っていいですか？」

望月がそう言い俺は首を傾げた。

「なんでだよ」

確かに俺の仕事量は多いが自業自得で俺自身が招いたことだ。ならば、俺が片付けるのが自明の理。周りもそういう意見なのか望月を止めに入る。

「ももちゃん、それは八幡の仕事やから」

「それに甘やかすの良くないと思うよ？」

なにその後輩に甘やかされる先輩とか無能じゃない？無能どころかただのろくでなしじゃねえか。それはやだと訝しげな目を送ると望月はキョトンとした顔になる。

「いえ、私が頼まれた分はもう終わったので」

「は？」

望月のデスクの方に目を向けるとそこには積まれた紙などなく、俺のデスク上と比べると殺風景極まりない。

「なので仕事ください」

「それなら八神さんに」

「言ったら比企谷さんから奪ってこいって」

言われて、聞こえていたのか八神さんはVサインを掲げる。それならいかと周囲は納得して目の前の仕事に戻る。俺はというと「そういうことなら…」と俺がやったやつではない変更届を数枚渡してやる。

「助かる。じゃよろしくな」

「いえ、こちらこそです」

ペこりと頭を下げて自分の席に戻るなりペンタブを走らせる望月を見て、俺もすつと気持ち切り替える。カチカチとマウスを鳴らし、カタカタとキーボードを打ち込み、コツコツサーツ！とペンタブがタブレットの上を駆けていく。人の声が聞こえず、それらの無機質なものの音しか聞こえないこの空間はまさに仕事場という名の戦場。そう思えてしまった。

###

お疲れ様です！無事残業確定です！

そんなメッセージが脳内に響いて帰り支度を始めてる周りを見ないようにながら画面と向き合っていた。

背中に届く「お疲れ様ー」の声を適当に返しながらペンを握る。あとどれくらい残ってるのかなーって確認しつつ、もうこれは明日でいいんじゃないかなと選別していく。その過程で『今日中に！』と書かれたメモを見つけて額がキーボードと密着する。

これはお泊まりも確定ですね。それなら息抜きついでに夜食買いに行くかと席から立ち上がると背後から「わつ」と驚く声が聞こえた。

「何やってんだ望月…。」

昨日も言ったであろうその言葉は振り返った先で目を丸くして望月は立っていた。

「帰ったんじゃないのか？」

「あ、いえ、その…。」

モジモジと要領を得ない発言に疲れている俺は「いや別にいい」と手を振ると財布がポケットに入っていることを確かめて歩き出す。

「えっと、どこに？」

「今日中って言われたけど泊まらなきゃ終わらないから夜食買いに行く」

俺は涼風みたいに会社に寝泊まりしないと思ってたんだけどなあ。てか、昨年泊まっていますね。その時に泊まるんじゃないやねえぞ……って今の俺に向けて言った気がする。多分言っていない。

「そういうことだからお前も遅くならないうちに帰れよ」

望月にそう告げると、望月は首を振った。それやめてくれない？首と一緒に下も揺れているから。ついでに俺の心も揺れそう。我ながら中学生みたいだな。

「なにどしたの」

「いえ、昨日のお礼をしたくて……その、仕事手伝いますから、それ終わったらご飯行きませんか？」

望月の申し出に俺は間の抜けた声を上げた。マジで？お礼の規模でかくなってない？その疑問に答えるかのように望月は口を開いた。

「二宿一飯の恩義は手厚く返せと父となるに言われたので」

ああそう…。親父さんとお前の友達すげえな。

しかし、これは俺の仕事であつて望月がするべきことではない。だからここは断つてまた別の機会にとするのが建設的だ。それが人としてあるべき行為のはずだと言いかせる。ちよつと楽したいと考えたが後輩にやらせるのは気が引ける。

「悪いが望月それは」

「ダメです。拒否権はありません」

拒否権の前に発言権も消失したんですけど。

「それに寝泊まりして仕上げたとしても明日の仕事に支障が出ると思います」

まあそれは確かに一理ある。でも八神さんもそこまで鬼じゃないし…。と八神さん

のデスクを振り返ると無造作にごちゃごちゃした机に整えられた紙束が見える。その上には八幡用と書かれていて、もしあれを明日することになるのなら、今日の量より少ないがこれの後にやると確実に脳死する量だった。

ひえつと心の底から恐怖すると望月が親指を立てた。

「今日の私ならすぐに終わらせられます。あとは比企谷さんが本気を出すだけです」

なんとも頼もしいことだろうか。誰かに頼むことはあまり好きじゃない。1度助けてもらうと次もそれを求めてしまう気がする。自分の弱さを知ってしまうからだ。それを甘やかされると言うのは分かっている。しかし、ここで引いても望月は俺に逃げの一手を放てないように言葉を弄するのだろう。ならば、さっさと折れて終わらせてしまうほうがいいのか。

「……分かった。けど、晩飯は早めに終わったらな」

「はー！」

何故か嬉しそうに笑うと望月は俺からプリントを受け取って自分のデスクのパソコンを付けて腕まくりをする。どうやら本気で片付けるつもりらしい。

仕事を手伝って貰うのだけOKして食事は断るべきだったかと少し考える。

フラグが立つのは避けたい。下手したらこういう場でセクハラ問題に発展し、路頭に迷うかもしれない。しかし、同じ職場で働く以上こういう機会はあるものだ前々から予見はしていた。それに俺の場合は結婚とかないからずっとここにいるだろうし、後に増えるであろう後輩とも接点が増える可能性がある。

男性としての好感度は抑えつつ、先輩としての信頼を保持したいというずる賢いエゴイスト。まあ可愛い女の子とご飯なんて最近はあまりなかったのだからたまにはいいだろうと言い聞かせて集中力を発揮する。

けれども、望月紅葉は。

「終わった…」

八神さんから出されていた鬼畜のような量の修正や追加差分を描き終えて大きく息をついて椅子のもたれに全体重を預けて天井を仰ぐ。時計を見れば9時半と想定していたよりも早く終わった。その理由は俺が本気を出したから、という訳ではなく無表情で俺が帰り支度をするのを待っている望月のおかげだろう。

今日の私なら出来るという言葉通り、早く丁寧に仕事を片付けた望月は俺よりも先に片付けを終えて俺の横に立っている。

「お疲れ様です」

「おう。そつちもあんがとな」

こちらから声をかけようと思っていたが、先に口を開いたのは望月で、そっちの方が量多かつたのにすぎえなど穏やかな笑みが零れる。それを聞いた望月は首を振った。

「それは比企谷さんが私に軽い仕事ばかりくれたからですよね」

「いや、まあ……」

確かに恣意的に望月に比較的作業量が少ないのを渡したが、それは手伝ってもらう身が楽するのは気が引けたからなのだ。ほらやっぱり俺も楽しみたいけど後輩に手伝って貰ってる上に作業量が多いのを渡すのもね？

望月の純粋な瞳に言葉が詰まった俺は手早く帰り支度を済ませて椅子から立ち上がる。パソコンの電源が消えてるか確認、さらに消灯してフロアから出る。

「晩御飯、何にしましょうか」

エレベーターを待っていると望月が首を傾げて聞いてくる。

「待つて貰ったの俺だし、望月が食べたいのでいいぞ」

正直言つて今食べたいものもない。さつさと風呂入つて寝たいのが本音だが、手伝つて貰つたのだしこれくらい付き合うのは当然だろう。エレベーターに入つて「うーん」と唸つて考えている間に一階につき、会社のビルから少し離れて望月に「決まったか？」と尋ねてみる。

「…………お肉…………ですかね」

望月の返事よりも先にお腹の音が聞こえて、恥ずかしそうに指を突き合わせながら呟くように言う。その姿が少し可愛らしく見えて目をそらす。そんなにお腹すいたなら食つてから来たらよかつたのにと思ひながらスマホを操作してこの辺りで美味しい店はないかと検索をかけてみる。

しかし時間帯的に閉まっていたり、ラストオーダーに入ったりしてるところがほとんどであり、他にあるのは家族向けのファミリーレストランとかくらいである。

どうしたものかと思案すると、1つだけ思いついたのがあった。

「肉メインじゃなくてもいいか？」

「えっ?」

そうこの世の中には肉メインじゃなくても肉が食べれる美味しい料理があるのだ。

みんな大好きな焼肉か。野菜も魚も食べれる鍋か。あるいは豪快に食べれるステーキか。違うね。あれは食べ方であって料理ではない。

「あれは……」

俺に案内されてやって来た場所に驚いたように口を開いた望月は、俺を見ると「好きなんですか?」とドアの前に設置されている券売機を操作する俺に問いかけてくる。

俺はそれに答えず無言で引き換え券を購入すると、望月に場所を譲る。

「あの、これは」

「ん？ ラーメン屋に来るの初めてか？」

肉が食べたいと言った望月に俺がチョイスしたのはラーメンである。そうラーメン。

日本人のソウルフードといっても過言ではない。人々はラーメンを中国からやってきたものだと思われているが、実はラーメンというのは「小麦粉にかん水を加えてこねた後に製麺したもの」で麺にかん水を加えて食べ始めたのは日本だと言われている。

これ以上ラーメンの話をするに「またラーメンの話して……」とジト目で睨まれてしまうので、今回はあまり語らないが動物の骨や調味料で作った熱々の出汁に絡んだ麺と、それを彩る肉や野菜などのトッピングが特徴のラーメンはまさに誰にでも国民的スーパースターのような存在なのだ。

そんなのが解散するとか活動休止とかってなったらショックングだよな。

「えつと…どれが美味しいんですか？」

「全部」

「え」

まあこの店のラーメンを全て食べた訳では無いが、ラーメンは総じて全て美味しいのだから全部美味しいだろう。ただし人によって好き嫌いというのはあるだろう。例えばトマトラーメンとか、ラーメンが好きなの俺でもアレには未だに手をつけられていない。

「肉が食べたいならチャーシュー麺にしたらいんじゃないのか」

ラーメンには基本的にチャーシュー、メンマ、ネギ、海苔、煮卵がトッピングされているがその中でも人気なのがチャーシューである。

これは麺や出汁と同じく作り手によって味や食感が異なる。だが、これも総じて美味

い。

そして、この美味しいチャーシューを麺や他のトッピングが見えなくなるくらいに盛り付けたのがチャーシュー麺である。並ラーメンなどに比べると値段は高まるが、それでも食う価値は十分あるラーメンと言える。

「じゃ…」

ピッとボタンを押して券が出てきてそれを手に持ち2人で店の中へと入る。店主らしき男に券を渡してカウンター席へと座る。

出された水をクイツと一口で飲み干すとふうと息を吐き、望月の方を見た。着ていた上着をハンガーにかけて椅子に座った望月は物珍しそうに店内を見ている。

「……やっぱり初めてだったのか？」

「あ、いえ、地元ではよく食べてたんですけど、こっち来てからは初めてです」

「北海道には券売機なかったのか」

「私のところではなかったですね」

それに外で食べることより父親に作ってもらうことの方が多かつたらしい。しかも、インスタントではなく自前のもらしい。家でラーメンを作ってもらえるのにも驚きだが、父親が出来るつてのもすげえな。

田舎には普通にでかい鍋もあるらしいが、望月の父親のように出汁から仕込む人は珍しいようだ。

「なんだラーメン屋でもやってたのか」

「やろうとしたみたいですけど田舎だと人が集まらないからってやめたらしいです」

それに近くには鳴海の旅館がある。確かにあそこの飯は美味いから客の取り合いになりそうだしな。

「へいおまちどー」

そこからしばらくたわいのない会話を続けていたが、前から出てきた熱々のラーメンに視線を奪われ、さらに夕飯時からかなり時間が経っていたため空腹の限界値に達していた腹がラーメンを視認した瞬間、満たせ満たせと本能を刺激する。

箸を手に取り、食事の挨拶をした後、俺達は無言で飯を食った。

###

「美味しかったです…」

「そりゃよかった」

満足そうな笑みを浮かべて店から出た望月は俺にお辞儀してくる。そんな畏まらんでも、礼を言うならラーメンを作ってくれた店主だろう。

「それに奢ってもらって…」

「先輩風吹かせたかったからだから気にしなくていいぞ」

会計の時に「私が払います」と譲ろうとしなかった望月だが、どうにか説得することで俺が払うことに成功した。だが今になってまたお礼がしたいからとどこに連れていかれるのではないかと懸念しているが、さすがにそろそろいいだろう。それを伝えるべく俺は望月の顔を捉えた。

「もういいからな」

「え…?」

何がという顔をする望月を見下ろすように俺は言葉を繋ぐ。

「お礼はもういい。もう十分だ。ありがとな」

そもそも俺に望月を助けた自覚はないし、お礼がして欲しくて家に泊めたわけでもない。会社の後輩だから、知っている人間だから、そうするのが当たり前だと俺は思っていたからそうしただけなのだ。

「だから、もう気にしなくていいぞ」

それに、こいつは俺を憧れの存在と同一視しているようにも思う。八神さんに向ける憧憬とは違う視線を俺は薄々ではあるが感じていた。そして、望月と話していてその視線が俺とそっくりなレラジエに向ける愛好だと知った。俺ではなく俺の作ったキャラに向けられた感情は決して画面の向こうにいる存在に届かない。だが、そのキャラにそっくりな俺になら向けられる。届けられる。

しかし、それは本物ではない。妥協して目を背けて得ようとしてる虚構だ。

「………違います」

下を向いて震えた声で望月は否定した。

俺の言葉を否定したのか、それとも言葉の中に含まれた俺の思考に留めたことを否定したのか。

「何が違うんだ」

「…全部です」

「全部？」

「比企谷先輩が言ってることも、考えてることも全部違います!!」

まさか全て否定されると思ってなかった。え、もしかして望月って超能力者か何かなの。いや、そんなはずはない。この世には奇跡も魔法もないのだ。けど、超能力はあるのかもしれないが、あつたとしてもトリックだとかインチキに決まってる。あの天才物理学者が科学的に論証できないことはないと言ったのだ。つまり望月の発言も科学的な論証は可能はず。

「たとえば？」

「…比企谷先輩が優しくないとか助けてくれないだとか、自分をぼつちだと思ってることとか、私と先輩が同じ歳のこととか…：そういうところです」

まあ最初の2つは勘違いとして処理しよう。だが最後は、知らなかった。強く信念のような、真つ直ぐに俺を見つめる望月から目を逸らして俺は尋ねた。

「いつ、気付いたんだ？」

「青葉さんに聞きました」

またアイツか。脳裏に浮かぶ青紫髪のスインテールを揺らす同期が手を合わせて「ご

めんね」と謝る姿が出る。頭の中で謝っても許さねえからな？

「確かに俺とお前は同い歳だ。でも、それ以外は違う」

俺は永遠にぼっちだし、人助けをした覚えもない。昔にそういう部活に入っていたから人を助けたという感覚は薄れてたのかもしれないが。優しいというのまたまたまそう映っただけだ。俺が優しいのは俺と小町に対してだけだ。どうして赤の他人に情けをかけなきやいけないんだ。

「でも、比企谷先輩はなるも私も助けてくれました」

それはお前らの勘違いだ。何度も言わせるなど突き放すように言う前に、望月の手が俺の下ろされている右手を握った。

「それに比企谷先輩は1人じゃないです」

掴まれて仄かな温もりに震えがある。それに気付いて俺は望月の顔を再度見た。

「八幡さんにはイーグルジャンプのみんながいます」

ああ、そうだ。俺は一人じゃない。

会社に行けば隣の席には涼風がいた。仕事をもらいに奥に行けば八神さんがいて、遠山さんがお茶を出してくれた。戻ってきたら、はじめさんが昨日のアニメを見たかと会話を振ってきて、ゆんさんがそれを「仕事中やで」と窘めながら笑って聞いていた。昼飯時には望月と無言ではあったが時間を共にしたり、奥からひふみ先輩がペットの写真を見せて来た。

帰り際にプログラマーブースを通ればうみこさんが「お疲れ様です」と言ってくれて、桜が元気に手を振って、鳴海も小ぶりながらもこちらに手を振っていた。

たまに給湯室で葉月さんと飼い猫と共に戯れることもあった。

そうだ。もし本当に一人だったら誰も俺には声をかけないし、喋りもしない。必要最低限の会話で終わって、挨拶も交わすか怪しい。

期待して裏切られるからと、他人に期待することを諦めて、この会社でも俺は一人に

なるのだろうかと思うっていた。

高校の時のように周りが温かく気を遣わなくていいというのは、きつと稀だからと諦めていた。でも、また新しく始まったそこはとても温かくて居心地が良くて、仕事が嫌でも少しくらいなら行ってもいい、それくらいには思っていた。

「…そんなの一過性のものだろ」

俺以外みんな女性なのだから、恐らくはいつの日か家庭をもってイーグルジャンプから去っていく者はいらるだろう。八神さんやうみこさんのように優秀な人間ならヘッドハンティングだってありうる。そうだ、きつといつかは消えてしまう場所なのだ。

こみ上げてくるナニカに、我を失って人前で羞恥を晒すまいと俺は自分にたればの話を書いて必死に堪えた。

「…そうですか」

ようやく俺の説得を諦めたのか、あるいは俺に失望したのか、望月は手を離した。温

もりの無くなったことを感じて俺は最後の言葉を告げて立ち去ろうとした。過去の経験から何を言えば嫌われるのかを分かっている俺は、躊躇いながらもその言葉を口にした。ようとした。

「口、閉じてください」

「は？」

あまりに唐突に言われたことに言葉と反して口を開けてしまった俺の服の襟を望月は思いっきり掴んだ。急な上に強く込められた力のせいで抵抗できなかった俺は望月に無理矢理引き寄せられる。

その刹那、そういえばこいつ腕立て伏せしてるから筋力があることを思い出して抵抗しても勝てない気がした。

どうせ、殴られて「あなたは最低です！」とか言われてこの場に置き去りにされるの
だろう。…それでいい。俺が口に出さなくても望月は俺を嫌いになった。これが一番
ベストなはずなのだ。

襟元を掴んだまま望月の眼前まで引き寄せられた俺は無抵抗に、望月から下される裁
定を待った。ギラギラと光る瞳に、怒りで上気した赤い頬が恐ろしく見えるが少しの我
慢だ。今、目を逸らしたら確実に裁定パンチの威力が上がる。

「…よし」

意を決した望月の襟元を掴む力が強くなる。ついに来るのかと瞳を閉じようとした
時、俺の元へと訪れたのは痛みではなかった。

来るはずだと思った痛みとは違って優しく包み込んでくれるような温かみが俺の唇

と重なった。

それは紛れもなく、望月の唇であり、慌てて引き離そうにも望月がさらにパワフルに力を込めてその接吻は深くなる。そこでまた俺の力は抜けてギューっと力がまた強くなる。このままでは快樂と息苦しさに包まれて逝ってしまいそうだと思っていると、襟元から手が離れた。そして重なり合っていた唇も離れて、お互いの息遣いが真正面からかかり合う。

「1人が怖いなら、私がずっと一緒にいます」

離れた手は下ろされるどころか俺の頬に添えられると、今度は優しく引き寄せられて2度目のキスを奪われる。

突拍子もなく、言い返す間も与えられなかった俺は、今はその優しさに触れていたいような気がした。

ルート9 遠山りん

プロローグ（遠山りんの場合）

好きな人が今の職場を辞めると知ったのはつい昨日のことだ。偶然、その話を聞いてしまった。

本人から直接でなく、立ち聞きしてしまった。私は彼女が仕事を辞めることよりも、それを一番最初に私に伝えてくれなかったことにショックを受けた。

だって、好きだから。ずっと一緒にいたのに。温泉に行ったり、ご飯を食べたり、2人で寝たこともあった。それなのに私にはまだその事を言っていない。それがただただショックだった。

ホントなら、笑顔で送り出してあげたい。きっと彼女の事だ、ただの気まぐれなのかもしれないし、すぐに戻って来るかもしれない。

それでも思わなきややってられない気がした。

それに、そのことばかり考えて仕事の質を落とすわけにもいかないから、自分の感情を押し殺して1日を過ごしていたら。

「遠山さん、なんかありました?」

同じ職場の中でも観察眼に特化した子に見抜かれてしまった。

「そんなことないけど、顔色でも悪かったかしら」

そうやって取り繕った笑顔を浮かべる。すぐさまこの場を立ち去ろうと足を動かした。でも、次の一言で止められる。

「じゃあ、なんで泣いてるんですか?」

言われて目尻を指先でなぞる。すると、一粒の雫が出ていることに気づいた。やっぱ

り、好きな人への感情なんてそう簡単に抑えられるものじゃないらしい。

「……ちよつと、屋上行こつか」

目尻を拭つて私は歩き出した。

その子も無言で付いてきて2人で屋上への階段を上がっていく。扉を開けると外はもう夕日が沈んでおり、月が夜空を照らしていた。

「わたしね、変なんだ」

扉を閉めて柵の方まで歩き出すと、たくさんの人が行き交う夜の街を見下ろしながら自嘲的に笑つてみせる。

「女の子なのに女の子が好きなの」

目の前で顔色変えず、わたしを見つめてくる彼に。

「いつからだったかな。分からないけど、いつの間にか好きになってたの」

知り合って1年くらいになる異性に、何年も思い出を紡いだ彼女への気持ちを綴る。

「ガサツだけど好きなことにはとことん真っ直ぐで、普段はかつこいいのに、時々可愛くて」

彼女との記憶を思い出すたびに心の中から何かが騒ぎ立てる。しかし、その彼女がいつもの場所からいなくなると知った。それから自分の中で何かが壊れる音がした。

「そんな八神コウが大好き」

それでも、私の口は止まらない。止められない。自制がきかないほどに、心が参っているのかもしれない。

涙を流し女の子の劣情を目の前で見せられる彼は今、どんな気持ちなのだろう。

「そして、君のことも好き」

これは呪いだ。告白なんかじゃない。

コウちゃんは少なからず、彼に何かしらの好意を持っている。それが後輩への好意なのか、異性に向ける好意なのかは私には分からない。でも、もし後者なら。

「比企谷八幡君」

彼の名を呼んで、彼の胸元に身を寄せると私はこう囁いた。

「あなたは私を愛してくれますか？」

彼女の彼への思いを終わらせなくてはならない。

私は最低の人間だ。

どうしてか遠山りんには躊躇いが無い。

「あなたは私を愛してくれますか？」

突然、胸元に飛び込んできた遠山さんから囁かれたその言葉は、他人からなら素敵な愛の告白のように聞こえるだろう。こんな美人さんに告白されるなんて羨ましい、そう思われてもおかしくないだろう。

しかし、俺にはこれが到底愛の告白には聞こえなかった。決して消えない永遠に続きそうな呪いだ。俺はそんなふうに感じた。

いつものように仕事をこなす遠山さんに違和感があると思つたのは午後になつてからだ。確かに見た通り、ちゃんとしてるし笑顔を絶やさず周りに気遣いをしながらテキパキとした仕事をしてた。が、俺にはその笑顔がとても無理をしているように見えた。

そこで何かあったのかと軽率に声をかけたことに正直後悔した。まさか、こんなこと

になるとは。

「すみませんが俺には遠山さんを愛する理由がありません」

「そう。でも、私にはあるの」

俺の胸に身を預けたまま動こうとしない遠山さんを引き剥がそうか少し悩んだが、力づくで引き剥がしても意味は無いだろう。

「こんな茶番早く終わらせてほしいんですが」

「茶番じゃないわ」

「じゃ、遠山さんが俺を好きになった理由ってなんですか」

聞いても遠山さんは答えない。それを理由に俺はここを立ち去ろうと遠山さんから離れようとする。が、逃がしはしないと白く細い腕が背中に回る。

「そういう自分の魅力に気付かない謙虚な所、かしら」

「へえ、なるほど。俺の魅力に俺が気付いていない。ということですか」

「そうよ」

そんなわけあるか。俺のいい所なんて争いを好まず、人を慈しみ家族（妹）を大切にしていることくらいで、誰かに愛されるような良さは何一つ持っていない。しかし、遠山さんはそんなことないよと虚の笑顔を浮かべて顔を上げる。すると、この状況のせいなのか艶めかく見える右手で俺の髪に触れる。

「この癖毛のある素朴な髪も」

次に目元。

「このみんなを優しく見守る目も」

次に耳を。

「こうして私の言葉をちゃんと聞いてくれる可愛げのある耳も」

そして心臓を。

「平然を装って高鳴ってるこの胸も……私は好きよ」

そりゃ誰でも、こんな美人に身体を密着されて手を回されたらドキドキするだろう。が、それより今の俺は恐怖心の方が勝っているんだと思う。得体の知れない遠山さんの底知れない何かを、俺は恐れているのだろう。

確認のため、俺はあえてあの人の名前を出すことにした。少しでも動揺して本心をさらけ出してくれればという、俺の醜い悪あがきだ。

「八神さんのことはいいんですか」

「……よくないわ」

「だったら」

「仕方ないじゃない。あなたのことの方が欲しくなったんだから」

まるで本心のように紡がれる嘘に俺は自然と声を強ばらせていた。

「だったら証明できますか。この場で」

「……何を、とは無粋かしら」

本当に俺が好きだというのなら。それなりのが出来るはずだ。だが、遠山りんにはできない。それをするということは本当に八神さんを諦めるということだ。何年もの間培ってきた思いを捨てることなどできないはずなのだ。

はずだったのだ。

信じられないことに、俺の乾いた唇に温かさが重なった。

体に回されていた手が頬に当てられ、それに驚いている間に遠山さんは一瞬で俺との距離をゼロにした。

付き合ってもいない。本当に好きかもわからない相手と交わしたキスは衝撃的だった。柔らかくて温かい、少し濡れている。生きている鼓動を感じる。本来なら愛おしく感じるであろうそれらより、畏怖の念がより募ってくる。

平然と、当たり前のようにそれを実行した彼女に俺は確信した。

この気持ちは嘘でも、何かしらの覚悟だけは本物だと。その覚悟は八神コウにまつわることだと。そして、遠山さんと八神さんに俺は良くも悪くも目をつけられてしまった故にこうなっていると。

どうにかしようにも、どうしようもない。そんなやるせない気持ちで災いして、遠山さんからのキスを俺は無力を受け止めていた。

どれくらいされていたのか。やっと離れた口からは吐息がはあつと漏れた。

「これで分かってもらえたかしら」

何事も無かったかのように、口元をハンカチで拭うと、屋上のドアの方に歩いていく。

「今日はこの辺にしておきましょう」

ガチャとドアを開けると振り向かず彼女は言った。

「コレであなたは逃げられないわよ。八幡」

ボタンと閉まった扉の音はその声をかき消してはくれなかった。本心は分からなかった。だが、好きでなくてもあんなことが出来る人物がこの世に少なからず存在して

るのは知っていた。だから、驚きはしない。ただ、怖くなった。好きでもない相手に、あんなことが出来る彼女に。

笑顔で元気でしつかりしていて、一途だと思っていた。しかし、今日ここで俺の知っている遠山りんのイメージは瓦解した。

先程まで濡れていた唇は既に乾ききっていて、そこに彼女の温かさはもうない。ただ立ちすくんだ俺のみが屋上でそれが嘘であつてほしいと、

ひたすらに望んでいた。

ルート10 桜ねね

プロローグ（桜 ねねの場合）

人には持つて生まれた運命がある。そんな話をママにされた。

運命って聞いて、出てきたのはベートーヴェンとガイアメモリくらい。本当の意味は知ってるけど、あんまり使わない。

話を要約すると、ママがパパと結婚するのも運命。私を産んだのも運命。私が青っちと出会ったのも運命。これから、誰か素敵な人を見つけて結婚するのも運命らしい。

けど、小学校、中学校の時は青っちとぼっかり遊んでたから周りの男の子とかと話した記憶ないし、高校の時はほたるんと先生と美術部で遊んでたし。大学も授業終わったらプログラミングの勉強してるし、休講の日もイーグルジャンプで働いてるからほとんど遊んでないし…。

「あれ？もしかして、私働きすぎ？」

「何言つてたんだこのアマぶつ飛ばすぞ」

「ええ〜ハッチー口悪い！」

「そりや悪くもなるわ。なんで休み時間にお前の愚痴に付き合わされなきゃいけないんだ」

そんな嫌な顔しながら言わなくても言いじゃん。頬を膨らませてもハッチーは見向きもしないで手元のスマホに目を落とす。

「だって、ハッチー昼休みいつも1人じゃん。寂しいかなと思って」

「寂しくねえよ。こういうのは慣れっこなんだよ。だから、温情で一緒に居るならやめてくれ」

「え？温情じゃないよ。今日青つちもうみごさんもいないから一緒に食べる人いなく

て」

「違うのかよ。一瞬でも優しいなお前って思った俺を返せ」

「ふふーっ！ハッチーって意外に単じゅ……あー！返して私の卵焼き！」

「俺の純情を踏みにじった罰だ」

そう言っつてハッチーは私のお弁当から卵焼きを取るとそのまま口に放り込む。

「甘いな。だが、美味しい」

「ほんとっ!？」

「なんで喜んでんだよ、ドMかよ」

いやだつてそれ私が作ったやつだし。えへへくと頬を緩ませていると、すごく気持ち

悪いものを見るような目を向けられたけど、今は特に気にならなかった。というか、もう慣れちゃった。

「あ、そうだ。ハッチーって運命とか信じるの？」

「唐突だな。いや、さっきの話の下りからならそうでもないか」

一人で勝手に納得すると、ハッチーは携帯の電源を切って机の上に置くと、MAX コーヒーを一口飲む。

「俺は運命とか宿命とか信じないし、奇跡も魔法も信じない。信じるのは自分と小町だけ。これが俺のジャステイス」

運命とかとは聞いたけど、まさか宿命や奇跡、ついでに魔法まで出てくるとは思わなかった。てか、小町ちゃんのことほんと好きなんだな。私も妹とか欲しかったな…なんて思っていると、ハッチーは満足そうな顔でMAXコーヒーをまた飲む。ちなみに今日2本目だったりするからそろそろ止めないとまずいかもしれない。

えいつ、と缶を取り上げると私は人差し指を立ててこう述べる。

「ハッチー飲みすぎだよ。1日1本だつて言われてるでしょ？こんなに糖分摂つてると生活習慣病になつちやうよ」

「お前は俺の母ちゃんか。……いいんだよ、俺は。それに生活習慣病つてのは仕事のし過ぎで帰つてすぐに寝るやつがなるんだよ。俺みたいに自転車通勤で休みの日もうみこさんにサバゲーに駆り出されたりしてると勝手に糖分が排出されるんだよ」

それがホントならまともに運動してない私も生活習慣病になるんだけど……。うーん、何かサークル入ろうかな……。でも、運動苦手だし……。どうしよ。

「……そういえば鳴海はどうしたんだよ。あいつは今日来てただろ」

「ももちゃんと食堂行ったよ。やっぱり同居人同士だし邪魔するのはあれかと思つて」

「その気遣い俺にも回して」

「やだ」

素でそのまま返すとハッチーは悲しそうな顔をする。そんなに今の言葉で傷ついたのかな？もつと気を遣った方がいいのかな？

そう思つて元氣の出ることを探してみる。

「あ、元氣出してハッチー！ほら、MAXコーヒー飲む？」

「取り上げといて返すのかよ。まあ、飲むけど…」

「その前に一口貰うね」

うん、甘い！ブラックコーヒーなんかと比べると全然甘い！ココアよりも甘いんじゃないかな。それはないかな？

「はい、ハッチー」

「……いや、やっぱいいいわ。健康のためにそれお前にやるよ」

「ほんと!?わーい!ありがとハッチー!」

「こいつドMじゃない……天然のドSだ……」

ごくごく楽しそうに飲む私に対して、苦虫を噛み潰したような顔で携帯を見つめるハッチー。

「あ、そういえばさ、この前合コンに誘われたんだけどさ」

「……お前大学に友達いたのか」

「いーまーすーう!」

こうしていると別に好きな人とかいなくていいと思っちゃう。青つちと出かけるの

は楽しいし、ほたるんと青つちを騙すのも面白いし、ハッチーに愚痴を聞いてもらった
り変な話するのもすつごく楽しい。

お仕事も楽しいし、こんな時間が長く続けばいいなっと思う。

桜ねねは頭のネジがぶっ飛んでいる。

とりあえず、桜ねねは変わってる。一言で言うとな変人だ。

頭は悪くないのだが、機転が利かない。

努力家ではあるが、妥協するところはして全力を尽くす。

熱中したことにはとことん心血を注ぐタイプ。

童顔で発想も子供じみているが育つとこはしっかり育っている。

はつきりいつて扱いやすいが掴みどころの難しい女の子だ。

これはただの知り合いとしての観点であり、女性的に見るならどうなるか。そう聞かれると、どうも答えようがない。まず、桜を女性として見ることはまず難しい。だって、桜だし。この一言で片付くくらい桜に女性的な魅力がない。……いや、ひとつ訂正しよう。あるにはあるが、それを発揮出来ない。

恐らく、賢く自分の長所を存分に活かすタイプなら布が少なく体のラインが出る衣服

を着て、口調や行動も男が好きになりそうなモノにしてジャグラーがお手玉するようなイメージで男を取つかえ引つ変えするスキルを身につけるのだろう。

ただ、桜はそうはしない。彼女にはそうする必要が無いからだろう。しかし、もし桜が女性的に魅力的になろうとするなら、4年5年は経たないと無理かもしれない。顔が本当に幼すぎて、たとえ言動を大人っぽくしてもやはりどうしても顔の印象が子供っぽさを強めてしまうからだ。

まあ、口調を改めなくてもそういうのが好きな男の人はいるし、大丈夫だと思うよ。うん。

だから、元気出せよと余計な部分は言わずに少し笑顔で言つてやると桜は鏡を開く。

「私つてそんなに子供っぽいのかな…」

「まだ言つてんのかよ」

大学の友達に誘われた合コンに行つて、他のみんなは二次会やらお持ち帰りされたのに自分だけ余つてしまったことにショックを覚える桜。その時の愚痴やらに付き合わ

されているのが比企谷八幡である。

状況としては4対4でお互いに上手く行けば余ることなく全員が楽しい一夜を過ごせるかもしれないかつたというのに、桜は自分が余ってしまったことに納得がいかないらしく、こうして同じく休日の俺を呼び出したというわけだ。しかも、スタバに。初めてきたわ。

「そもそも、なんで行ったんだよ合コンなんて」

「いやそのー、そういう経験もありかなーって」

「どういうことだよ」

ひとまず、話を聞いてやろうとすると早速わけがわからんぞと俺は顔をしかめる。桜は頬を膨らませると憂さ晴らしのように手に持つてるなんとかキャラメルフラペチーノを飲み干す。

「別に行きたかったわけじゃないんだよ？でも、友達がどうしてもって言うから。仕方なくだよ」

「あーはいはい。そういうことにしとく」

まあ、嘘だと思っけど。しかし、会社でも付き合いがあるように大学でも付き合いがあるのだろう。本当に大変な事だ。そういう柵の悪循環型のスパイラルから早く逃れてほしいものだ。

「てか、お前さつきから文句言ってるけど、二次会したかったの？」

「ううん、そんなことないんだけどさ。でも、なーんか嫌だったんだよね」

「なんかってなんだよ」

「私だけ避けられてるといふか、あんまり話されなかつたんだよ」

それは男のメンバーの中に桜が好みだと感じるやつがいなかっただけの話じゃないのか。そんなこと言うともた怒るから黙っておこう。

「まあ、当初の予定通り、合コンを経験できたんだし良かったじゃねえか」

「うーん、そうなんだけど……なんか引つかかるような」

「というか、よくよく考えてみたら桜が余ったってことは相手の男子も1人余ったって事だよな。つまり、桜と同じ気分のやつがもう1人いるわけか、そいつの友達めちゃうちゃ可哀想だな。」

「そういえばハッチーは合コンとかしないの？」

「しねえよ」

「そもそも誘ってくれる相手がないわ。もしいたとしても行きませんけどね。」

「彼女とか欲しくないの？」

「今は特に欲しくないな」

出来たら自分に使えるお金が減るし、時間も減る。ただでさえ、休日は桜に呼び出されてどうでもいいこと話されて聞いて1日が終わるのだ。それで彼女が出来てみる。金も時間も一気になくなるわ。

「あ、でも彼女が出来たらお前に呼び出されてもこれないな」

「え!?!」

ガタツと音を立てて椅子から立ち上がる桜に周りからの視線が集まる。すると、桜は慌ててペコペコ頭を下げて椅子に座る。

「どうした…」

「あ、いや……ハッチーに彼女出来るところやっつて愚痴聞いてもらえなくなるんだなーつて思ったらびびくりして……」

驚くほど衝撃的なことではないと思うが。異性と付き合っていて他の女の子と話したりしているのを見るのは付き合ってる側としては嫌なものだろう。俺も恋人が他の男と頻繁に会ってたり遊んでたりしたら好意も冷めてしまうだろう。

「……あ、そっか！そっか！」

「どうしたまた急に」

落ち着いたと思ったたらまた大声を出して周りから注目を集める。まあ、今の時間帯は比較的他の席の人も喋ってるからすぐに視線は外れたのだが。

「あんまりうるさくすると追い出されるぞ」

「わかったんだよハッチー！」

「何がだよ」

「ハッチーが他の女の子と付き合つて私と話せなくなるなら私と付き合えばいいんだよ」

……………??

「ハハハ…ちよつと何言つてるか分からない」

「なんで!?!」

「いや分からんだろ。わからなさ過ぎて思わず滅多にやらないモノマネしながら答え
ちまつたわ。」

「え、何お前は俺と話したいの?」

「うん！」

「Sirriとか電柱じゃダメなのか？」

「え、Sirriは聞き取れませんでしたっていうし、電柱は私1回も話しかけたことないんですけど……」

確かにSirriはよくそう言う。自分の滑舌が悪いのかと嫌になってからは使うのをやめた。電柱に関しては何を言っても反応しないが、逆に言うなら何を言っても怒らないのでサンドバッグにはちょうど良かったりする。時と場所を選ぶ必要があるけどな。

「私は無機物じゃなくてハッチーと喋りたいの！」

「別に付き合わなくても話せるだろ……」

「でも、ハッチーに彼女が出来たら無理になるんでしょ？ だったら、私と付き合った方が

よくない？」

「ハハハハ、後半何言ってるかわかんない」

俺と話したいから俺と付き合うってどういうことだよ。好きとか自分だけのものしたいからとかならまだ理解を示せるけど、話したいから付き合おうは話が跳躍しすぎじゃないか？

「落ち着け、それは一時的な感情だ。確かに桜は俺と話するのが今は楽しいのかもしれないけどな。それが永遠に楽しいと思えることはないんだ」

そう永遠に続くものなんて時間以外にない。命が尽きるように、恋も愛もいずれは終わるものなのだ。それで話して楽しいから付き合うなんて軽いノリでカップルを成立させてしまったらこれから先何かしらつまらないことがあつただけでその関係は崩壊してしまう。それなら、今の距離感を保ちつつお互い本当に好きになれば付き合えばいいし、他に好きな人ができたらすっぱり諦めればいい。

そういう風に俺が言うとき桜は真っ向から否定した。

「そんなことならない！」

「どうしてそう言いきれるんだよ」

もう既にこの状況が最悪だろう。互いの主張は違ってるし、俺は桜の考え方に理解を示せない。だから、仮に桜がどんな持論をぶつけてきても、俺は理解することができたとして納得することは出来ないと思う。

「それは、それは……」

太ももの上でぐつとこぶしを握って俯く桜。これ以上は店にも迷惑かと思い、店を出ようと提案しようとした時。桜は今にも泣きそうな顔で、それでいてとても紅潮した顔でこう言った。

「ハッチーは楽しくないかもしれないけど、私はすごく楽しいんだよ……だから、今が永遠に続かなくても、これからもっと楽しくなるかもしれないって思ったら、手放したくないんだよ……！」

今でなく、これから楽しくなる可能性があるなら、それを手放さないようにずっと大事にしておきたい。それが桜ねねの本心と知った時、俺は何を言えばいいのか分からなくなつた。

だが、今この場での最善策としては、机に顔を伏せてすすり泣きをする桜の背中をただ撫でるしかなかった。

「……う、子供扱い、しないで……」

「そういうのは泣かなくなつてから言え」

ポンポンと優しく背中を叩きながらそう言うと、徐々に桜の呼吸はゆつくりとしたものになる。俺達のことを見かねた店員さんが水を持ってきてくれて、それを桜に飲ませ

ると幾分平静を取り戻したのか目元を拭って鼻をかむと俺の方に向き直る。まるで、俺からの答えを待ってるかのよう。

「……はあ、わかったよ。」

「ほ、ほんと?」

「ああ、俺はお前が俺と最高に楽しいと思える会話をするまで誰とも付き合わない。これでもいいんだろ」

要するに桜が俺と付き合いたいと言い出したのは、俺が誰かと付き合い合つて話すことが出来なくなる危険性を見越して『だったら先に私が付き合い合えばいいじゃない!』ということだろう。自分で言つててまだ良くわからないが多分そういうことだ。

ならば、その仮定を消せばいい。俺が誰とも付き合い合わなければ桜は俺と付き合い合う必要性は無くなるし、俺も余分に時間や金を取られることもなくなる。お互いにウィンウィンな関係だ。

「うーん、なんか違う気がするけど…まあいつか」

桜も納得したらしいし、これでいいだろ。

今日はこれにて閉廷。解散だ。

…にしても、会話が楽しいから付き合うって発想は本当にどういふことかさっぱり分からねえわ。